

～機動戦士ガンダム0
0×オルタネイティブ
～

ガンダム・刹那・FF・セイエイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

機動戦士ガンダム00とマブラヴ・オルタネイティブのクロスオーバー小説。

目次

第1話「ガンダム再起」	1
第2話「人類の敵」	8
第3話「香月夕呼」	25
第4話「刹那な邂逅」	47
76	
第5話「オルタネイティブ計画」	
第6話「決意の瞳」	111
第7話「殲滅者」	140
第8話「予感と兆候」	181

第1話 「ガンダム再起」

『会いたかった…会いたかったぞ、ガンダムッ!』

『フラッグ、疑似太陽炉を……、ビームサーベルまでッ!』

『ハワードとダリルの仇、討たせて貰うぞ!このGNフラッグで!!』

『…!貴様は…!』

『なんと!あの時の少年か!?!やはり私と君は運命の赤い糸で結ばれていたようだ。そうだ、戦う運命にあった!!』

『あぐ…ッ!』

『ようやく理解した。君の圧倒的な性能に心を奪われた…この気持ち、まさしく愛だッ!!!』

『愛!?!』

『だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる!いきすぎた侵攻が内紛を誘発するように…』

『!!…それが分かっているながら、何故戦う!?!』

『軍人に戦う意味を問うとはナンセンスだなッ!』

『ぐ…ッ、…貴様は歪んでいる!!!』

『チイツ…! そうしたのは君だ! ガンダムという存在だッ!! だから私は君を倒す! 世界などどうでもいい…己の意志で!!!』

『貴様だって…! 世界の一部だろうに!!』

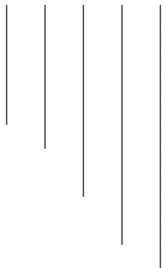
『ならばそれは、世界の声だッ!!』

『違う! 貴様は自分のエゴを押し通してるだけだ!! 貴様のその歪み、この俺が断ち切る!!!』

!!!

『よく言った! ガンダムウウウウウ!!!』

『うおおおおおおおッ!!!』



??? 「——う、くつ………ここ………は………俺は一体……？」

目が覚めた時には薄暗い闇が広がっていた。

感覚的に長い間気を失っていたようで、視界の狭さや覚醒しきれていない頭がそれを体現している。

それでも無理矢理に思考の乱れを振り払い状況確認に徹し。

まず確認するまでもなく体感的に重力下、すなわち此処が大気圏内の地球だという事を認識する。

??? 「——…まだ視界が歪んでいるが………コクピットの中か？」

指先を手近な箇所に合わせて感触を頼りに数度確かめると機械的な硬さ、それも常に触れていたような其れは直ぐに己が居る所在を把握するに十分足りていた。

声の主に反応するかのようにコクピット内は明るみを帯びて続け様に赤外線による網

膜認証が為され、それが完了すると同時に搭乗している機体……ソレスタルビーイングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイが駆る機動兵器ガンダム——ガンダムエクシアが機能を復旧する。

刹那「エクシアの現状は……：損傷無し。……は？損傷無し、だと？」

既に完全に意識を取り戻した頃にはすぐに次の行動に移すべく先ず周辺確認を行い。外界は暗く辺りはほぼ木々に遮られている事から今は夜で此処はどこかの森の中だと理解し。

ならば次は……と、武力介入時に何度も操作して手慣れた作業である機体状況の確認に移り。システム画面を見た限りでは損傷箇所が見当たらず、然しここで記憶の齟齬が生じる。

刹那「……俺が白昼夢でも見ていない限り……俺達は国連軍の疑似太陽炉搭載型MSと戦い、エクシアも大分消耗していたはず。少なくとも中破以上には……」

GNドライブ搭載型量産機から金色のMA及びMS、その戦闘後に現れた疑似太陽炉を搭載したフラッグと互いに機体を損壊し合った戦いの痕跡も綺麗さっぱり無くなっ
ていて。

刹那が操縦桿を握りエクシアを動かすも左腕部や右腕部にマウントされているGN
ソード、機体が歩行出来ている現状からコクピットより下も損傷無いたが示される。

更に金色の機体と戦った時に喪失したビームサーベル等の各武装も各所にマウントされている事を機体画面で確認し、その際に極めて不可思議な事象にも気付き。

刹那「GN粒子のチャージ率、100%……」

ガンダムのメイン動力源として接続されているGNドライブから永久的に生成する粒子は、当然機体を動かせばその分減っていき、簡易的な動作なら数値に反映される前に増加され、結果粒子残量は今の数値で固定化される。

これならば何も驚く必要はないのだが、機体の激動や粒子兵器の使用等に到るまで、所謂戦闘行為を行っていればこの数値は当然異常となり。

仮に数日意識を失っていて、その間に粒子生成が完了しているなら話しは別だが刹那にその感覚も無く、第一動作でも身体の衰えは微塵も感じなかった。

刹那「…考えても今は仕方ない。機体が万全なのは寧ろ好機とみるべき…兎に角、今は敵機影を注意しつつ一刻も早く他の皆の現状確認を……」

機体状態を把握した刹那が早々に己の属する組織の仲間を探そうと決め、信号を送ろうとしたその時警告音がコクピット内に鳴る。

私設武装組織として活動する各機体には認識外の人為的、非人為的に関わらず当機に接近する物体に反応するセンサーが搭載されている。

その為このシステムを掻い潜れる程のステルス機能持ち以外の敵影は基本的に感知

出来る構造になっている。

そしてその警告音が鳴るとなればそれは何らかがこのエクシアに接近している事に繋がり。

刹那「機体照合：情報無し。複数の機器的反応と……生物反応？」

更にコンソールを操作して詳細確認を行うがトレミーが有する情報に該当しない事しか判らず、更に熱源感知とは別の反応も確認出来た。だが刹那の中ではまず注意すべきは機械的物体の反応と判断し瞬時に臨戦態勢含め頭を切り替え。

そして次に鳴り響いたのは、爆発音と思わしき猛々しい轟音——。

刹那「……！エクシア、現地より直ちに離脱。必要なら可能な限り武力介入を開始する！——」

刹那の決断はほんの数秒にも満たなかった。

エクシアの背に搭載されたコーン状の動力機器から機体が再起したのを示すかの様相で薄い緑色の粒子が輝きと共に放射され、次に頭部メインカメラの光が灯り、地から浮上する。

ここから始まる

刹那・F・セイエイの新たな武力介入が――

第2話 「人類の敵」

刹那「位置情報もトレミーの応答もなし…」

木々の隙間道をエクシアが抜ける中、刹那は片手間で位置情報や味方への通信等取れる手段を講じてアクセスを試みていた。粒子散布の領域内でもトレミーとの回線は繋がっていれば問題なく取れるはずだが結果は応答なし。脳裏を過ったのは母艦の轟沈——激戦の中で今の状況含め今一記憶の曖昧さが窺えるようだが仲間の安否に関する情報が皆無ではこれも今は思考するだけ無駄だと気持ちを切り替えた刹那は舌打ちと共に真つ直ぐに爆発音の下へ機体を飛ばしていく。

僅か数秒潜行していたに過ぎないも段々と騒音の大きくなる事から目的地に近付いているのが分かる。接近すればする程銃声や何らかの爆発音が増していき、近場で戦闘が行われているというのは間違いはない。

刹那「……！」

そろそろ森を抜けるというところで木々を薙ぎ倒しながら直進する物体の後ろ姿を前方に捉える。

姿形は遠目ではイマイチ確認出来ないが何かを感じた刹那は瞬時にGNソードの刃身を折り畳まれた状態から展開し――

刹那「邪魔だッ！」

擦れ違い様に一閃。

その間に振り向く“ナニか”は粒子を纏わせて切断力を増した鋭い刃に綺麗に斬り飛ばされ、高速で推進していく機体を後に“液体”を噴き出して地に伏せる。完全に機能停止したようだ。

『くそ！残っているのはもう俺達だけか!?!』

『た、大尉……私達……孤立したのでしょうか……?』

『いや、恐らく全滅したと思われる……』

追い詰められたように一ヶ所に集まる戦術機甲部隊、三機の戦術歩行戦闘機が右手に

持つ87式突撃銃を構えて常に臨戦態勢を取るが中のパイロットからは苛立ちや覇気の無い声、いずれも恐怖を腹に抱えて通信回線で話し合う。

女性パイロットに問われた大尉も外面では毅然を装っているもやはり声は僅かに震えている。

『死にたくない…わ、わた…しは…』

『氣を確り持てクラフト4！奴等もかなりの数を失われている筈だ！いまだ我々が生きているのがその証拠であらう！』

遂には泣き言をもらす女性へと上官の叱責が飛ぶも恐怖を拭いきれていないのは次の言葉で分かりきる。

『嗚呼、嗚呼…あかりい…后澤…名瀬…晴ヶ崎イ、…真奈子オ…』

『そうでありますよ！まだ光線級すら残っている！先程名瀬が撃ち抜かれたのを見たでしょう！俺達アもう終わりです…』

呪詛の如く呟くのは同じ部隊だった者の名。既にこの世を去ったであろう盟友達の散り様を思い出して精神的に限界が訪れたのか、普段なら絶対に反論しない上官の言葉も耳に届かず。

発声の威勢は彼女に比べればマシな若い男性。パイロットも吐き出された言葉は既に絶望を予期するそれ。

『幸村少尉、波賀巖少尉……チィ……これは帰還後に処置が必要か。……最も帰還出来たら、だが』

場の收拾が困難だと舌打ちし上官ですら色々と諦めて達観したかのように、しかし最後の言葉は小さく呟く。錯乱しているとはいえ部下に余計な不安を煽る気は無く強い芯で見据えた先には森を押し退けクラフト隊に接近する要撃級。

死の8分を越えるほどの戦闘の末にお互い陣形は乱れはぐれ状態と化しているも追っているのはBETA側、追われているのは人類側僅か三名。

幸いなのは部下二人がまだ要撃級の存在に気付いていない事、この場で取り乱すのは殆ど死と直結する上に一匹だけなら大尉の不知火でどうとでもなるのが、”あの”BETAが一体で納まる筈が無く恐らくは既に周辺に展開されていると予測して敵を迎え…突撃銃を向けた頃には二人の少尉達も要撃級を捉えた。

女性少尉『?!』

男性少尉『…!!』

クラフト隊大尉「ふっ……年貢の納め時か。ただでは死な——」

そして大尉が言え終える間も突撃銃を発砲する間もなく、要撃級の尾と右腕の関節から先が弾け飛んだ。

女性少尉『…え』

男性少尉『…は?』

クラフト隊大尉「馬鹿な、私はまだ——!」

動揺する部隊を余所に要撃級の亡骸を背に高速物体が飛び出してくる。

刹那「!これは…血?」

白と青でコーティングされた剣を振りかざした機体、彼等から見たらアンノウンの機影がクラフト隊不知火の前に降り立つと要撃級を斬り払ったGNソードを振り下ろし、その瞬間地面に鮮血が撒き散り刹那が視界に捉えた刀身にも微かに血痕らしき液体が付着している事に気付く。

クラフト隊大尉『(なんだ、あの機体は!?)』その機体。支援感謝する。所属部隊と階級は?』

刹那「……………」

クラフト隊大尉『…?…?…兎に角今は…クラフト4、クラフト7。奴等は直ぐそこまで来ている。加勢が来た今のうちに一気に離脱を——…おいクラフト4! 応答しろクラフト4!クラフト7!…チイツ!回線に不具合か!?!』

女性少尉『クラフト1! 一体何が!あの機体は!?!』

男性少尉『クラフト1!クラフト4!くそ、こんな時に通信障害!?!』

オープンチャンネルで呼び掛けた筈が画面にも音声にも全く反応が見受けられず仕方なく同部隊の部下へ指示を出す。しかし大尉の呼び掛けに応答は無く、それは少尉達も同様で事態はより混乱を招く事に。

彼等は当然知識に無いがGN粒子の領域下では通信システムに影響を及ぼす為、その対策を講じなければ結果は見ての通りである。

クラフト隊大尉『くつ…！各機無線通信に切り替えろ！聞こえるか!?クラフト4、クラフト7！』

女性少尉『…！クラフト4よりクラフト1！迪々しいですが聞こえます！』

男性少尉『クラフト7よりクラフト1へ、自分も無線でなんとか！』

クラフト隊大尉『よし、各機！フォーメーション6で二時方向へ——』

それでも諦めず無線通信を試みれば雑音混じりながらも辛うじて通信が繋がり、安堵の反動で先程の混乱状態が幾分か回復したのを確認すると好転に士気を増して一気に指示を下すが。

刹那「…新手か」

木々を揺るがす震動とそこから現れた数多の存在に即座に反応する刹那。

女性少尉『あ…ああ…』

男性少尉『………！』

クラフト隊大尉『ぐぬ……撤退が遅かったか……!』

遠目だが薙ぎ倒される木々は先程の非では無く突撃級を先頭に携えた異形の軍団を
確認する。

刹那「先程の”アレ”といい……恐らく生態兵器。人革連側が関与は……」

地面に付着した血痕と倒れ伏す要撃級の亡骸から既に何らかの生態兵器を造り其れ
を虐殺型オートマトンの様に扱っていると予測し、発生源を思索する。

非人道的だが超兵等の前科を抱える人類革新連盟に白羽の矢を立てるも予想に過ぎ
ず三国連合を結成した今となつては迂闊にそんな暴挙は働けないとも勘繰り、増援の接
近を伺い再び思考を前線へ。

クラフト隊大尉「あの数……ここまでか」

刹那が思考を巡らせる一方で部隊指揮を執り行うはずの大尉の失念。一週間前に任
官した若手と実戦経験の浅い女性衛士との戦力では突破不可能と判断し、突如現れた謎
の機体はその能力も皆目検討着かず。要撃級を背後から斬り伏せた時に見せた機動力
からある程度は腕が立つと見込めるも気休めでは戦力差はほぼ全く埋まらず。

しかし戦術機が最良なこの世界の大尉は知らない。謎の機体が永久機関動力で動く
上運動性も機体出力も、その驚異度も。

刹那「ガンダムエクシア、目標を駆逐する」

眼差しの鋭利さを増して一気に操縦桿を引いて倒し、待機状態より一層多くの光の粒子を散布すると素早く地面から僅かに浮上からの急速移動。

大隊規模を前に単機飛び出すエクシアに部隊の三人は勿論驚愕する。

クラフト隊長大尉『馬鹿な！死ぬ気か!?!』

無謀とも思える突貫に後退しながら依然繋がらない通信で訴えかける。

3機の不知火が侵攻側と反対の木々へ迫った頃にはエクシアと森を抜けた突撃級が正面から対峙する。

隊の誰もが「終わった」と思った時にはエクシアの振り上げられたGNソードが斜め垂直に風切りを超越した速度で振り下ろされ、直ぐ様通り過ぎた直後に信じられない光景を部隊の面々が目撃する。

男性少尉『なっ！突撃級の装甲殻をあんな易々と斬った!?!』

クラフト7と呼称される若手衛士が言った通り、突撃級はその強固な装甲殻ごと図体を真っ二つに分断させられていた。

粒子を纏い切断力を底上げしたGNソードは実体剣の限度を超え、それがダイヤ以上の硬さやEカーボンのような特殊装甲であろうと殆どは問答無用で斬り刻め切断できる。

刹那「さっきの奴より手応えが鈍い…あの殻は盾替わりという訳か。だがそんなも

の、エクシアの前では無意味だ」

実体剣での突撃級正面断罪を軽く成した事に驚く間も止まらぬエクシアの機動性にも目が追い付かず、棒立ちのこの状態を普段ならば激しい叱責で正す上官事態も今は目の前の光景に思考を鈍らせる。

突撃級を真つ向から切断した実体剣が次々とBETAの群れを薙ぎ払う。そして何よりそれを可能にしている機体の素早さや身軽さ機動性全てに圧倒：辛うじて視認する範囲で分かる事が謎の機体は従来の戦術機では絶対に不可能な動きをこなしている事実だ。

クラフト隊大尉『信じられん…』

女性少尉『あの戦術機……いえ機体は一体…!?!』

それは一度は戦術機と口にしながらもその枠に囚われず敢えて言い直した事からも容易に窺え、本来は拳動の間に僅かだが硬直が入りそれ故に余程手慣れた衛士でもなければBETAを近接で一方的に斬殺し続ける事は無理難題。それもエース級で、それでも数の暴力に負ける事さえあるのだ。

繊細な各部動作はあの横浜基地の魔女が新たに仕立てたOSである程度緩和されたのは近隣では割と周知だがまだ極秘な上にその存在も自軍の基地内では大尉を含めて三人もいない。

刹那「小型種を確認。取り付かれる前に上空から全て殲滅する」

いつの間にか先行した突撃級及び要撃級をほぼ壊滅させ更に続く戦車級をはじめ兵士級や闘士級を目視したのかエクシアが粒子散布量を上げて広場から一気に上空へと舞う。

クラフト隊大尉『…ッ!!高度上限を無視!?なにを考えている!!』

衛士ならばその暴挙に思わず声が張り上がるのも仕方なく高度を取った飛行に目を見開き、今度こそ駄目だと頭片隅を過り額の汗が垂れ落ちる。

この時は大尉すらも忘れていたが、制空権を取る前の地上戦で見せたエクシアの機動力とそれに反対できる刹那の腕を今度は上空で見せ付けられるなどと思ってもよらず。

大尉・少尉『…ッ!?!』

刹那「…!!熱源感知……………これはビーム、いやレーザーか…」

機体内で一度鳴る警告音に直ぐ機体の軸を反らし小さく旋回しながら光線級から放たれたレーザー砲を軽やかに回避。

男性少尉『嘘だろ…』

勿論上級衛士ならば光線級のレーザーも回避可能なのは熟知の範疇だがまさか軽々と避けてしまうとは…と驚愕の極みに。

反面刹那からしてみれば常に、それも太陽炉搭載型を相手にするようになってからは

頻繁にビーム兵器が飛び交い撃ち合う、まして中には遠隔型3次元飛翔兵器まで使う敵がいた戦場に身を投じていたのだ。そこには淡々と何の感慨もない様子がみられる。

刹那「威力は不明だが、照準は正確だった。……狙い撃つ！」

男性少尉『…なッ?!』

高い照準性は読み易く回避には難なくレーザーは掠りもしなかったが、しかしその正確な狙撃は刹那の中でとある男を思い浮かべ、今まで一変もしなかった表情がヘルメツトの奥で歪む。

ならばとその男の習わしに従って彼の砲撃時の台詞を紡ぐと共にGNソードの刀身を後ろ腕へ畳むと接続部から現れた銃口をレーザー照射の方角へと向け、拡大モニターで捉えた小型種へ粒子ビームの一閃を放ち着弾した地点は小規模の爆風が巻き起こり光線級が跡形も無く消し飛ぶ。

クラフト隊大尉『レーザー…いや……ビーム兵器だ?!』

エネルギー貯蔵や開発などで携行が困難とされる一般人には半ば空論の兵器とされる粒子砲に何度目かの驚きを露に身を乗り出す。

目の錯覚を疑う光景に特に女性少尉の衛士など啞然とエクシアが飛翔する空を見上げるも尚もレーザー照射を掻い潜り、更には左腕に持つGNシールドで完全に防いで返しに粒子砲を放ち光線級を次々駆逐する様にこれは現実のモノだと漸く認識。

クラフト隊大尉『……！レーザーが止んだ……？レーザーヤークトを、…完遂したというのか？単機で、それも間違いないく世界最速で……』

ライフルモードの粒子砲が幾度も降り注いだ末についてはBETAからの光線は止み、その驚愕の事実を嘔み締めるような口にする。

刹那「……」

レーザーとビームの応酬を制した刹那は残りの地を這う小型種を見下ろす。森を抜けて対人探知が示した（上空のエクシアを除く）機体へと一目散に向かう。

クラフト隊大尉『……ハッ！しまった！クラフト隊各機、小型種の接近を許すな！一網打尽にしろ！』

女性少尉『りよ、了解！』

男性少尉『ありえねえ……まさか米軍の新兵器か？奴等G弾以外にもこんな』

戦車級等が次々と這い寄るのに大尉も気付けば部下にも警告。女衛士は直ぐに応答して対応に勤しむも新米衛士の方は未だ信じられない光景に嘗てのトラウマも淡さったのか上官命令を、それも小型種接近警告を無視という痛恨のミスをしてしまう。

クラフト隊大尉『チィッ、最早P.T.S.D状態か。しかしアレは確かに米軍の新型と言われても不思議では無い。横浜パイプの前例がある）なんだろうと、貴様ら地球外起源種は滅ぼす！人類の敵めえええ!!』

刹那「……！」

大型種が討伐されたお陰か消耗した今の自機でも十分やれると判断したのか、もしくは意地か。大尉の思考も自ら振り払い突撃砲をもう一挺左手に持ち二挺の砲撃が次々と小型種を撃ち抜いていく。

女衛士の不知火も支援突撃砲合わせて放ち続けその度に距離の近い兵士級や闘士級に着弾し薙ぎ払っていくも数の多さに早くも押され気味となる

刹那「…人類の敵…世界の歪み」

その最中偶然にも無線から漏れた音声通信がエクシアに届く。光回線を応用した技術を使用しているのか微かに噛み合った結果聞こえた”人類の敵”という部分に反応する。

女性少尉『くっ…クラフト7！支援砲撃を！クラフト7!!』

男性少尉『……………』

射ち漏らした闘士級や戦車級が不知火へと迫る。

傍らの少尉は反応すらしなくなっていた。

刹那「その歪み……この俺が破壊する!!」

俊敏な闘士級が一足先に男女の少尉が駆る不知火の足へ組み付こうとした瞬間、光線を全滅させてから動かずにいたエクシアが刹那の破壊宣言と共に急降下しつつGN

バルカンを連射。その弾速故に不知火へ迫る闘士級の頭が撃ち抜かれ弾け飛び、次々と無作為に地上の小型種へと砲撃を浴びせ続けライフルモードの粒子ビームも加えて容赦なく戦車級等の撲滅を執行していく。

女性少尉『!くつ、このお…!』

クラフト隊大尉『全く、何から何までなんて性能だ…』クラフト4!流れ弾には気を付けろ!』

失意の衛士を除いた二機の不知火も突撃砲掃射の手を緩めずに、エクシアは地上付近を飛び回り隅々まで異形の排除に専念。

武力制圧が完了したのはそれからほんの数分も掛からなかった。

クラフト隊大尉『改めて礼を言わせて貰う。お前さんが居なかったら俺達三人は全滅していた』

周辺警戒も終わった頃、弾薬も尽きた自機の武装を解除して語り掛ける。

刹那「……………」

女性少尉『私からも是非お礼を。一時は死期を悟りました……………本当に、本当にありますがとう御座います』

上官に続いて部下の女性も漸く気が抜けたのか涙声ながらも感謝を述べるが反応はなく、遠目から此方を伺っている3機目不知火を他所に通信画面で困り顔を送り合う大尉と少尉。

クラフト隊少尉『……………部隊名と所属を教えてくださいませんか？』

しかし規律は遵守すべきと改めて通信で試みる。幾ら命の恩人といえど所属不明機、それもあれ程高い機体性能にBETA大隊の大型種及び世界最速での光線級破壊を単機でやり遂げたのだ。ここで何事も無く仲良く基地へ帰投する訳にはいかず寧ろ内心では次は此方に牙を向くのではないかと狼狽えてさえいる。

刹那「…が……………ムだ」

クラフト隊大尉『…?すまない、通信回線がいまだ不調で聞き取れなかった。再度部隊及び所属の提示を求む』

長い沈黙の後ノイズ混じりに聞こえた声を今一度確かめるべく音声機部を耳に押し付けて復唱を促す。

そして届いた言葉は――

刹那「…俺がガンダムだ」

クラフト隊大尉『…は？お、おい！』

一言だけ。

そう言い投げて再び粒子放出量を上げる。

到底理解できず言葉の意味を探る間もなく先程まで共闘(?)していた不知火の前から急速に飛び去るエクシア。残ったのは呆然とする衛士と立ち尽くす戦術歩行戦闘機3体、そして白き機体が残す粒子のみ。

クラフト隊大尉「…ハア。まあいい…クラフト1よりクラフト4、クラフト7、帰投するぞ」

女性少尉『は、はい…クラフト4了解』

男性少尉『…クラフト7了解であります』

その不知火も自分達の基地へと向かい機体を飛ばし、今度こそ何も残らぬ跡地となつ

た。

BETAの死骸を残し。

刹那「……俺は戦う。世界の歪みを駆逐し尽くす、その時まで」
夜明けの朝日が空を駆けるエクシアを照らす中、刹那の目を鋭く世界を映す。

第3話 「香月夕呼」

横浜に聳える国連軍本山の一角とも称える基地にその女性はいた。研究内容などを口にしなければ物静かでクールな印象を持つ、しかし世界の危機に対し重大な計画を企んでいる重要人物、名を香月夕呼。

本来は殆ど自室と化している研究室に引き籠り昼夜問わず理論の構築に勤しんでいる為中々そこから出る事は無い筈が今はその場を離れ、地下19階層から移動先の主作戦時の通信管制等を担う基地の根幹とも呼べるメインモニタールームへと続くエレベーターを待ちながら呼ばれた理由を思索する。

夕呼「司令直々に声を掛けてくるなんて、まさかオルタネイティブIVに支障が生じる事件でも? …いいえ、それなら真つ先にあたしの所へ伝達が入る筈。多少関係性があるとしてもこの線はほぼ無いわね」

優雅な姿勢で顎に指を添えながら思考中無意識に口に出している事に自覚が無いままだが、機密性が多く殆どの者が立ち寄れないこの場では問題にならない。

と、暫し思案に更けていたが思い当たらずどの道作戦司令室へ赴けば分かる事だと諦めては普段の軽い雰囲気気分転換がてら傍らで同様に指揮司令部へ向かう旧友へ向

き直り。

夕呼「まりも、あんたまた眉間に皺増えたんじゃない？何時も強張った顔していたら直ぐに皺だらけになるから気を付けなさい」

まりも「…お言葉ですが、副司令殿も先程まで随分険しい様子ではありませんでしたか？」

香月夕呼の戯れに生真面目に返す神宮司まりも軍曹。彼女も同じく司令部まで呼ばれる事は珍しく無いが、訓練兵への授業を中断してまでそれも態々一度博士を呼びに駆り出された事から召集理由が重要事項であるのは二人とも理解している様子で硬い身持ちにもなるはずだが、普段通りの彼女にまりもも呆れ意趣返し半ばに副司令殿を強調。

まりも「それに私はまだ眉間に皺など出来ていませんよ？」

怒気を含んだ”イイ笑顔”を向ける。

夕呼「ほらまた。そんな事より来たわよ？」

まりも「…：夕呼が変な冗談言うからでしょう…：まったくもう」

タイミング良く降りてきたエレベーターへ指差して一蹴する夕呼に思わず敬語を忘れ不貞腐れるも当の本人は気にした様子も無く自然体で会話の応酬を繰り広げては一足先にエレベーター内へ進むと溜め息と共にそれに続くまりも。

それで上階へ向けて移動を始めると今度は遊んだ口調では無く若干真面目な顔で再びまりもを見据え。

夕呼「で：今更だけど今回の件、まりもからは何か聞いてないのかしら？あ、因みに今は二人きりだし敬語はいらないから」

まりも「…いいえ。私からも何も…：講義室まで来たのもピアティフ中尉だったし、貴方を呼ぶようにと…：他は特に聞いてないわ」

夕呼「ふゝん、そう」

となれば矢張りオルタネイティブ計画関連か？と前に撤回した予想が再び脳裏を過るも短い会話中に早々目的地への道程に着いたのをエレベーターの停滞と開く扉に教えられては軽い足取りで進んでいき。

夕呼「ま、それももう直ぐ分かるわね」

先駆者に続きまりもも再び歩を進ませると、そこからは会話無くお互いが黙々とメイ
ンモニタールームへと目指す。

場面は変わり双山に囲われた麓の森林下。刹那はその身を隠すべくエクシアを外
迷彩皮膜なるステルス機能で覆い今は粒子散布も停止している。

刹那「やはりデータに該当する事項は無し：ヴェーダとのリンクが途切れた今となっ
ては当然だが」

主観記憶にあるフラッグとの戦闘後に目覚めその直後戦地へ介入して歪な存在を駆
逐してから二日、その後も機体の粒子チャージと自身の休息を兼ねた情報収集を挟み、
それが完了しては再びガンダムを駆って行き当たった戦場へと赴き見慣れぬ機体は敵
味方の判別が出来ない為に一方的に異形へと攻撃し殲滅しては再三飛び去っていくの
を繰り返す日々。トレミーが健在だった頃に行っていた武力による戦争根絶の行為と
なんら変わらず奔走していく日常。前の戦中に何者かに情報統制システム”ヴェーダ
”のアクセス権を切られ窮地に立たされたのはまだ記憶に新しく刹那の表情が曇る。

最初こそ遭難者が持つ悩みの食糧問題さえ気にしたが何故かいつの間にかココピット

に積み込まれた携帯飲料に気付いた瞬間不可思議ではあるが一応当初の難題はクリアされている為情報の整理を進める事に。

刹那「俺が気を失っている間に飛来した宇宙人か……ティエリアではないが流石に馬鹿馬鹿しい」

そして思うのは今現在駆逐対象となっている歪な存在、ヒューマンタイプを模していない事から人外。当初こそ人革連や過激派テロ組織（実際には自分達がこれに当て嵌まるが）が陰で生産した生態兵器かと思つたがそれらしき動きも見られず全く情報が無い為に検討を見送っている。

ならば考えられる肢は他に地球外生命だと考え付くも同じマイスターの台詞を借りては思考を払い。そして近日の武力介入にて何度も目にした正体不明の機体も性能からして旧式タイプ……とはいえガンダムに比べたらという話でティエレンより一つ後か、その位置に属する量産MSくらいしか予測が着かずデータ整理を取り止めるべくモニターの画面を切り替え機体の状態を何度かに渡り確認。

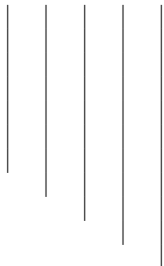
刹那「……近いな」

ある程度チェックを済ませると僅かながら戦闘行為を報せる爆発音に耳を傾け、その直ぐ直後に機体の迷彩を解除しては全システムを起動、エクシアが森の中より姿をハッキリ現すと同時に背から放出する粒子量が増して機体の身を覆い次の瞬間にはメイン

カメラの二つ目が光を帯びる。

刹那「エクシア、戦闘地点へ向かう」

誰に言うわけでも無く発した言葉を最後に麓から機体を浮上させては、光線種を気にも留めない程の高度を取り粒子を撒いては高い速度で飛翔していく。



照明を最小限に点した指揮司令室のブリーフィング用テーブルに視線を落とすラダピノット司令以下、ピアティフ中尉、涼宮遙中尉、そして二名の佐官クラス。

全員が重苦しい風貌を帯びて視線に映す映像を眺めていると通路へ繋がる扉が自動に開く機械音を耳にし、同時に意識をそちらへ移して振り返る。

まりも「神宮司軍曹、並びに香月副司令、ただいま到着しました」

夕呼「香月夕呼、以下同文です。…で？」

入室し扉が閉まる間に背筋を伸ばし確りと敬礼をするまりもと対称に変わらず適当な様子で解釈する夕呼、どうやら内心研究を中断させられた事に僅かでも不満がある雰囲気だ。

ラダビノット「すまないね、態々お呼び立てして」

夕呼「司令はお気になさらず。上官の呼び出しに応じるのは当然です」

しかし基地司令であるラダビノットには流石に敬意を払い目前まで歩を進ませると前のまりも同様に確りと敬礼をする。

ラダビノット「ああ。君達を呼んだのは他にもない、これを見て貰う為だ」

姿勢こそ正しているもその瞳の先には用件の催促を有しそれに気付いたラダビノットは夕呼とまりもを一度見流すとテーブルに撮された映像をメインモニターの大画面へと転送する。

映し出された写真に二人は勿論、既に視野に納めていた面々も再び”それ”を確認するように向き直る。そして画面を見た夕呼とまりもは揃って目を見開き――

夕呼「これは…!」

まりも「戦術機?…なっ、突撃級の正面から!」

そこに映し出されていたのは青と白をメインに塗装された背から粒子の粉を散布させている人形歩行兵器、右手に一对と化した垂直剣を薙ぎ払い突撃級を斬り飛ばしているまさにその瞬間だった。

ピアティフ「これは先日の上野の最前線基地防衛戦時に撮られた映像で、当然ながらこの基地に配備されていた機体ではありません」

ラダビノツト司令に続いて事前の命令通り画面の解説を代わりに努めるのは秘書のピアティフ中尉。夕呼達と画面を挟む形で前に出て、更に反対側へ立つのは基地のCPを担う、衛士の妹を持つ涼宮遙中尉。

遙「また前線基地防衛戦の途中に突如空から降下し、何の通信も無く突然BETAへの攻撃を行った、と…目撃報告があります」

国連軍小佐「空からだど？…高度は？」

遙「詳細は不明と記されておりませんが…少なくとも最大高度で一万mより上だと」
国連軍中佐「馬鹿な！旅団規模だぞ！？当然隊列には光線種族もいたのであろう！？」

遙「は、はい…」

補足役である遙がピアティフも持つ資料に度々目を落として告げたのはBETAと戦争を繰り広げる者には俄に信じられない内容で、当然佐官の二人が声を荒げて口を挟むと流石にたじたじになる遙。

そんな中尉を助けるようにピアティフが一步前に。

ピアティフ「驚かれるのは当然でありますがどうかご静粛に。この謎の戦術機は高々度から光線級のレーザー群を回避していると窺っています。それも一度も掠りもせず」

国連軍中佐「!?!」

国連軍小佐「掠りも…?!」

当然戦術機ならレーザーが掠めただけであの部位は焼けて爆発、下手をすればそのまま飛躍ユニットが破壊され機体は空中爆散か良くても地面へ激突し大破。

それを一本のみならず群と表したように数回にも渡るレーザー照射を回避したのだという事実には直結してしまうわけで。

ピアティフ「映像をご覧の通り突撃級の装甲殻を容易く斬れる出力と長刀の強度に切断力、更にレーザー照射の無効化——他にも何点か御座いますが特に驚異的なのが次の映像です」

ピアティフが言うトラダビノットが画面を切り替え、黙々と説明を受けていた夕呼等や先程の一枚のみしか拝見していなかった遙や佐官達も移った映像を見て遂には身を乗り出す。

夕呼「レーザー！いえ、これは粒子収束線——…：…：ビーム兵器ですって?!」

画面に映し出されたのは同様の青白の機体が地上から僅かに浮いた位置から先程突

撃級を斬っていた右腕部を突き出し剣が折り畳まれた砲身から粒子砲を放つ瞬間。

夕呼「戦術機サイズが携行出来る技術なんて……ッ！……いえ、そもそもそれ程の出力を有している可能性の方が——」

本来はレーザーもビームも扱うのは至極困難でましてや一般的にポピュラーな戦術機がそれを放つなど下手をすれば出力負けで自爆し兼ねない。極秘開発中の例の機体でさえ様々な技術で漸く荷電粒子砲を放てるレベルで機体サイズも桁違いだ。その分大出力を可能としたがそれでも殆どはかのBETA側の技術頼り。

しかし見せられた映像の装甲ごと真つ二つにする事実や光速弾を避けるだけの機動性を持つているなら粒子砲の扱いに関する問題もクリア出来ているのではと至って考え直す。

遙「その……通常では信じがたいのですが……粒子ビームはレーザー線に匹敵する程の弾速と威力、それを扱う衛士の照準も的確であるそうだと……」

まりも「それは………米軍の新型、でありますか？」

開始から転けて意気消沈でそれでも確りと補足を努める遙の言葉に険しい表情で、そして誰もが気になっていた事をまりもが問う。

横浜基地に至るまでここは敵が占拠するハイヴでありそこを奪還する為の決め手となったのがBETAの特殊元素を利用して作られたG弾なのは有名で、製作は米軍が行

いそれを事前勧告無しに撃つたのも米軍である。当然そちら側の新兵器なら敵味方に
関わらず油断ならないのは当たり前で。

ラダビノット「その件は現在調査中との事だが、その線も判明している限りでは薄い
そうだ」

国連軍中佐「そ、そうか……ふう……」

気掛かりな件もラダビノットの言葉に心底安堵した様な中佐を目尻に夕呼やまりも
は別の点を心配するも今はそれよりも重要な事柄を確かめるべく画面からピアティフ
へと視線を移し。

夕呼「この機体の衛士との交信は？」

その質問に肩の力を抜いていた中佐や小佐を含め全員の面持ちが引き締まり問われ
たピアティフへ視線を集める。

ピアティフ「残念ながら長野防衛戦ではその報告が無く……件の機体が現れた時には通
信下に不具合が起こったとしたか」

夕呼「通信障害？……ふーん、多分あの粒子が原因ね」

解答内容に訝しげになるも直ぐに説明したかのように夕呼が指差す先、映像内の機体
から放射された粒子の粉をそれぞれ捉える。

夕呼「技術や理論を解明した訳では無いからのはつきりとは言えないけど、あの光粒子

には何らかの電波攪乱作用があるんじゃないかしら？通信に限らずレーザーの認識障害、驚異的な性能の切断力も機動性もビーム兵器も、恐らくはこの特殊粒子の恩恵を主軸に受けてると推測するわ」

天才と称された博士の見解を聞いて原理は当然含めて謎のままだが納得には足りたようで頷き合う。

ラダビノット「流石は博士、香月副司令の仰るように最初はこの映像もかなりのブレを起こしており、何十回にもおける修正処置でなんとか今の状態まで持つていけたと技術班からも伝えられている」

夕呼「やはりですか…」

改めて映像を見ると確かに少しボヤけている為か機体の細部等はハッキリと見えず色合いや剣を持ちビームを撃てる事以外はなんとなくでしか判断出来ない。

この点でステルス機では無いのが基地防衛戦で目撃された時そのような事象が報告されていない為、或いは機能としては光学迷彩が備わっているがこの戦闘では未使用だと推察される。

遙「あの…此方は三日前、山梨県北社市地点で迎撃戦に当たっていた大尉による報告なのですが」

夕呼「あー、あの壊滅状態から奇跡的に生き残ったっていう三人の衛士？」

そう、実は山梨に攻め始めたBETAは横浜基地にとつても看過できる事象では無く夕呼が率いる特殊部隊を始め多くの衛士が不知火で救援に向かったのだが、その時には既にBETAは殲滅されていて丁度基地へと還る3機の不知火の護衛任務に変わったのを伊隅大尉から聞かされていた。

遙「はい。その3機の不知火の内、幸村少尉は負傷の治療、新任の少尉はPTSDを煩い処置の為帰投後に話を伺えなかったそうですが、生き残ったクラフト隊の三嶋大尉が…前の映像と思わしき機体に助けられたと断定出来る進言が」

夕呼「えッ!？」

その内容に珍しく、人前では今年初めて浮かべたであろう意外な顔をして夕呼が遙に詰め寄る。

夕呼「そんな話し聞いてないわよ!？」

遙の両肩を掴み凄じい剣呑で「なんで報告しなかったの!」や「伊隅は何をやっているの!」と捲し立てる。

遙「そのあのえつとお…!た、大尉はお話ししようとしたそうなのですがあ!副司令は多忙で後にも機が訪れず今になって…!!」

身を揺すられた遙が目を回しながらなんとか弁解。

夕呼「……………あ」

「まりも」夕呼：「貴方：」

その言葉に一昨日の出来事を思い出した夕呼が遙を揺らす手を急遽停めては暫しの間を置いて、その反応に検討が着いた面々は額や柱に手を置いたりと多様な反応を見せる。心は一つ、夕呼へ対する呆れ果てた一点のみ。普段規律に遵守したまりもとて皆の前で呼び捨てる始末だった。

確かに派遣部隊が帰還して真つ先に伊隅が夕呼へ連絡を入れたがその時ある理論構築に難攻していて内容も確認せずに寧ろ叱責までしたのを思い出し、致し方ないとはいへ結果を知った今となつてはその愚行に自らも頭を抱える。他者からすれば今日一日で夕呼の意外な姿が見れたのだがこれを役得だと思える猛者は一人で、そんな人物はこの場に居なく現在は訓練生として汗水流しているだろう。

夕呼「…ふ、ふふ…失礼、取り乱してしまいました。続きをどうぞ？」

無かつた事にしたのか前のめりの身を但し華麗に髪を掻き上げると上司以外の相手にも夕呼らしからぬ丁寧な物言いである。

しかしこれ以上の脱線を避けたいのは皆も同じくして癪だろうが今は副司令殿の対応に乗つかる。

ピアティフ「…三嶋大尉によれば最後に辛うじて通信回線が繋がったらしく、例の戦術機の衛士と話をしようです」

国連軍中佐「なんと！」

夕呼「!……へえ。それは凄いわね」

先程の騒動で遙が未だ万全で無いと判断したのか代わりにピアティフがデータ欄による情報に目を通して夕呼や佐官へと説明を続ける。

ピアティフ「ですがその……階級、所属部隊、在籍国に至るまで何も分からず。……

ただ一言『俺がガンダムだ!』と申されていたとしか」

国連軍中佐・小佐「……は?」

—————
—————
—————
—————
—————

刹那「あそこか」

双山が聳える森を抜け国軍のモノと思われる基地を抜けた最前線上空を飛翔するエクスシア。海岸先から防衛基地に至るまで例の異形と最近何度も見た量産機が戦闘を繰り広げているのをコクピットから見下ろす。

数ヶ所画面を拡大して一番多く異形が密集している地点を捉えるとそちらに機体を傾け始め。

刹那「人類の敵……」

頭を過るのは数日前、唯一あの量産機との通信が繋がった際に聞き受けた単語。あの異形へと向けて放たれたであろう言葉を囁くと次には淡々と機体を降下させていく。

数多の量産機が異形へ向けて実弾銃兵器を乱射しては白兵戦へと向かう機体は両手に実体刀を持ち斬り掛かり、異形も鋭い腕を振りかぶっている個体や自慢の殻を盾に突撃していく個体等様々な観点で戦闘行為が見受けられる。

そして異形郡の後方に構える小型種を捉えたと――

刹那「破壊する」

小型種が飛翔するエクスシアに気付いてレーザー照射を放つのと同時に宣言する。狙撃された一発目を軽やかな機動で回避すると続け様に放たれる光線は機体を円状に飛び回って、レーザーは機体を捉えられずに明後日の方向へ。

照射が一度止むと今度は此方の番とばかりにエクシアの銃口が光線を放たれた方向に向けられ、粒子砲を6発ほどその地点へ撃ち出すと地上は着弾と同時に岩影ごと抉り破碎。巻き上がる光線種の残骸が次々に地や更に後方の極めて大型な種へ吹き飛んでいく。

この僅か数秒の流れ一連を見逃す者は居なく、交戦で余裕の無い各衛士も腕に自信ありの猛者は機体を安全に滑空走行させてその光景を一遍目に通し。

美冴「光線級の照射！あの方向は!!」

袴子「いえ、これは…!」

水月「大尉！あれを!」

みちる「ああ。…やはり来たか、謎の戦術機!!」

戦乙女を冠する横浜の特別部隊面々もその例に漏れず飛来してくる粒子散布型の超高性能戦術機(?)を視認して士気を高める。

従来の戦術機からは考えられない、ラプターさえも軽く凌駕する速度で戦地へと降り立つ。

刹那「マリナ・イスマイル…やはり世界は歪みを断ち切れていないようだ。なら俺は戦いを止めない」

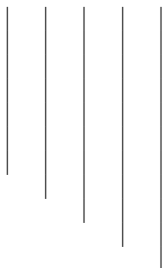
今更過るのは一国の皇女。思念を飛ばすように囁きながら最後にと送り付けたメッ

セージはどのような内容だったか……その思考は目の前の異形で払い。

エクシアは着地の直後間を置かず前進し粒子砲を撃ち出した右腕にはGNソードが携えられ、GN粒子を多量に放出して突撃し――

刹那「……エクシア、世界の歪みを駆逐する！」

武力介入が開始される。



夕呼「……涼宮、新潟の最前線防衛ラインの状況は？」

遙「え……あ、はい。現在佐渡島を離れた旅団規模が沖まで侵攻開始、戦術機は各部隊臨戦待機中だと報告を受けました。A―01隊も間も無く出動時刻に」

その後も主に司令と中佐達で議論が挟まれる間に夕呼は新潟基地の状況を遙に問い掛ける。

以前”とある筋”から手に入れた新潟海岸に佐渡島からBETAが押し寄せる予言を受けた事があった。あの時は半信半疑ながら部隊を動かしたが、実際に奴等が現れたので無駄にならずに済んだと一安心したことはまだ記憶に新しい。

その後も最前線への最良の注意を払うべく衛星監視を続けた結果再びBETAの軍勢が観測されたのがついこの前で、遙を含む夕呼直轄の部隊が出動する間際にこの件が発生したのだ。

夕呼「そう。……司令、宜しいでしょうか？」

ラダビノット「ああ、博士。構わないが……」

夕呼に促されラダビノットが振り返る。

夕呼「皆さんも。まずこの戦術機——いいえ、彼の機体を今より戦略機動兵器と呼称するわ」

現時点でも映像に映されたままの機体を指して、最早戦術機の枠に納まらない……或いは真に戦術機では無いかもしれぬ機体をその圧倒的な性能から戦略機動兵器と称して続ける。

夕呼「この機体の特性は今のところ戦術機とBETAでの交戦中における介入、武力

行使によるB A T E殲滅を助力しているけれど、言ってしまうとそれだけ。そして新潟の最前線ではB E T A生息が観測されたと報告を受けたわ」

尚も捲し立てて、画面の空いている箇所へ衛星から送られた情報も地図と一緒に追加して映し出し。

夕呼「端的に言えば次に機動兵器が現れるのは予定通りB E T Aが上陸した場合、この新潟となる」

まりも「！確かに……！」

その結論に各々頷いて新潟地区を注視。

夕呼「司令、これから私はA—01と共に……そして白銀訓練兵も連れてそちらに向かうと思います」

遙「え!？」

ラダビノット「……博士自らがか！」

まりも「それも白銀まで……て、彼は特別……でありましたね」

まりもの言葉に「ええ」っと短く応えようと気になる点を幾つか洗い出して導きだした決断を告げる。

今回は「余分」な企てを立てる必要も無く事前の勧告も無かった為部隊の出撃も前回より大分遅れたが、寧ろタイミング的には好機とも受け取れる。最もこれには夕呼の

同行相手にと挙げた白銀も”記憶に無い”と焦り関与したがっていたのでこれなら互いに都合良し。

夕呼「(本来なら彼女のチェックにもう少し時間を費やしたいけど…流石に看過できないわよね)司令、許可を」

更にオルタネイティブIVに関わる実験も今は殆どが”待ち”期間、やれる事は熟すがもしもあの光の粒子を己の手中に収められればという誘惑に魅了されてはどうしようもないでしょう?と頭の中で自分へ言い訳する。

国連軍中佐「どうするおつもりですか…?」

夕呼「そうね——これも端的に言うなら…:勧誘活動、かしら?」

許可が下る前に中佐の投げた問いに不適に笑っては、”そのまま”の意味で答える様子を見たラダビノットは頷いて。

ラダビノット「分かった。出動を許可する」

夕呼「有難う御座います」

そして司令の同意が叶えば後は逢いに行くだけ。

夕呼「さ、まりもは速やかに白銀を所定位置に呼んできてちょうだい。涼宮中尉は至急出撃準備と部隊への通達も頼むわ」

まりも「…は!承知致しました!」

遙「た、直ちに！」

受け取ったメモを手には訓練所へと駆け足で向かう教官と戦乙女達が待機しているブリーフィングルームへ向かう遙に夕呼も続き管制室を退出していく。

第4話 「刹那な邂逅」

特殊装甲車に乗る白銀武は何時にも増して落ち着きがない様子で彷徨った視界は車内のあちこちを見渡す。部隊のCPを勤める遙もそんな挙動不審状態の武を見て苦笑混じりに、だが心配そうに時折様子を伺い、更には他の隊員までもが気にし始めた頃。微妙な空気が屋内を覆う中武の向かい側に手足を組み座る夕呼がついに文句をたれる。

夕呼「つたく…少しは落ち着きなさい。あんたがそんな様子じゃ皆の気が散るだけよ」

武「うツ!?!…す、すみません。まさか衛士に任官する前に前線に出向くなんて思わなかったの」

その声に漸く我に帰った武は周囲を一度見渡した後、現状を認識して慌てて言い訳するが。その言い訳は夕呼相手では苦しいのを次の指摘で気付く。

夕呼「へえ…一週目では前線に出た事はなかったのかしら？」

突如身を乗り出してきて武の耳許に顔を寄せ、距離の近さに疑問を抱きながらもそこは一般男子煩惱宜しくで顔が少し朱に染まるが、囁かれた言葉に一気に青に変わり。

武「!?ちよツ!?!…夕呼先生エ…!」

さつきより遙かに動揺して咄嗟にまた周囲へ視線を這わせるも心配する姿こそあれ、それ以外特に変わつた様子がなく一息。

安心したのも束の間今度は怨めしそうな目を不服を込めた言葉と共に夕呼へと向ける。

夕呼「なぐに？先に変な事言つて誤魔化したのは白銀、のはずだけど？」

武「ぐぬぬううツ」

それも躲す博士様にしかし正論だけに言い返すことは出来ず。

武「ま、まあごもつとも……失礼致しました！香月副司令殿！」

夕呼「ふふ、宜しい」

非を認め言葉を改めたのは誠意の証だと、だが上面のやり取りに興味を示さない夕呼は敬礼する武へ尚も弄ぶように言う。

夕呼「思うところがあるのは理解しているけど今は状況を優先なさい。何時までもそんな調子じゃ真つ先に死ぬわよ？」

身体を離し再び向かい席へと腰を下ろすと直ぐに真剣な眼差しを送り厳しい一言が白銀“訓練兵”へと吐かれるも、武もその言葉に瞬時に気を引き締めて今度はより姿勢を正し敬礼。

武「は！再三に渡り失礼しました！」

その様子に漸く満足した夕呼は続いて無線機へ。

夕呼「ヴァルキリーズ隊の各員に告げる。今回当たる任務は新潟の最前線防衛ラインのBETA侵攻を阻止というのは変わらないわ」

夕呼達が乗車している管制用重装甲バスの後方を走るのはそれ等より遥かに大型の車両。戦術機が格納出来る程大型なトラックには夕呼直轄の特殊部隊が配置している。

それぞれが凄腕の女性衛士で構成された部隊コードA-01、部隊名「戦乙女」ヴァルキリーズ」はこれから始まる対BATE戦に皆表情一つ変えぬ真剣な目。まだ任官して間もない新米の数人は緊張と不安を腹に辿々しい面持ちだがそこを指摘する暇は無く。

夕呼「今回はこれに加えて近日噂となっている戦術機、通称“戦略機動兵器”の鹵獲を命じるわ」

『!!!』

その作戦内容に戦術機のコクピットで臨戦待機状態の彼女等は戦慄する。事前に遙からブリーフィングで伝えられているが…勿論その場でも驚愕したが、改めて直属の上官から聞かされれば別格の緊張感が漂う。

多恵『ですが例の機体が来る保証は…「ちよつ、多恵!」『でしゃばるな築地ツ!上官の作戦に口答えするなバカ者ツ!!』ツ!す、すみませんでした!!』

それでも割り切れていない多恵が物申すと直ぐ様部隊の同期である涼宮茜の声と、先輩であり階級でも上の速瀬水月から猛々しい叱責が飛んでは透かさず言動を改める。

そんなやり取りに堅苦しい上下関係にとらわれない当の夕呼はやれやれと肩を疎まし、そして立ち上がり手近なパネルを操作すると例の機体に関するデータを各衛士の網膜投影機器へ送り。

夕呼「戦略機動兵器の目撃情報はここ数日で山梨、長野、静岡、そして群馬県内における国連軍とBETAの戦闘中に限るのよ。前線かは問わず…無作為に、行き当たる場所。行動範囲の広さからして新潟に現れる確率は極めて高い。更に旅団規模が事前観測された事により当然戦闘の激化を免れなず…寧ろこれで来ないようなら一体何処で居眠りしてるのかしらって感じね。納得してくれたかしら？」

口頭でも説明。次々と語られる事柄にも一語一句聞き逃さず横槍をいれた多恵も最後の夕呼の言葉に肯定の意を示す。

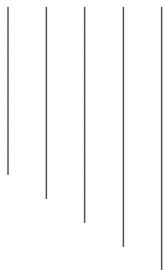
夕呼「だから先ずはBETAの掃除ね。その際に奴が介入して来たら極力離れずに最終的には囲う形にしなさい、後は全てあたしがどうにかする。いい？ 鹵獲と言っても絶対に攻撃しないように！ 万が一危害を加えたならBETAなんかにはやられるよりも速く斬り殺される事を常に意識して！」

より強く言ったのは血気盛んな水月達を意識したのだろう。作戦を無視する行為は

十中八九無いと、夕呼とて彼女達を一応信用しているが下手を討って計画に必要な戦力を無意味に失う事象だけは絶対に避けたいという旨がみられる。

『了解!!』

それに応える部隊の面々も再度気を引き締め、それは前で会話を聞いていた武も同様だった。



遡った時を進め現在、事前の作戦通り目的の機体が現れるまではBETAの駆除に専念する。規模が大きい故に他の大隊や主力部隊も数多く参戦していて戦況は今の処五分五分。

既に先行部隊はBETAも人類陣営も甚大な被害を被っているが戦える衛士は皆手を緩める事なく、戦乙女達も善戦していく。

水月「分かつてはいたけど数が多すぎるわね……此方ヴァルキリー2、状況に変化は？」

遙『ヴァルキリーマムよりヴァルキリー2へ。今の処大きな変化はみられません。なので引き続き現状を維持して下さい』

突撃前衛長を任される水月は他より前衛をいく。普通ならば戦闘真つ最中冷静に通信を行っている暇など無いがエースと称される彼女は別格で、的確に目の前の要撃級を捌いてはB小隊の援護も加勢して辺りの群を蹴散らした頃、周囲に反応が無いのでそれを問う。

応答したのは最後尾の安全地帯に停めた装甲車内にてオペレーターを勤めるCP将校の遙。常に画面に目を配らせ更新された情報は随時チェックが成されているが、水月が恐らく聞きたいであろう事態を見越してそれ含めたあらゆる意味での解答を告げ。

水月「ヴァルキリー2了解。……つたく、来るなら来るでさっさと現れなさいよね……じゃないと——」

変化の有無を聞き届け不満を漏らした後、水月が駆る不知火が自分の小隊に迫る要撃級へ向けて突撃し強硬な腕部を避けるように回り込むと手に持つ長刀で体軀を串刺し

にしてやり。

水月「コイツら全部、私が駆り尽くすわよ！」

豪快に宣言。水月が要撃級を瞬時に仕留めた合間に他の隊員も各所で活躍する。部隊長である伊隅みちるは勿論のことそこに連なる風間中尉や宗像中尉も自身のポジションを維持しながらも状況に応じて前後交代や白兵戦等に徹し、その都度速やかに元通りの陣形を維持し安定行動に専念する。冷静かつ臨機応変な闘い方に倣い後輩達も負けじと食らい付いて割り振られた仕事だけは確実に熟す。

新たなOSも手伝って目まぐるしい戦果を挙げる伊隅ヴァルキリーズに周囲の部隊も士気を上げて挑む。近年では稀にみる望ましい戦況を夕呼もモニターで確認しており。

夕呼「流石ね。あの娘達も、それに白銀が発案した新OS…実戦で見たのは今日が初めてだけど文句なしの成果よ」

武（ああ、すげえよ！俺が考えてた以上だ！）

最初から数を惜しまず投入したのも好転して準備万端でのこの防衛戦は誰の目からも善戦寄り。

夕呼自らの部隊がその中で一際BETAを多く倒していて機体の推進剤もまだ余力が残っている。本人は戦術機への興味がそれほど無くともやはり本懐を遂げる事には

開発の甲斐もあつたと少なからず喜はあるのか雰囲気に表示れる。

その立案者である武も戦場の詳細な動きまでは見れないが次々とA-01に駆逐されていくBETAに内心で浮き立つ。

夕呼「このまま機動兵器が現れてくれれば戦局的にも私的にも理想なんだけど」
武「！」

だが次いだ夕呼の言葉に一変し武は自然と真逆の浮かない顔で画面を見る。

今まではまだ会話の中でしか出てこなかったからこそ何も感慨が表れなかったのだが、実際戦場を前にして気持ち揺らぐ。この防衛戦でさえ武の”記憶にない”出来事でこれには判明した当時から困惑したまでも善戦している今はそれほどの動揺は無く。逆にこれまた記憶に全く存在しない従来の戦術機と全く違うタイプの機体が自分の身近に出現、こっちの方が今は悩ましいという気持ちが宿る。

S i d e . 白銀武

俺が辿った歴史が違いすぎる…たまの親父さんが来た時にH S S T落下が無かった種明かしは美琴の親父さんの口振りからして、夕呼先生が一枚噛んでたっぽいけど…。

佐渡島からまたBETAが新潟に流れて来んのだっておかしいっちゃおかしい。流

石にBETAを動かす程のことはまだ関与出来る訳もねえし……だが細かい変化から状況が変わる事だつてあるのは俺にも分かる。

てか今にして思えば一度目の侵攻を俺が事前に教えたからより速く体勢を整えられる事が可能だったはず。ならBETAの撃退も自ずとスムーズにいったかもしれないよな……それで二度目の侵攻が起こつたつて考えでも違和感はない。

……でもよ、戦略機動兵器だ？こればかりは簡単に受け止められるモンじゃないぞ！んな凄い機体があるならオルタネイティブ5が発動する前に絶対になんらかの動きがあつた筈で、前線にだつて出てた俺がそれを知らない!!

第一夕呼先生も、いや基地の誰も知らないのに計画に入つてる訳がねー！それとも俺が世界を知らないだけで実は隠し弾を用意してたともいうのか!?

くそっ！考えれば考えるだけ埒があかねーし……普通に考えりや心強い味方がいるのは寧ろラッキーだろ？

……………味方、だよな……?

つて正体不明言つてたじゃん！つまり敵でもなけりや味方でもない——少なくともBETAにだけ攻撃してる内は安心していいのか？駄目だ……どうにも胸騒ぎが治まらねー。

武「夕呼先生、本当に大丈夫なんですか？」

夕呼「なにがよ？」

なにがって、そりゃあ先生が待ち焦がれてるモノに決まってるじゃん。

武「その戦略…えっと」

夕呼「戦略機動兵器。正式名ではないけどね」

武「その事です。危険はないんですよ、ね？」

恐る恐る聞いてみる。

夕呼「白銀エ、あんた何今更？危険が無いなんて事あるわけないでしょ」

武「ええ！」

そんで返ってきたのは決して安心できるもんなんかじゃなく。

夕呼「当たり前よ。殺生能力がある物は分別無く危険が伴う。それは戦術機然り、BETA然り、銃は勿論ナイフだって…」

武「そ、そういう事を聞いてるんじゃないよ」

いきなり飛躍っつーか、拡大しないでくれよ。それを言ったら俺達人間だって含まれるじゃないかよ。

夕呼「同じよ、要は扱う側がどうするか次第。そして私達は謎の機体を使っているパイロットの事を何一つ知らない。無知や未知っていうのは殆どのパターンで該当するけど危険と何かしら隣接状態にあるの」

くつ：前なら「また始まった」なんて言つて聞き流すのが俺だったけど、今は先生の言つてる事が痛い位にわかる。

BETAがそのいい例だ。

武「……」

こんな事で押し黙るしかできないなんて、やっぱ俺もまだまだだな。

夕呼「……ま、白銀の気持ちも理解出来ない訳じゃないけれど……——安心しなさい。あたしが絶対に危険なんかさせないから」

だけど夕呼先生が自信たっぷりと言うと心強くて大丈夫だつて思える自信と反面、違ふ意味で余計不安になるのはきつと永久に変えられないんだろうな。

S i d e . o u t

それから暫く戦鬪が繰り広げられる。

しかし時間が過ぎ連戦が続くほどに衛士の披露も高まり今までは優勢に傾きつつあつた状況もいつの間にか徐々に押され始める。基地や安置までには及ばなぬも着実にBETAの侵攻は距離を詰めてきており、最前列の海岸は既に戦線領域から離れ放棄された市街地跡の廃墟も超えた崖道や荒野にまで達していて。

美冴「何度叩いても次々に湧いてくる、相変わらずキリがないね」

禰子「この分ですと先行組の全滅も時間の問題ですわね」

美冴「はは…そうなれば今よりも多く奴等がこちらに流れ来るだろうな」

茜「何時までもしつこい！でやああッ！」

多恵「くう…ッ！茜ちゃん大丈夫!？」

茜「ナイス援護よ多恵！先輩方に遅れを取ってられないんだから、これくらいの事で…！」

晴子「だね。ここでへばってたら後で速瀬中尉になんて言われるか」

水月『かくし〜ら〜ぎい〜、聞こえてるわよ!』

またA—01部隊も宗像美冴と風間禰子は突撃砲を両手に精度の高い射撃で射程範囲内の大型種を撃ち抜き、涼宮茜を始めとした元207A分隊の新米少尉も各々拮抗しているがBETAの物量に中々突破出来ないで、取り零した個体を抑えるので手一杯になっている正にその時、地上から放たれた閃光の線が空を裂いてその圧倒的なまでの存在感を示す。

そして――

美冴「光線級の照射！あの方向は!？」

迫ってきた小型種の団体を禰子との連携で全滅させた美冴が見上げ。

椅子「いえ、これは……！」

その椅子も続け様に空へ視線を移し。

水月「大尉！あれを！」

部隊の周囲に散開していた要撃級連隊の最後の一匹を長刀で絶命させた水月が直ぐ様部隊長へと伝え。

みちる「ああ。……やはり来たか、謎の戦術機!!」

伊隅ヴァルキリーズの部隊長であるみちるが応えると遅れて全てのA-01メンバー、そしてこの戦場に居る衛士達が介入者に気付く。

武「……！」

夕呼「来たわね！」

それは最後方にいる夕呼や武達も同様で。

刹那「……エクシア、世界の歪みを駆逐する！」

射角内に捉えた飛行する物体を射抜くべく照射されたレーザーに対して機体を瞬間加速させて難なく避けるガンダムエクシア。

一通り回避すると早々に己へ撃つてきた光線級の場にライフルモードの粒子砲弾を放ち何体もの小型BETAを吹き飛ばすと空中から降り立ち、これもまた間髪を容れず

急速に分散された要撃級へと突撃しては展開した刀身で真つ二つに斬り抜け次から次へ大型種を薙ぎ倒し小型種にも容赦なくライフルと左腕の粒子バルカンの嵐を降らし
て一掃。

刹那の到来で今までは拮抗していた戦況は大々的に変わりエクシアの通った道は突
破口へと繋がる。

『な!?!』

『あの数の要撃級をしかもあんな一瞬で!?!』

偶々その場に居合わせた衛士達はその鬼神つぶりな戦いに度肝を抜かれたようにエ
クシアの去った方角を見てただ驚く。

『報告通りだ。全機通信を切り替え動ける者は直ちに前線へ迎え!』

『ガルバルディ隊了解!』

GN粒子による通信障害の影響を考慮した指示が下ると多少ノイズが混ざるも辛う
じて繋がる音声に従い何機もの戦術機部隊が戦線に復帰していく。

何匹ものB A T Eの亡骸や既に朽ちた戦術機の残骸を置き去りに疾走するエクシア
が最後尾の要塞級を捉える。

美冴「見つけたぞ!」

麻倉「香月副指令!例の機体と合流しました!」

椅子「要塞級に向かつていきますわ!!」

更に別の場所で戦っていた美冴達A―O1C小隊も横道からエクシアと要塞級を発生し接近。

刹那「やはりいたか：超大型生物兵器」

対する刹那は美冴達の不知火に見向きもせず目の前の巨体を見据える。

ここ数日人類とBETAの戦争に介入していた刹那は当然のようにその存在を知っていて、要塞級に接触するより前に機体を上昇させる。距離を完全に把握したように巨体を飛び越えてはそれ以前にエクシアがいた箇所に溶解液が射出されるが当然そこには既に標的はいなく。

刹那「遅い!」

要塞級が背後に回ったエクシアに正面へ振り返る間もなくその際肩と胴体を繋ぐ結合部が落下時にGNソードで斬られ、そのままビームサーベルを抜刀されては尾節の結合部も斬り付けられ、その流れで逆側の肩部も同様に斬り裂かれて、トドメとばかりに頭部を真上からビームライフルに撃ち抜かれる。

麻倉「ッ！要塞級すらあんな軽々と!」

美冴「まるで解体ショーだな：しかもあんな隠し武器まで持っているとは」

溶解液の噴射以外攻撃はおろか行動さえも許さねず返り血も浴びぬ程の速さで何度

も巨体を華麗な機動で斬り裂く圧巻さ、映像には写っていないが故に情報にない刀身全てがビームで形成された刃もすっかり確認すると流星の美冴も舌を巻く。

椅子「…ツ!?…こちらヴァルキリー4、対象をロストしてしまいました」

みちる『ヴァルキリーからヴァルキリー4へ、了解した』

その間も接近の速度を緩めず先行していた椅子の不知火が横道を抜けて公道へと出た時には既にエクシアの姿は無く、目前に転がる成れの果て同様に2体分と思われる各部位を切断されて転がる要塞級の亡骸と辺りに飛び散る鮮血のみで。中には尾から触手を出したまま伏せた個体もおり恐らく爪状に尖った衝角で攻撃した時切断されたのだろう。

難攻していた防衛戦もたった一機の登場で一気に巻き返され後方部隊に大幅な余裕が生まれる。

茜「くっ…駄目、引き離されるばかりでまったく追い付けない…!」

多恵「うう…ツ、…こっちもうちよつとで推進剤が切れちゃうよ…」

そしてA―01B小隊はその隙に何とか崖の頂上付近を飛ぶエクシアを捉え、走行して開けた道の地上から追尾を試みるが現状引き出せる最高速度でも僅かに届かずこのままではC小隊同様に見失う可能性が高まり、新兵にしては信じられないほど長く食らい付いている涼宮茜と築地多恵も驚異的な速度に疲労が溜まる一方となり。

水月「二人とも良くやった。だがもういい…お前達はA小隊に合流して確固陣形に参加しろ。あの機体は私が追うッ！」

茜「ッ！大丈夫、です！まだまだ…!!」

これ以上小隊での追撃は後輩二人に負担を掛けるだけだと判断した水月から出された指示に足手まといだと宣言された気になった茜は意地を張るが。

水月「その気概は嬉しいけど、だったら尚更伊隅大尉達の力添えになりなさい。あ、予め言うけど別にあんた達が邪魔で言ってる訳じゃないからね？」

茜「で、ですがそれでも速瀬中尉お一人でなんて無茶ですよ!!」

茜の考えを見透かしたような弁解を付け加えて諭すも尚も引き下がらない。言葉とは裏腹に次第に涼宮機及び築地機と水月が駆る不知火との距離に差が出始め。

水月「…無茶ですって？」

遙『ヴァルキリーママより各機へ。光線級の全滅を確認、高度2kmまでの安全が確保されました!』

その間にヴァルキリーのCP将校である遙からの通信を聞いた水月は――

水月「突撃前衛長を、ナメンじゃないわよッ!!」

茜や多恵、そして追う機体へ向けて吠えた瞬間、急激に加速して突撃前衛仕様の不知火が本来なら決して行われない様な上昇走行を披露し依然と開きつつあったエクシア

との差を瞬間加速で一気に縮めていく。

多恵「ええええ!？」

茜「ウ、ソ…でしょッ」

完全に取り残された二人はあまりに荒唐無稽な出来事に驚き思考がフリーズ、今まで食らい付いてきたスピードは瞬時に態を潜めて失速していく。

水月「さあ、鬼ごっこといきましょうか！」

刹那「——？後方に追跡機…エクシアの速度に匹敵する？」

最後の光線級を闘士級ごと粒子砲で撃ち抜いた刹那は周囲の異形反応が無くなりBETA前衛部隊が全滅したと判断してはエクシアを再加速させる。その途端、機内で鳴る接近警告音に訝しみ、後方モニターを拡大画面で開くと追撃してくる水月の不知火に気付き。

負けん気で追ってくる機体を躊躇無く振り切るべくしてGN粒子の放出量を上げ更に加速するも水月も負けじとスピードを増して対抗していく。

刹那「チイツ…あの機体、今までの奴とは違う」

この状況に砲撃、もしくは近接武装で白兵戦を仕掛け振り払えないならば撃墜するか否かを考慮するが水月の不知火がまだ発砲してきてもいない内に己から危害を与える

のは紛争根絶を目的とする組織の理念にそぐわず、後方に控える異形の殲滅を優先する意で己を納得させた刹那は追撃機を警戒しながらも放置する選択を取る。

水月「もう逃がさないんだから……ッ」

遙『水月!?! 茜から聞いたけど無茶は禁物だよ!』

最初こそ攻撃されるのではと内心ではヒヤヒヤするも一先ずBETA以外に戦意をみせない目標に一寸の安堵を覚え。

それでも一切の集中力を途切らせる訳にはいかず細い一本道に差し掛かった処で改めて操縦桿を握る拳により力が込められる。直後に単独先行を聞き付けた遙からの通信が届く。

水月「大丈夫だつてッ……こんなの神宮司教官の鬼扱きに比べたら……!!」

遙『でも……!』

水月「それに——」

虚勢を張っている様子が無いのは親友として伝わるが、それでも心配事は拭えぬといった表情を操縦の傍らで見ると対妨害技術である程度GN粒子の影響を緩和させた前方を映した機体の映像データを転送し。

遙『!これって……!』

夕呼『……へえ!』

武『ッ!?…マジかよ』

水月「あいつの前のの方が案外安全だったりして…勿論、追い付ければの話だけどね…ッ!」

送られてきた映像を見た遙、それに武までもが息を呑む。対して夕呼は特別驚いた様子はないが感心の意を宿し。

水月の前を飛ぶエクシアが少し前に後方のBETA群と遭遇し間もなくまず突撃級へ距離が縮まるまでの間ライフルモードの粒子砲を絶え間なく撃ち続け、直進のみの個体は一切誤射なく命中。装甲殻ごと身を射抜かれた突撃級は何体も転倒して真後ろの同種に弾き出され、そのBETAも前へ出た途端ビームの餌食となり同様の屍が出来る。そして接触した矢先に両肩から柄を2本手にそこから粒子砲同様のビーム刃を形成して縦横無尽に振り回し次々と突撃級を両断。

前衛が全滅すると続いて現れた要撃級の群。ビーム刃から両腰側部にマウントされた短長二種のGNブレイドに持ち変えてはこれも特段苦もなく片っ端から斬り裂いていきBETA側は反撃の隙すら与えられず、またただでさえ崖道の横幅に余裕がないのに加えそれがより狭隘な場に差し掛かるとブレイドからGNソードに再度切り替え、振り下ろしたまま推進していくと粒子を纏った実剣は縦から真つ二つに切断。狭隘な道がBETAの屍で埋め尽くされていく。

ここまで開ければ光線級のレーザーが飛んでくる筈も今は亡き最前線組が奮闘したのだらう、その姿は何処にも見当たらず遙が言った光線級全滅の報に誤りが無かったのが証明される。

勿論この際には水月も速度を緩め二挺の突撃砲で一応エクシアを支援する形を取るがあくまで距離を合わす為の行為であり、現に今も尚追撃機を抜かず離されずに食らい付いている。

水月「それでも奴等の薄汚い血が何故か私の不知火にだけぶつかかるのは癪に障るけど、ねッ！」

この言葉通り高速白兵戦によりBETAが斬られる度に噴き出す暗赤色の体液はエクシアには殆ど付着せず代わりに水月の乗る不知火が余計に被さる嵌めに。

そうしている内について崖道を抜ける頃には大型種は殲滅され要塞級も予め全て倒していたのか残るは小型種のみとなる。

主に戦車級のみで編成された群を上空から突撃砲で撃ち抜き続ける極めて単純な作業を熟す間もエクシアから注意を離さずに、刹那も不知火の動向を探りつつ戦車級へ淡々とビームライフルを放ち。

『こりやすげえ…』

『ああ、文字通りBETAの死骸が山になってるようだぜ…』

『第404戦術機甲部隊、並びに各突破部隊機へ告ぐ。残りは戦車級のみとは言え油断せずに排除作業にかかれ』

『了解!』

暫し砲撃を続けていると追尾隊や別動隊の不知火数機を先頭とした撃震等の戦術機が各所の道から海岸まで到着し、惨状に息を詰まらせつつも散開してそこかしこに蔓延る戦車級へと攻撃を開始していく。

水月「厚木基地の部隊……? いや他の所属部隊も。やっと追い付いたって訳ね」

援軍の到着に水月も気付くと網膜投影モニターに映る残弾が僅かなのを見て砲撃を止めると戦況を伺いつつエクシアへ更なる注意を払ったその時。

刹那（そろそろ潮時か）

先程まで粒子砲を放っていた動作を留め加勢してきた国連部隊が難なく戦車級を駆除していく光景を確認すると戦線から退けようと機体を下からせていく。

水月「!まずい……ッ!」

それに間髪を容れず気付いた水月が並走姿勢を取った時には既にエクシアは空域から離脱すべく海上方向へ飛び、潜水で姿を眩まそうと機体を降下し始め。

水月「高度を下げた? それにそっちの方角は……ま、まさか海の中に!?!」

目標の機体の行動理由に加え進行方向を見て疑問を抱くも直ぐに理解した水月だが、

水陸両用のガンダムとは違い戦術機は海中にほぼ適性が無くその事を知らずまでも潜られたら見失う可能性が高いと予測し、然しただ見逃すわけにもいかず水月の不知火も刹那のエクシアに追尾を再開し。

刹那「……!」

機体を海面に向けて尚も降下する最中、今まで散々追撃してきたと思わしき深紅に染まった不知火が再度接近してくるのをリーダーが反応して捉える。

刹那も後方へ振り返り先程までいた海岸沿いも視界に移すと今も援軍部隊がBETAへ砲撃や斬撃を浴びせる光景が遠目から見え、そことは別の高く聳える岩山を挟み遮蔽された地点に佇む一機の戦術機を発見し。

衛士「応援もきたんだ……大丈夫、きつと助かる……」

右腕部が間接から千切れて飛躍ユニットが取り付けられてたであろう接続部もそれより先が喪失され所々異常が重なり動けぬ撃震。

今まで隠頭に徹し偶々運良く見付からずに済んでいたのだろう。その機体の女性衛士は管制ユニット内で祈りながら機が訪れるのを必死に待つが……

衛士「ツ!?く、来るなツ!!」

ついにその存在がBETAに見付かる。岩山や海を伝い己の撃震へ向かう6匹ほどの戦車級に気付くと無我夢中に操縦を試みるも、結果は虚しく機体は殆ど動かず悪足掻

きに終わり。

刹那「…………チイツ！」

後方カメラを拡大で映し一部始終を見た刹那は暫時悩むも直ぐに機体を急速旋回し着水寸前で大量の水飛沫を上げながら急加速で引き返す。

水月「え、ちよっ!?!くうううッ!!…あーもう!なんなのよ!!」

その突拍子もない行動に訳もわからず見開く水月。

追い掛けていた筈の機体がいきなり反転しては自機へ向かってきて間もなく擦れ違い、続け様に水飛沫を被ると衝撃で身体が揺れ思わず目を瞑るも間一髪で機体を停止させ水没だけは免れるとめげずにエクシアへとまた不知火を飛ばし。

水月「!!」

撃震へ向かうエクシアを追う事で漸く水月も今まさに戦車級が中破した機体の脚に組み付く窮地を捉える。

刹那「くっ…」

女性衛士「えッ!?!」

然程距離はなかったのか直ぐに到達すると恐怖を抱きながらも接近してくる正体不明機に驚愕する。

撃震の左腕を掴んで上昇しその間にGNソードのライフルモードで2体の戦車級

をまとめて撃ち抜く。

水月「あいつ……！」

刹那「……………」

その場から上空へ飛ぶことで一時の危機は脱するも片脚部に纏わり付く戦車級が1匹、対して使える武装は右側のマニピュレーターにマウントされたGNソードのみでGNバルカンは使えず、仮にライフルモードの粒子砲またはソードを放棄してGNバルカンの使用を可能にしようにもこのまま攻撃すれば安定感の無い撃震に当たる確率も考慮し、更に後方には未だ追撃する不知火を確認した刹那はエクシアの加速を徐々に緩めていき態と水月に追い付かせるような行動を取り。

水月「！……私にやれって言うわけ？ ったく、散々自分勝手に暴れて今度は協力を仰ぐなんてね……」

意図を察した水月はそんなエクシアを睨んだ後迷いなく突撃砲の銃口を戦車級の頭らしき箇所に向け――

水月「ありったけ受け取りな！ 高く付けてやるから覚悟しなさいよ！」

残り全ての弾丸を撃ち込み戦車級の手足が吹き飛び身がバラバラになって地へ落ちていく。

助けた撃震を安置へ送り届ける為第2次防衛戦の最後尾まで水月が誘導の下訪れると無事別部隊に引き渡して現在、刹那のエクシアも水月の不知火もお互い見合って動向を伺う。

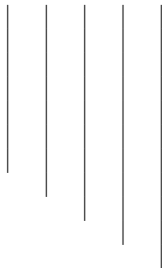
水月「……………」

刹那「……………」

然しこれ以上この場に留まる理由が無い刹那は機体を逆方向に反転して一步踏み出した瞬間。

『おっと、待ってもらおうか』

刹那「ッ！」



いつの間にかエクシアの周囲を前後左右斜めまで機体が通れる隙間なく不知火が降り立つ。

みちる「折角来てくれたんだ、歓迎くらいさせろ」

美牙「でないと此方も無作法というものだろう？」

椿子「ご要望とあれば、腕に縋りを掛けた演奏もご一緒させていただきますわ」

水月「逃がさないって言ったでしょ」

茜「……ッ」

多恵「茜ちゃん……」

晴子「チエックメイト、だね」

麻倉「これでやっとな」

高原「何処にも行けないはず……」

計9機の伊隅ヴァルキリーズの不知火がエクシアを囲うように隊長であるみちるを正面にそれぞれ立ち塞がり、陣形には参加してないも気付けばそこかしこに同タイプや形状の似た機体群がこの場に居るのを認識して。

刹那「またGN粒子の通信妨害を掻い潜ってきた？……やはり拠点まで来たのは失敗だったか」

何度か経験した音声のみ一方的に此方へ送る会話に応答はせず。

無表情にそれらを見て上空へ飛んでも前の水月と同様に追ってくるだろうと予測して、それでも振り切る自信があるのか飛翔しようと思いを固めた瞬間。

『初めまして…でいいのかしら？』

刹那「！」

今度はノイズ混じりも無い確りとした声が刹那の耳に届く。

夕呼「漸く会えたわね。俺がガンダムださん」

エクシアを囲い進行の妨げとなる複数の機体、その向こう側から軍事用の装甲車が此方に走行してくる光景が画面に映り、次いで届いた言葉に刹那の瞳が鋭くなりその真意を探り。

遙「ヴァルキリーの対遮断光学カメラ起動、修正完了。モニターに映します」

車内に数ある通信危機と違う無線機を手に取り不適な笑みを浮かべる夕呼。その間にオペレーター席に座る遙が精密機材に繋がれたキーを慣れた手つきで操作し今まで録られた物より鮮明なエクシアの映像を伊隅機より映し表示する。

それを見ては更に笑みを深め。

武「GUN…DA…M…ガンダム…？あれが——」

数ヶ所の拡大映像も同時にアップされるとその頭部、装甲に刻印された「GUNDA M」なる文字を目にして武が呟く。

刹那「……何者だ」

今日この日、この地に降り立って以来の刹那と国連軍の対話が成立する。

第5話「オルタネイティブ計画」

刹那「……何者だ」

横浜基地の部隊がエクシアを捕まえてから少し経った時、超急ごしらえで調整した無線機の成果により機動兵器のパイロットへと問題なく通信音声が届いたのを刹那からの反応で立証すると一抹の安堵を覚え。

夕呼「(反応した！やっぱり天才やっててよかったわ、流石あたし)あたしは国連太平洋方面第11軍所属、横浜基地副司令の香月夕呼よ」

内心で自画自賛して拳を握ると直ぐに己の名と役職を告げ。

刹那「国連軍……！くっ、狙いはやはりガンダムか！」

しかし其れを聞いた刹那は一気に気色を険しくし怒気の混ざる声で反応すると直立状態から臨戦態勢に様変わり、GNソードをライフルモードで粒子ビームの銃口を目の前の機体へ向け。

みちる「なっ！」

『!!』

夕呼「ちよっ！待ちなさい！あたし達は別にあんたに敵意も攻撃する意志も持ち合わ

せてないわよ!」

今まで散々BETAを葬ったビーム兵器の発射口を向けられた部隊長は唐突な攻撃姿勢に見開き、急な敵意を当てられ装甲車内含めた周囲も驚愕しては一早く慌てて釈明したのは夕呼で、咄嗟の出来事にヴァルキリーズの面々も微動だが武装を持つと思うせる行動が焦燥に拍車をかける。

そんな言葉を聞いた刹那は銃口を向ける腕を緩め。

刹那「何? どういうつもりだ。国連軍ならばガンダムは少なからず敵対象の筈……」
夕呼「……どうにも噛み合わないわね。取り敢えず、あんたが乗るそれはガンダムと
いうのかしら?」

根本から食い違い刹那の認識では世界に混乱をもたらす自分達は国連軍と決して相容れぬ関係。

対して夕呼達のいう国連軍の反応は敵対意志が無く今までも危害を加えるような行動は決して無かった。

この事に当然の如く疑問を抱くも刹那の質問に対して答えるでもなく此れもまた根本から覆すような問いに疑念は深まり。

刹那「(ガンダムすら知らないだと……?) ……答える義務は無い」

これ以上の押し問答は無意味だと判断したのか銃口を向けた腕は下げるが問いに答

える気は無いと示す。

夕呼（……まさかとは思うけど……）

素っ気ない返事に他の者は落胆のような諦めた様子で肩を落とすが、そんな中夕呼のみは顎に指を当て思案を巡らせる。

視線を一度武へと向け、向けられた当人は「……？」と不可思議そうに眉を寄せるも直ぐに視線戻し。

夕呼（……他の隊員を手伝いに向かわせて正解だったわね。運転席は音を遮断しているから問題なし。白銀はまだし、涼宮遙は————いつそ”巻き込む”か）

ついには双眸も閉ざして考え込む夕呼。現在車内には他に武と管制や諸々任せるC Pの遙しか搭乗していなく、現状確認と何かの決意を固めると目を開き直ぐ様回線を車両とエクシア内にもみ繋ぐよう調整し。

遙「……え？」

刹那「秘匿回線……？なんのつもりだ」

夕呼「あら、そつちでも判るの？まあ別に問題はないけどね。話しを穏便に進めるためよ」

突如として移した行動は同じ車内でシステム調整を補佐する遙にも当然伝わり、謎の秘匿回線化にこれまた当然疑問を抱く。

それは刹那にしても同様で真意を確かめる問いに誤魔化す様子もなく再び問答を始める。

夕呼「恐らくこれで全部分かる事だから答えなさい。まずはそうね…日本帝国軍、BETA、戦術機、これらに聞き覚えは？」

刹那「……………どれも初めて聞く」

遙「!?」

武「はあ!」

夕呼の問いに暫しの間を明けるも素直に答えた刹那。それを聞いて思わず武が声を上げ、遙も驚愕し。

夕呼「白銀、黙りなさい」

武「あ……………す、すみません…」

しかし夕呼に一蹴される。

夕呼「ごめんなさいね、続けるわ。ではあなたが言う国連軍とは？」

刹那「……………アメリカ、南米を主軸とするユニオン、新ヨーロッパ共同体のAEU、ロシアを主に中国やインド等も傘下に加わる人類革新連盟、この三国の軍が俺達ソレスタルビーイングと機動兵器ガンダムを打倒するべく発足された連合部隊、それが”俺の”知る国連軍だ。此方からも質問させて貰う…軌道エレベーター、モビルスーツ、イオリ

ア・シユヘンベルグ、そしてGNドライブは？」

今までの言葉の応酬に何かを察したように懇切丁寧、それも解説するかのような口振りで答える刹那。更には自らも夕呼に準え現状なら世界では知らぬ者は居ないであろう単語、そして疑似太陽炉を保有する国連軍ならば当然知っている筈の機関を問う。

夕呼「どうやら大分察してるようだけど」あたしでも」どれも聞き覚えがないわね。アメリカは米軍で統一、ユーラシア方面は壊滅していてご立派な軍組織なんて建てられる状況にあらず…つてところかしら」

刹那「…やはりそうか」

それに気付いた夕呼もまるで”こちらの世界”の情勢を説明するかのような言動を投げる。

夕呼「ええ。つまりあなたはBETAと同じ外宇宙…いえ、言語や国柄は一致しているようだから別の地球から来た異世界人よ」

武「!？」

遙「い、異世界…？別の…：地球ッ!？」

辻褄が合ったと、支離滅裂な答えだがそのトンデモない事象を容易に受け入れられるであろう前例者の武を見て意味深い薄笑みを作りながら結論を述べる。

突拍子もない事態に先程武が注意されたにも関わらず声を上げる遙。

夕呼「最後にあなたの名前とその機体の名称を聞いていいかしら？」

刹那「…刹那・F・セイエイ。ガンダムエクシア」

夕呼「刹那・F・セイエイにガンダムエクシアね」

そんな遙をスルーして何を思ったか刹那の名と機体名を今この場で聞いては復唱し。

刹那「随分とあつさりしているな」

夕呼「それはそうよ。こつちには平行世界から来た奴だつて居るんだから」

遙「へ、平行世界…？」

武「ッ!?夕呼先生!!」

更には“此方”の最重要機密までも躊躇無くバラす。

反応を示した者に合点がいったのか遙は武へと顔を向けて。

夕呼「落ち着きなさい。それに状況とこれからの事を考えればその内気付かれるだろうし、あなたの存在をこれ以上涼宮に秘匿にしておくのはどの道無理な話なのよ」

武「あ…」

狼狽える武を低い声で一喝し、本人もこの上苦情を述べる気が無いのか一声漏らしては押し黙る。

刹那「平行世界…：…どうするつもりだ？」

夕呼「そうね、あまり此所で長講すると他の娘達にも怪しまれるのは時間の問題にな

るし：任せなさい」

晒された事情に今は根掘り聞かずに流して己の処遇を委ねると、夕呼自身も秘密裏な会話を続ける事に今後疑いを向けられる可能性を考慮して任せられ。

遙と武に改めて向き合い目線で黙秘を訴えれば二人も一先ず頷きそれを肯定したと捉えれば直ぐに通信を秘匿回線から通常に戻し。

茜「…あ、副司令！」

みちる「！どうでしたか：？」

漸く通信が繋がりに夕呼の画面が復旧したのを見るや部隊の面々は一斉に反応し、交渉は成立したのか気掛かりな問いが真つ先に浮かび代表してみちるが聞くが返ってきたのはそれに関する答えではなく。

夕呼「ああごめんなさい。少し方針を決めようと思つて彼と暫く談義していたの」

みちる「方針：？ですか？」

虚偽の会話内容を要約して伝える夕呼に今一つ話しが見えないみちるが聞き返すとヴァルキリーズのメンバーも疑問符を表情で表し。

夕呼「そうよ。けどどこまで大々的になつたし、前線の衛士達も今回の件でより一層身が引き締まつたでしょうからここらで種明かしをしようかとね」

袴子「えつ：種明かし、ですか？」

尚もすらすらと述べる言葉に部隊はおろか武や刹那さえも訝しむ。

夕呼「デモンストレーションはこれにて終了。詳しくは極秘だから言えないけどあの機体：ガンダムエクシアの性能実験だと思ってもらつて構わないわ。それも数日に渡る大規模なね。少なくとも光線級に有効である事が判明したのだし結果は上々ね」

そう一気に捲し立てる夕呼の言葉を確り聞き受けて内容に息を呑む。

みちる「ガンダム：エクシア……」

美冴「それがあの機体の名……」

疑いもせず納得した面々に通信画面こそ開いていないお陰で表情は悟られないも内心で申し訳なく思う遙だが副司令からの命令に反す訳にもいかず沈黙。

夕呼「セイエイ、皆にも改めて自己紹介を」

そんな遙の心情を知らずに更に信憑性を増す為にと刹那に挨拶を促す。

刹那「(この土壇場で対策を講じる……本当にあの女は何者なんだ)ガンダムエクシアのパイロットを努める刹那・F・セイエイだ」

誘導された刹那も真意に気付くと直ぐ様夕呼に做い密かに送られてきたコードを入力すると通信回線を粒子影響を受けた今より良好にした状態で身分を証す。

みちる「セイエイ……了解した。私は横浜基地所属のA-01ヴァルキリーズ隊長を努める伊隅みちるだ」

夕呼が紹介し同じ秘匿部隊同士ならば此方も身分を隠す必要は無いだろうと判断したみちるも名乗り。

夕呼「細かい紹介なんかは後日にしなさい。データのエックとか急ぐから早く帰投しないとイケないの」

みちる「それは勿論：お前達もそのように！」

『わー』

これは半分嘘では無く事態の把握に急を要する夕呼は一早くこの場を收拾付けて会話漏れの心配がない落ち着いた場所へ移動したいと思ひ、他のメンバーの自己紹介等は省略させると部隊長の指示にA―01の一同が血気に返事をし。

ここまで来て逃避は無いだろうと睨んだ夕呼の指示でA―01部隊の不知火が全機エクシアへの確固陣形を解くと刹那からしても既に同行するつもりの様子で、その間に到着した輸送車両に不知火が格納されていくと全ての手筈が完了した報告を受け、装甲車の運転手に基地への帰投を電子通信で文字にして命じて。

大型の車両群に続き並走しながら神奈川を目指す。それに倣い刹那もエクシアを浮上させ並走飛行で着いていく。

刹那「異なる地球……」

基地へ帰る途中で事前にまりもや司令達には函獲及び協定に成功、異世界等の概要は省き細かな事は後程書類に纏めて報告するも一先ず武同様に自分が指揮の下直轄で動いてもらう等の旨を伝えそれを基地内の最高責任者に当たるラダビノットには既に一任の了承が得られているため、何の憂いも無しに帰還を果たす夕呼達面々に軍事基地周辺には異形への介入以外では近寄らないようにしていた刹那も初めて訪れる。

A-01の不知火は整備の為に基地の数ある格納庫の内、秘匿部隊という事もあり割と奥地の方へ車両に乗せたまま搬送されるとそこへエクシアも続いていく。当然急いで噂の機体が現れたのに当然基地隊員はざわめき始めたが、事前通達のお陰で事情を前以て知らされている上官らによって宥められる。

「タケル！」

武「え？お、お前ら!？」

遙同様直ぐに夕呼の私室まで来るよう言われたも緊迫した状況が続いた故に外の空気を吸いたいと願ひ出て現在、途中下車して一息付いていた武のところへ試験へ合格し後に任官が下るであろう207B分隊の面々が駆け寄ってくる。

美琴「神宮司教官に聞いたけど新潟の防衛戦に向いてたって本当!？」

冥夜「まだ任官前のそなたが前線に出るなどどうなっている!?!驚きを通り越して頭の中が真っ白になったぞ！」

その先頭で早速目の前まで来る御剣冥夜と鎧衣美琴が武に詰め寄るなり肩や胸ぐらを掴まれ尋問される。普段は冷静な冥夜が取り乱すのは珍しいと武も思うが無理もない。

武「おおお落ち着けよ！前線つつーても夕呼せ…香月博士とずっと軍用車に居ただけだつて!!」

揺さぶられた武も息苦しさや唐突な問い詰めになんとか事情を告げ。更に追い付いてきた他のメンバーもそれぞれ。

壬姫「でもお！たけるさんに万が一があつたら！」

慧「私はあまり心配はしてなかった。白銀はやれば出来る男」

今度は対称的に慌てふためく珠瀬壬姫と普段通り淡々と話す彩峰慧。

千鶴「それより白銀！今さつき何台か装甲車と一緒に見慣れない戦術機が飛んでいったけど、まさかあれって噂の……！」

まりも「貴様ら何をやっている！」

最後に委員長こと榊千鶴が冥夜達を押し退けて何やら興奮気味で武に詰め寄り、恐らく同じ訓練兵で情報に精通している者から聞いたのだろう噂話を鵜呑みに問い質し。

その間に他の者を宥めていたまりもから叱責が飛ぶと武はこの場から退き。

武「わ、悪い。今は詳しい事は言えないけどその内説明がある筈だから！」

冥夜「タケル!？」

千鶴「ま、待ちなさいよ！まだ話しは」

まりも「待つののは貴様だ、榊！全くどうしてこうお前達は騒ぎを——！」

駆け出した武を追おうと踏み出すとまりもに遮られ説教をくらう。そんな皆を背に内心謝罪するも急いでいるのは事実なので足取りを緩めずそのまま走り去っていき——

そんなやり取りが繰り返り広げられる傍らで格納庫へ到着し、基地の戦術機が立ち並ぶ場より少し離れ指定された空いているハンガーにエクシアを置く刹那。

整備士達は異様な風貌の機体を見上げ緊迫の表情を浮かべるもこれも事前通達により騒ぎ立てる様子もなく、しかし気にはなるのかその手は止まり。

みちる「いよいよか」

水月「一体どんな屈強な奴が乗ってるのか……」

既に機体を整備員に引き渡し集まったA-01の面々も格納庫を訪れ佇むエクシアを注視し、特に先程まで競り合った水月は興味津々といった様子でパイロットが降りるのを待ち詫び。

夕呼『お待たせ、案内するから機体から降りてきてくれない？』

刹那「……………」

暫くして装甲車から格納庫へ出向いた夕呼と傍らに控え電子機器を胸に抱える遙が

現れ、無線機を手に音声を届けると聞き受けた刹那がエクシアのココピットハッチを開き姿を見せる。

茜「！ユニットが開いた！」

晴子「とうとうお出ましたね……！」

それを見た部隊のメンバーは一気に視線を強め普段から何事にも興味が薄い反応を示す晴子も今回ばかりは他同様顔を引き締め。

袴子「変わった強化装備を着ていますわね……」

美冴「寧ろあれは……宇宙服？あれもまた専用のパイロットスーツ、か？」

姿を現したエクシアの操手に先ず違和感を覚えたのは格好。衛士は国によりデザインが多少変わるも戦術機を動かす為には全員統一で身体にフィットする強化装備とそれに連なるヘッドセットの着用が必須となる。これが無ければ操縦におけるバックアップも網膜投影によるモニター表示さえ出来ないので管制ユニットから戦況を見るのは不可能なはずだが、或いはあの青いスーツと同色で恐らくセットだろうヘルメットに同様のシステムが組み込まれているのか？と周囲の者は皆等しく疑問を持ち。

夕呼「！……へえ、これは例の信憑性が増すわね」

それは夕呼とて同じく彼に此処での常識が通用しないのをより強く認識すると、ココピットブロックでさえ従来の管制ユニットのそれを逸脱して一枚のハッチを開くのみ。

更に伸縮自在の人一人余裕で支える強度なワイヤーが備えられ足元を掛けて降下してくる搭降装置以外はやはり常識の範疇になく地面へ降りた刹那へ更に目を見張る。

水月「……へ？は、はあ!?!うそ!?!」

美冴「!…随分若いね」

そしてヘルメットを取った瞬間見せた顔は明らかに少年でこれにはA―01や辺りの隊員は勿論、夕呼や遙にしても驚愕するがその事を悟られれば後々面倒になると判断、互いに顔を見合せ頷いて示し合わすと歩みを進ませついに目の前まで迫り。

夕呼「さて、行きましようか」

遙「……………」

刹那「ああ」

一度向き合うと周囲には預かり知らぬ事だが視線がお互いを探るように合わされ、その様子に夕呼の隣に立つ遙は毅然を装うも情情的には穏やかでは無く緊張するばかり、一通り面持ちを確認し合うと直ぐ様夕呼に促され歩み始め。

二人に続くよう立ち去る刹那を呆然と眺める隊員達を通り過ぎては待機させている軍用車に乗り、完全に姿が見えなくなる頃には揃ってエクシアを見上げ。

車で格納庫から基地本部に移動すると施設内に足を踏み入れ、その間にも僅かだが擦れ違った軍の正装を着込む何名か訝しむ視線を送られるも三者とも気にせずを貫き、早々に地下へと続くエレベーターへ乗り込むとその間も一言も喋らずに。地下の深部へと到着すれば歩み止めずに自身の執務室へと通す夕呼とそれに続いた遙と刹那の入室から間もなく武も訪れる。

武「！そ、そいつがまさかあの…」

夕呼「ええ、ガンダムエクシアの衛士…じゃないわね、パイロットの刹那・F・セイエイ。機体から降りてきたのが彼だから間違いないと思うわ」

駆け込みで入ってきたため三人の視線は自然と武へ向けられ、当人も日頃鍛えているお陰で息切れは無いが直ぐに視界に移った夕呼や遙とは別の見知らぬ顔と格好をした

人物にこの場で自分達以外が夕呼の執務室に居るなら該当するのは一人だけだと繋がり。

問いに夕呼が頷くとそれは確信に到る。

武「うわつ、若!?俺よりも年下にしか見えないぞ…」

夕呼「それはあたしも気になったわね。声からして若年者だとは思ってたけどここまでは」

そんな武の物言いに同感する夕呼。明らかに据わった面影や前のエクシアの戦いぶり以外は少年と扱って差し支えない見た目に興味深そうに視線を這わす夕呼へと睨みを利かし。

刹那「…歳の話をするために俺をわざわざ人気が無い此所に連れてきたのか？」
入室してからずつと背を見せていた刹那が改めて向き合うと呆れ顔を見せ。

夕呼「いいじゃない。些細な事は思わぬところで役に立つかもしれないわよ？」

それでも尚も茶化すような言動であちこち眺めだす夕呼に埒があかないと諦めた刹那は溜め息を吐きながらも年齢を明かし。

刹那「……17だ」

夕呼「という事は一応徴兵されてもおおかしくない歳ってわけね」

武「へえ〜、俺なんかもつと下だと思っただけど一つしか変わらないじゃん」

漸く答えた刹那に満足した顔の夕呼と予想が外れて意外そうな武、そんな光景に遙も思わず苦笑する。

夕呼「ふむふむ。ま、若くてどうのつて話しはこれくらいで切り上げて本題に入りましょう。丁度いいから記録は涼宮に任せるわ」

遙「は、はい。わかりました」

一通り楽しんで気が済むと室内の奥にある資料が山積みのデスクを挟んだ自席であるオフィスチェアに座り、更に向かいの中央に位置する客用ソファーへ手を差し伸べて着席を促すと記録を任された遙以外は促される通り武と刹那で互いに反対へ座り、デスク脇に遙が立って手に持つ電子機器を操作し始め。

刹那「：改めて問うが、アンタは何者だ？」

夕呼「何者も何も最初に言った通りあたしはこの基地の副司令で、それ以上でも以下でもないわ。最も今はある計画に携わっているから博士とも呼ばれているけれどね」

ノーマルスーツのヘルメットを脇に置き再度夕呼へと視線を向けると早速先程から見せる手際によさを怪しみ正体について問い質すも返ってきたのは偽りを感じぬも己が欲する答えでなく、その事に刹那が落胆の意を示しつつもある単語に疑問を持ち。

刹那「計画？」

夕呼「それを話す前に先ずはこの世界の事を話しましょうか」

疑念を直ぐにぶつけるも当人は涼しい顔で答える前に客人である刹那へと懇切丁寧に説明を始め、同時に予め壁掛けに用意したスクリーンを映し。

夕呼から告げられたのは先ず火星探査機の映像から始まった。生物らしき影を映し調査を始めるもどの探査機も地球へ帰還される事は無く、それが初めて人類がBETAを目にした瞬間だったと。それから暫くして月面調査隊が異種と接触するも攻撃的行動を受けた事により人類側は全滅、これを皮切りに異種を「Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of humance」人類に敵対的な地球外起源種と断定して全面交戦へと勃発。人類の持ち得る兵器を屈指するも事態は拮抗するばかりで、3年間の戦争の末ついに地球へ向けた着陸ユニットの侵入を許してしまった事により月基地を放棄せざるをえなくなった。

地球でのBETAの最初の拠点はカシユガルでそこに巨大なモニメントを象徴とする地下坑の巣を造り、これを航空戦力で対抗するも僅か19日目で光線級が現れ狙撃されるようになり実質無力化されてしまう。これにより人類は人型兵器の戦術歩行戦闘機を開発投入し戦術核なども使うが徐々に効果が薄れ。最終的にはBETA侵攻が止められずユーラシア大陸全土に次々ハイヴの建設を許してしまい、日本もまた九州から上陸したBETAによって首都である京都を落とされ佐渡島にもハイヴを建てられ

た事までを話す。

刹那「人類に敵対的な地球外起源種……あの生物兵器は外宇宙から来た侵略者だという事か？」

夕呼「そう。そして奴等は人類を生命体として認識していないという事が現在判明している」

だから構わず攻めてくると付け加える。そこまで黙って解説を聞いていた刹那が再度口を開き。

刹那「…計画というのも謎だが、まず異種との会話が成功したのか？」

夕呼「その事を話すにはあの娘を見せた方が早いわね…白銀」

問いにまた答える前に武に合図を送り。

武「ああ、霞を呼んでくれればいいんですね？」

夕呼「お願い」

それを確かめるのに夕呼は肯定し頷くとそれを聞き受けた武が立ち上がり執務室から出ていく。

その行動理由に刹那は訝しむも直ぐに戻ってきた武と共に現れた少女を見て直ぐに彼女を連れてくる為だと理解し。

夕呼「この社震こそがBETAへコミュニケーションを取るための存在。ESP発現

体にして対象の思考を画、感情を色で読み取る事が可能なリーディングを持つ能力者よ。…正確には彼女の姉妹が前の情報を手に入れたのだけどね」

霞「……………」

刹那「…その為に創られた存在、という事か？」

武「ツ!？」

霞を一目見て夕呼から先程の件を補完されるとその能力からとある人物、そしてとある機関が頭を過り。

一概に超能力者といつても偶々見付かったというのは都合が良く、更に姉妹もいるという形容から繋がる真実。まして非人類との戦争中なら”そういう”のが開発されていてもおかしくは無い。

その事を殆どノーヒントで当てた刹那に武も、そして夕呼と当人の霞も目を見張り。

夕呼「…よく分かったわね、社が人工生命体だって」

刹那「いや…俺のいた組織にも能力を埋め込まれた奴がいたから、もしかしてと思っただけだ」

問いに頷き勘の鋭さの理由を尋ねては刹那も霞を見ながら答える。

夕呼「…………社」

霞「はい…よくは見えませんが…ガン、ダム…?」

その言葉に霞へ目でまた合図を送るが返ってきた内容に頭を押さえ「またそれ？」と唸る。

夕呼「あんたつてもしかしなくても…ただのガンダムバカなの？」

刹那「…最高の誉め言葉だ」

武・遙「えっ…」

そんなやり取りに更に頭を抱える嵌めになる刹那にとつては禁断とも言える言葉を吐いた夕呼と、啞然と開いた口が塞がらない武に今まで黙って真剣に記録作業をしていた遙までもが声にしてしまう。

霞「…ガンダムとは…誉め言葉なのですか…？」

刹那「そうだ。俺はガンダムになりたい…」

霞「ガンダム…：私も、なれますか？」

刹那「…何故そうなりたいと思う？」

霞「わかりません…」

二人の高度な会話に場の空気が微妙になりつつあり、本人にも自覚は薄く分からない事だが思い出を探し求める霞としてはそれが誉め言葉だと言われれば信じて善とし、ガンダムになればそれが己だけの無二の思い出となると思ったのだろうか、刹那が解釈するガンダムとは異なりその質問に彼の絵と色を見て答えに詰まる。

いずれにしても第三者には決して二人の思考は理解しがたく。

夕呼「あのねえ…流石に悪影響だから止めてもらっていいかしら？」

霞「……？」

念の為忠告するも霞は夕呼の言葉の意図が逆に理解できず気の抜けた顔で首まで傾げ。無口な二人には不思議なシンパシーでも生まれるのかと遙や武は苦笑いを浮かべる。

刹那「…話しを続けよう」

当の刹那は流石に自覚しているのか話題の転換を修正するように、霞も武の隣へと腰を下ろし。

夕呼「それで？…キリもいいし、一旦あなたの世界について聞きましょうか」

刹那「ああ…」

今度は刹那が己の世界について語る。

BETA由来以外はこの地球と似ていて、しかし此方は技術的には発展している部分もある事。化石燃料の代わりにエネルギー源として出来た半永久的エネルギーを生み出す宇宙太陽光発電システム、それに伴い軌道エレベーターを開発して宇宙への進出も発達しており、更に宇宙にはコロニー等も存在している。

三つの軌道エレベーターの恩恵を受けるべく国々は3ヶ所に集まり三大国家へと発

展、軍事施設などもそこに基準してユニオン、A E U、人革連で形成される。そこに大々的な戦争は無いまでも熾烈な競争で新兵器やモビルスーツ開発など軍備開発の強化を進めたり、各国家は己の威信と繁栄のためのゼロサムゲームを続けていた。更に三大国家に属さない小国は枯渇した化石燃料等に悩み紛争や内戦が絶えなくなり。

このまま進化し続ければ直に紛争は国家間にまで発展するのは誰の目から見ても明白で、そんな人類を一つに纏め戦争と紛争幫助の引き金を一切無くすために組織されたのが刹那達ソレスタルビーイングであり、それを成すためのGN粒子と動力にGNドライヴを使うガンダムが存在した事を。

刹那「それを造り計画したのがイオリア・シュヘンベルグ…」

夕呼「イオリア…」

武「世界から…一切の争いを無くす…?」

半信半疑な武とは対称に大いなる目的の為手段を問わないイオリアに少しだけ共感する夕呼は感慨深くその名を囁き。

刹那「その中で人類革新連盟、人革連は秘密裏に超兵を造り出す超人機関という施設で実験を行っていた。人体改造で得た脳量子波はあらゆる能力が飛躍し、完成された超兵同士ならば共鳴して思考を送り合う能力も備わると聞いている」

夕呼「!それでさつき社の出生を見破ったってわけね…」

そして肝心の先程霞の出生に気付いた事柄について話すと漸く話しが繋がって確かめる夕呼に刹那も頷いて肯定する。

超兵の脳量子波は空間認識能力や反射神経等を向上させるためパイロットセンスも極めて高まる反面テレパシー能力が無意識に干渉して頭痛を起こす欠点も存在すると伝え。

夕呼「0から産み出した人工ESP発現体に、人体改造により擬似的に誕生した超兵……」

刹那「…それで、計画というのは？」

一通り説明したと証すように再三に渡り問い。

夕呼「あら、まだ話しの続きはありそうだけれど？…ま、いいわ」

しかし刹那の世界観説明には肝心な処がほぼ抜けているのを見抜くも彼の組織の守秘義務を話す気は無い様子で、半ば諦めた夕呼も溜め息をつくとの道いずれ話さなければならぬかと一先ず置いて。

夕呼「それと涼宮、今までの話とこれからの…計画もまだ一部しか知らない事だから当然他言は禁物よ。いいわね？」

遙「え…あ、はい！」

念の為改めて忠告すると当の遙は記録任務こそ全うしているも異世界の話しや、自分

の世界においても人工生命体など知らずにいた為その壮大な内容に頭が追い付いてい
かず、唾然としていた処で急に意識半ばな頭を覚醒させられると慌てて返事をし。

夕呼「…あたしも配慮が足りなかつたわね。計画については記録する必要は無いから
あんたも座つて楽にしてなさい」

遙「うつ……すみません……ではお言葉に甘えて」

その事に一目瞭然で一旦は今までの作業は必要無くなると休憩を促され、素直に受け
ると刹那の隣の空いているスペースに移動して座り。

それを確認してはスクリーンの映像を切り替え。

夕呼「さて……さつきも言ったようにあたし達は奴等に生命体としてみなされず、それ
はリーディングの対をなす能力……対象へ自分の思考や感情のイメージを投影して送る
プロジェクトン能力によってありつただけの和平のイメージを送り続けたけど反応な
しで結果変わらず。そもそも彼らには和平や紛争という概念が無いのか、人類を生命体
に認識していないから単に無視しているのか……いずれにしても現時点では和平など
底不可能。ここまですがオルタネイティブ計画の第3段階」

刹那「オルタネイティブ計画……3という事はそれ以前も？」

計画の概要を改めて説明していくと段階を踏んでいる事に当然気付く刹那。

夕呼「ええ。第1計画は最初に話したように火星探査機が発見した時点、非人類にど

うコミュニケーションを取るかで動物や言語や数学に精通した学者を集めたのだけど、解析以前にBETAが言語を持ち合わせているのかが不明な時点で第1計画は破棄。そうしている内に月にまで侵攻したから対抗する為にBETAの生態研究が要される。捕獲に成功した奴から調査と分析を行い分かったのが彼らは炭素生命体であり、様々な環境下にも対応出来る身と適応能力、その上別種のBETA同士で種を同定するための特徴は一切発見できずに消化気管や生殖器も特定不能。これがオルタネイティブ2にあたるわ」

次々省略化して解説していくと先のオルタネイティブ3へ繋がり。

刹那「…なるほど。それで直接奴等と接触を」

夕呼「そうね」

肯定すると更にスクリーンを「Alter native IV」と記された映像へと変える。

夕呼「そして今までの第3計画をシェイプしてあたしが編み出したのがBETAが生命体と認識し得る人工存在を創り上げる事…炭素系擬似生体からなる身体に人の魂を宿し、量子電導脳による様々な情報並列処理を同時に可能とする存在、それが00ユニット。オルタネイティブ4の鍵よ」

武「！」

遙「!？」

そしてついに取り上げられた計画の第4段階の内容。遙は勿論武も初耳なのか目を見開いている。

刹那「情報並列処理……まさかヴェーダ……？」

しかし刹那はそれを聞いてとあるシステムが脳裏を過る。己が組織の作戦において中核を為していた量子型演算処理システム。イオリア計画に必須とされていたそれを囁くと夕呼も話し途中で反応し。

夕呼「…セイエイ？」

刹那「いや……なんでもない。続きを」

言葉までには聞き取れずも口の動きで何か囁いたのを疑うと呼び掛け。だが刹那は答える気が無く彼が話す内容に秘匿性が多いのを予め把握していた夕呼はこれも一先ず流し。

夕呼「そう。…悪いけど場所を移すわ」

そう言つて立ち上がると退出のため扉へと歩みだし、これからの事を熟知している霞以外は訝しみながらも大人しく従つて、刹那達もソファアから立ち上がれば夕呼に続いて歩き。

刹那「!」

遙「これは……！」

扉を出て直ぐ横の部屋へと向い、その行き先で武は理解したようで夕呼が認証IDのカードを通して扉を開き、その中を見て刹那と遙は目を見張る。

室内には幾つもの機材やコードが張り巡らされ、その中央には脳髓が浮かぶシリンドラーが佇む。異様な光景だが刹那は特段取り乱す事もなく遙も冷静を装い。

夕呼「……白銀、例の数式のお陰でついに理論が完成したわよ」

武「！まさか、00ユニットが……!?!」

それを聞いて今度は武が目を見開き夕呼を見る。どうやら彼はそれを認識しているようで話しがみえない遙と刹那はその様子を眺め。

夕呼「そう、これがオルタネイティブ4を成功させる為の最重要な存在の一つにして現研究の集大成」

その言葉に添うように霞が室内の奥にある一室へと去ると殆ど間を置かず再び現れ、手には傍らの人物の手が繋がれ誘導する如く歩幅を合わせる。

夕呼「彼女がその00ユニット」

武「……ッ?!?!」

夕呼の差し出す掌の先、霞が繋ぐ手に引かれる者を遙に刹那、そして武は向いて再度目を見張る。

遙「この娘が…」

刹那「…：00ユニット」

囁くは遙と刹那。

武「…：純、夏…？」

名を呼ぶのは白銀武。

純夏「…：…」

その瞳で武を見据え、霞の誘導で目の前まで歩み。

夕呼「…：…」

遙「えっ？」

刹那「！…：…」

様子を伺う夕呼とその真意が分からない遙とは対象に武の反応でおのずと理解した
刹那は夕呼を見て、それに気付いた彼女も不適な笑みを向ける。

武「純夏…」

目の前まで来た00ユニットに尚も名を囁く。そんな武に虚ろ——では無い確り
と意思の籠った瞳を向ける純夏が武の頬を撫で。

純夏「…：タケルちゃん」

彼女も武の名を囁いた。

夕呼「やはり調律が必要無いまでに……！後は白銀の存在を傍におけば——」

二人のやり取りに夕呼は先程までの毅然とした態度は一変、何か思案し企み始めるとその独り言に遙はまた理解が及ばず様子を伺い、そんな遙に刹那は告げる。

刹那「あの二人は知り合いなんだろう……そして00ユニットの人格は恐らく」

遙「！それじゃあ……！」

そう言つて刹那は脳髓が入ったシリンダーへ視線を移すと遙も見て漸く理解した反応を示すと続いて夕呼へ視線を向け。

夕呼「……なにか？」

遙「あ……いえ」

しかし軍事機密な上に悪意を以て為した訳では決してない事くらい遙も理解出来るので言葉にならない思いが胸に絡み目を逸らす。

刹那「……一つ聞きたい。アレは誰がやった？」

その様子を見た刹那は再度夕呼へ向き直り視線のみシリンダー内へと送ると問い質すような言動で。

夕呼「……アレはハイヴを攻略した時に見付かったそうよ。つまりBETAが何かをしたか……」

遙「!!」

質問に素直に答え脳髓を見ながら悍ましい事をしたであろう張本人の正体に遙は一層目を見開く。

BETAの中にはあらゆる物を“食べる”個体も存在していてこの世界の住人である遙は勿論其れを知っている。悲惨な出来事があつたのを容易に想像すると額を押さえ目眩を覚え。

刹那「BETA……こんな行いをする奴等は、やはり駆逐対象……」

一方の刹那も武力介入の際に異形の小型種が機器や人を食い荒らし殺戮するのを数度か目の当たりにし、改めて排除する遺志を強める。己とて人を殺めテロ紛いの事をしているの自覚はあるも、少なくとも武器も持たず敵意の無い者や一般人を無差別に攻撃するなどという考えは微塵もなく、あくまで戦争根絶という理念の為である。当然その後報いを受ける覚悟もあり、だが今はその目的を果たすまでは戦うために生きると誓い今に到る。

ならば紛争幫助、増してや非人道的な行動をする異種は敵以外のなものでもないとな睨み。

夕呼「……鑑、白銀。感動の再会はいいけどまた場所を移すわよ」

武「あ、すみません」

純夏「うわっごめんなさい！」

そんな刹那を一望した後、ある程度放つていたら物凄くイチャつきだしそんな様子の二人へ声を掛けると当人も焦って身体を離す。

見れば何かしらの会話後だったのかお互い手を握り合って見詰め合う様に状況的に注意して正解だったと改めて思う夕呼。

純夏の紹介と刹那の鋭い指摘で既にこの部屋での話しを終えたかのように再び執務室へと向かう面々。

それからまた戻れば夕呼は自分の定席に、今度は武を挟み純夏と霞が肩がぶつかる程密着してソファーに、向かい側には変わらさず刹那と遙が座る。

夕呼「じゃあ改めて紹介といきましょう」

チエアへ腰を沈め切り出すとデスクに肘を着いて。

夕呼「さつきも言ったけど彼女が00ユニット、人格…人としての名前は鑑純夏よ」

純夏「ヨロシクね！」

その大それた存在にしては妙に気さくというか明るいテンションと元気な声に肩の力が自然と抜ける遙と、隣で和んでいる武、そして無表情な霞と刹那。

夕呼「本当は理論上、もつと思考の薄い状態で目覚める筈だったのだけど見ての通り…その点については事前に話しが通っているから別に気にしないけど、改めて調律の必要が無いのを見ると科学者としての自信が喪失しそうだわ」

対比的に落胆する夕呼。

何せ理論の構築から此処まで全て狂い無く進んだのだが蓋を開けてはこれだ、心中お察しである。

純夏「え〜、でもこの方がスムーズでいいじゃないですか。そうだよねっ、タケルちゃん！」

武「お、おおう。いやにしても」

そんな夕呼を他所に武の肩に腕を絡め引つ付く純夏へ想い人だけに拒否はしないも流石に毒気を抜かれ。

夕呼「ハア…ま、いいわよ。話しが進まないから早速白銀に関する事象、最後にセイエイに関して話すから確り聞きなさい。涼宮は座ったままでいいからまた記録をお願いするわ」

その光景に呆れ顔を向けるも放置を決めて各自に話し始めると遙も再び手に電子機器を持ち。

夕呼「まず白銀が何故平行世界の住人であるかの証明。これは社のリーディング結果で既に確証を得ているけど、そもそもこの世界の白銀はもつと前にBETAに殺されて
いるのよ」

遙「!？」

その事実には本日何度目かの見開きをする遙と、先程までは元気だった純夏も憂い悲壮な瞳に変わり、刹那は尚も無表情で。

夕呼「そんな白銀を平行世界から少しずつ集めてこの世界に降り立ったのが因果導体となったこの白銀武」

武「！じゃあやつぱり」

夕呼「——と言っているのが前までのあんた。そこから先は鑑が説明しなさい」

武「……え？」

夕呼の解説で合点がいったと思つた武だが次の言葉に思考が止まる。続きを促された純夏に全員の視線が集中して。

純夏「……まず最初に謝らせて？ごめんなさい！タケルちゃんがこの世界に来たのも因果導体にされたのも全部わたしのせいなの！」

武「ッ!？」

少し余裕を作るべく身体を離れた純夏が武に頭を下げて全てを打ち明ける。

第6話 「決意の瞳」

純夏「タケルちゃんがこの世界に来たのも因果導体にされたのも全部わたしのせいなの！」

武「なッ!？」

急に己の核心を告げられ驚愕する武、そして純夏から語られた真実。

脳と脊髄のみにされた純夏の「タケルちゃんに会いたい」という想いと平行世界で武が他の人と結ばれた際の純夏の嫉妬が全て集まり偶然淡さり、本来なら絶対に発動しないであろう卓越された力が働き武を地獄そのものなこの世界に呼び寄せてしまった事。

その中で何度もループし、純夏に辿り着くまで悲惨な経験を繰り返させてしまい漸く前回会えたのだが結果は恐らく伴わなかった事実を告げる。

武「じゃあ：俺は：」

純夏「何回繰り返したか分からないけど、わたしの記憶では3回目なんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、自然と全て納得した様子で。

夕呼「あたしと社は鑑が目覚めた一昨日から聞いて知っていたけど、それでも第4計画や社の出生を知っても、極めつけに鑑を見ても妙に落ち着いているから気になってた

のよね。あんたも実は薄々気付いてたんじゃない？」

横槍を入れたのは純夏に説明を委ねた夕呼で、普段なら見知らぬ事情には焦り散らす武がらしくない態度を取るのに指摘する。現にガンダムに対してだけはかなり動揺してて。

武「あ、……いや……：：：気のせいだと思っただけですよ、本当。けど純夏を見ても俺はこうなる事を、00ユニットやあの脳が誰か知っていた様な感覚があつて。でも夕呼先生に話したようなハッキリとした主観記憶がある訳じゃないから」

夕呼「……前回の記憶にロックが掛かってるか」

それを聞いた夕呼が推測を立て。

夕呼「鑑も実際確りとは覚えていないみたいだし……」

武「えっ……?」

純夏「……ごめんね、タケルちゃん。わたしが覚えてるのは前回漸く副司令がわたしを完成させたのと、タケルちゃんに調律して貰った事、わたしの意地で喧嘩しちゃったけどそれでもタケルちゃんが受け入れてくれて、甲1号目標の重頭脳級を倒した事だけの……」

武「……あ」

申し訳なさそうに告げた純夏の言葉を聞いて武の脳内で鮮明な記憶が蘇る。

最初の理論が完成しない為平行世界に戻りそちらの夕呼から数式を持ち帰った事は時間の違い以外今と同じく。新しいのはそれから因果導体質のせいで純夏以外の人物は特定出来ないが平行世界の純夏を含む何人か犠牲なり影響を受け何十億の人が危険に晒され、此方に帰ったら00ユニットが完全していて脳髓が純夏本人だと明かされた事、当初は虚ろな目でBETAに対する殺意以外の意思が欠落していて調律でなんとか回復し、純夏の拒絶と記憶を見せられたが最後には結ばれた事、そしてオリジナルハイヴを攻略してあ号標的を倒した事。

しかし記憶が飛んでいて誰を失ったり何をどうしてハイヴを攻略したかはまだ明確には思いつけず。

武「…兎に角今はまた一緒に居れる、んだよね？」

純夏「……いいの？」

考えても仕方ないと一先ず区切れば純夏を真っ直ぐに視線を向け、告げられた言葉に聞き返し。

武「いいもクソもあるか！つーかさつき散々引っ付いてきて何今更なこと言っつてやがる。俺はお前が傍に居なきゃ俺じゃないんだって前にも言っただろ？」

純夏「タケルちゃん…」

夕呼「…恋人気分を楽しむのは後にしなさい」

見つめ合う二人に再度注意が飛ぶと姿勢を正す武と純夏。そんな様子とこれを見ても無表情な刹那に夕呼は本日何度目かの溜め息を吐いて。

夕呼「鑑がそういうなら、白銀が平行世界から来たというのはこれでほぼ確定として。問題はもうしてまたループしたか」

このまま純夏に任せていたらまた良い雰囲気等で話しが進まないと思った夕呼が再び率先して話す。

他の者も武と純夏のやり取りから全員夕呼に注目を戻し。

夕呼「これは十中八九鑑と、それから白銀自身に何かあると思うわ」

白銀「俺達…自身に？」

原因が武達だと推測する言葉に己を指差し。

夕呼「それはそうでしょう？前の世界群で原因だった鑑の思いが何らかの形で解決して白銀は因果導体から脱却した…にも関わらず再び世界は巻き戻り、それによって原因がまた発生して白銀をこの世界に再び留めた——または白銀自身がこの世界の滞りを懇望した」

武「!!」

思い当たる節はありまくるといった表情の武。記憶が曖昧で断言は出来ないも前の結末を何処か認められず、その思いが意外な位大きかったのを理由云々抜きに強く自覚

して顔を顰める。

夕呼「どうやら凶星みたいね。…続けるわ。今の白銀は結局は前回の延長線上で半因果導体であり仮に力に干渉するだけの思念が生まれたとしたら…：…差し詰め今のあんたは時空特異点に極めて近いけど原理やは逸脱しているナニカといったところかしら。それがこの世界と白銀を強制力で繋ぎ止めてる…：或いは思念の中にこの世界の元々の白銀である残留思念も混ざり結果を確立し易く、そこからこの場に居る白銀を構成しているか」

仮説を前提として純夏から聞かされた話しも組み込み推論を並べる。

夕呼「これなら異世界単位で遙か離れた宇宙の存在…：かもしれないセイエイをこの世界に引き込むのも可能だと考えるわ」

刹那「…」

刹那へ視線を向けて。

時間や空間にも縛り概念が適用されないならば原因が解消される前に戻り、再びこの世界に因果導体の武を戻すのも、その力に干渉して平行世界の武の変わりに溢れた思念を媒体にするのも、外宇宙の刹那をこの宇宙のこの地球に降ろすのも可能だと推察し。

なので最初に夕呼が“だった”と表現したように今の武は半分は因果導体でもう半分は特異点である存在と仮定する。

夕呼「あとは何故そんな現象が起きたか、白銀は自分が因果導体から脱した原因を覚えてる？」

武「……いいえ」

その問いに首を横に振る武に「そう…」と一声漏らす。

純夏「………しようがないな、タケルちゃんは」

武「あ？…つて！す、純夏お前！まさかそれも覚えてるつてのわ！？」

横から聞こえる純夏の言葉に武をこの世界に呼んだ張本人ならばと思つたのか唯一記憶を共有する相手へと期待の眼差しを向ける。

純夏「へ！いい、いや覚えてないよ！？わたしはただタケルちゃんの忘れっぽさに呆れただけ！」

しかし返つてきたのは期待外れの言葉だが、それよりも見事にブーメランな物言いに。

武「な、なにをーツ！んな事言つたら純夏だつて忘れっぽいじゃねーか!!」

純夏「あいたーっつ！」

チョップを降り下ろすと共に猛反論する。それを喰らつた純夏も頭を押さえ涙目で睨み付け。

夕呼「……兎も角、二人の証言から恐らく第一条件が白銀が鑑に辿り着く事、第二条

件がオリジナルハイヴの制圧。こんなところでしようね」

気付けば頬を引っ張り合い戯れる二人へ最早気にせずといった風に観念して続ける。

遙「では当面はオリジナルハイヴ：でしようか」

夕呼「そうね」

今まで記録に集中していた遙が口を開き、その問いに夕呼も肯定する。その間も霞はずっと沈黙していて。

刹那「…どうした？」

霞「え…?」

その様子を訝しんだ刹那が霞へ視線を向けて。

刹那「言いたい事があるなら言った方がいい」

霞「あ………いえ、なんでもありませんっ」

夕呼「はいそこ。あまり社を困らせないで」

次いだ言葉に間を開けるも何でもないを装い、その反応に余計疑問に思うも直ぐ様夕呼の横槍が入り別の話題に持っていかれ。

夕呼「二人の記憶が戻る度に何かヒントも出てくる筈。それよりも今はセイエイをどうするかよ。原因解明や送還方法は現時点では不明だし、いつそ判明するまで此所に滞在する方が懸命だとあたしは思うけど」

刹那「…此所に？」

今のところ手詰まりだと告げならばと提案を持ち掛ける。

夕呼「ええ。仮に白銀が原因だとしたら近くに居た方がいいでしょうし、1ヶ月前の行き詰まった状態から推定した予定よりも随分速く00ユニットが完成したし余力も十分。力を貸してくれるならあたしも全力でバックアップするつもりよ？あんたの世界での在り方を見るに入隊は抵抗あるだろうから、正式な軍の傘下に入らなくてもあたし直轄という事で進言しておく。…：かなり破格の条件じゃないかしら？」

言うようにそれは間違いなく破格の提案だった。要は国連軍に属さずとも夕呼にさえ協力していれば問題無いわけで。寧ろこの様な無茶苦茶な事柄が通るのかと疑わしく思うが、それを可能に出来るだけの権限を今の夕呼は有している。

秘匿の一つや二つ増えた処で今更であり、それが人類にとつて圧倒的に有利に働くのなら本質的には国連内で不服に思う者はいないだろうと。

また組織の活動が出来ないこの世界では刹那も行動の制限はほぼ無く。

刹那「…確かに悪くはないが、実際俺はなにをすればいい？」

夕呼「そうね。強いて言えば…：今まで通り武力介入、して貰おうかしら」

遙「でも本当によかったの…？」

刹那「……何がだ？」

全員での協議を終えて目先の方向性も定まると一先ず解散し、刹那は割り当てられた兵舎の一室を借り更に基地内に居ても違和感が無いよう国連軍の野戦軍装を支給されてそれに着替えを済ました頃。

サポート役を任された遙も同行してノーマルスーツからジャケット姿になった刹那を眺めながら問う。

遙「国連軍の私が言うのもおかしいけど、セイエイ君が副指令に協力する為にこの世界の戦いに参加してもいいのかなって。…軍にいるの、抵抗ない？」

結局夕呼の提案に同意した事について再確認したようで、元の世界での刹那の立ち位

置も鑑みて心配している様子を見せ。

刹那「構わない…何処に居てもやる事は変わらないしな」

そんな遙に対して寝台へと腰を下ろして顔も向けず目を閉じたまま端的且つ淡白に答える。

遙「…そつか。私達としてもセイエイ君が協力してくれると心強いけどね…」

刹那「……………」

悪く言うのと冷めた装いだが気にした様子も見せず。

微笑を浮かべる遙に尚も反応が薄い刹那。

遙「本当に…：神様が与えてくれたチャンスみたいだよ…」

胸に両手を当てて染々と感慨深く囁くように前の戦場で見せたガンダムの力は人類の難敵に対して有利を通り越し殆ど一方的な殲滅を可能としていた。

思い返すだけでも無意識に勝てるかと自信がつく程なまでの力に自然と呟いた言葉。それに珍しく刹那から反応を示す。

刹那「…この世界にも、神なんていない」

遙「…え？」

ハツキリと反発する言葉に伏せ気味な顔を上げるといつの間にか遙を見ていた刹那と視線が合い、その鋭く通って己を射抜きそうな眼差しに思わずたじろぎ。

刹那「そして俺も……戦う事しか出来ない破壊者だ」

尖った視線を向けたまま立ち上がりその場で遙を見続け、刹那の形相に何を意味して発せられた言葉か理解が追いつかないでいる。

遙「……それはあなたも……BETAと同じってこと……？」

然し意外にも自然と出てしまった言葉。彼が話した向こう側での在り方は世界を革新させる為に武力を以て戦う事、それは他者からすれば大規模兵器を使ったテロにも等しく……それ故に自然と漏れ出た言葉かは当然の遙も判らず。

刹那「……或いはそうかもしれない」

それを否定しない刹那。根本的には違えども”あの戦い”を経て己が破壊者に過ぎないと再認識した。それでも――

刹那「それでも俺は戦う。世界を変える為に……」

遙「……………」

今度は迷いなき目で。これ以上は遙も何を喋ればいいのか判らず、不透明な思考だけが残り。

その後は何も無かったように振る舞い時は過ぎ、サポートを任された為に刹那の隣部屋へ移住の変更を課せられた遙は荷物を整理しに一度自室に戻る。

「困った事があればいつでも」との声に「必要ない」と返された時には少なからず不満を

抱いたも、ただそれが遙の頭を占めて机の前の本を持ったまま沈黙しているわけではなく。

遙「孝之くん……」

囁いたのは嘗ての想い人の名。今は亡き彼にも戦う理由がありそれは自分も、人類も皆持ち合わせている。

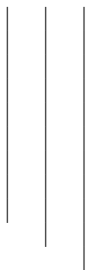
遙とて不意に思う時がある。この世界の命は一瞬で散り行くほど軽く、直ぐに誰かが逝ってしまうと。

遙「この世界に神はいない、か。……確かにいたら……恨んじやうよ……」

果たしてそういう意味で謂われたのか、刹那の言葉を今一度紡ぎ答えの出ない思考で、ただ明確で揺るぎないのは一つだけ。

遙「……決着がつくまでは、止まらない」

黙々と部屋を片付ける中に遙の意志が響く。



夕呼「で？」

純夏「…えつと…？」

武、剌那、遙、霞の4人が執務室から退席した後も次の「甲21号作戦」の細部を話し合うという名目で残った純夏に向けた夕呼の声に当人は首を傾げ。

夕呼「呆けてるんじゃないわよ。…白銀に言わなくていいのかってこと」

その反応に呆れ顔を浮かべ掻い摘んで補足する。

純夏「ああ…なるべく心配させたくないなって。タケルちゃん、あの様子なら覚えてないだろうから…あ、それにほら！香月副司令に対策もして貰いましたし！」

それで合点がいき掌を叩いて表すと暫し間を置いて心情を吐露し、あつげらかんと言ってみせる様子だが身持ちより表情は曇りが帯びそれに気付かない筈もないといった感じに。

夕呼「対処と言っても一時凌ぎみたいなものよ？」

純夏「うう…やっぱり駄目ですか…？」

敢えて要所のみ指摘してやると純夏も暗い顔を隠さなくなり尋ね。

夕呼「駄目かどうかなんて、計画に支障が出ない範囲ならあたしが決める事じゃないわよ。飽く迄二人の問題なんだから」

これも現実的で一切の私情を挟まぬ意見を述べて回答する。とは言え当然の事を言っただけで。

純夏「……………」

正論に押し黙る純夏。膝に着いた拳がギユツと握られ迷いある瞳。

夕呼「…あたしから言えるのは此れだけ。兎に角、悔いは残らないよう事に当たりなさい」

それを見兼ねた夕呼から溜め息が漏れると内心で「ホント、白銀と似た者同士」などと思いつつも微笑を浮かべ年配者としての助言を授ける。

純夏「……………大丈夫です…。わたしもタケルちゃんも…きつと大丈夫…」

夕呼の言葉に俯いた顔を上げて、ソファーに座る腰が浮きそうな程身を乗り出し何度
も大丈夫だと唱えた。純夏の瞳は一時の迷いが消えた決意に満ち——

遙が自室に戻り漸く部屋に一人になれた刹那は先ずは情報の入手と再確認の為に動く。国連が持つデータを一定の機密部分まで残されたタブレット（曰く階級も持たぬ特別待遇の刹那が情報に疎いのはマズイとの談で）を夕呼から貰っており、それを手に序言された通り片っ端から情勢や歴史等を閲覧していく。

刹那「カシユガルに甲1号が落ちた後は：気になるのは東西ドイツでの項目か」

機密ベースに記された部分に着目したのは光線級の先行駆除を目的とした通称・シユヴァアルツェスマーケン、中核を為していた第666戦術機部隊は18年前に解体され、BETAの侵攻により母国を失ったドイツ軍も今は殆どが主に国連のフィンランド欧州連合傘下に加わり散々した、と書かれ当時の詳細はほぼ無かったがドイツという国家内で内紛が起きたのは記事にも伝わっている。

刹那「他は…この基地に居る御剣冥夜…」

X F J 計画項目までこれまでの重要事項や過去の文献にも一通り目を通した後、注意したのはこの横浜基地に居るメンバー。

此所に来るまで自分を追い困ったのは香月夕呼が直轄の特殊部隊A-01で、それぞれ00ユニットの適合候補者で構成。更に訓練生に国連事務次官や内閣総理等の”ワケアリ”の子が多く属し、その中でもこの世界の日本の内政からして注意すべき者の名を見る。

政威大將軍の煌武院悠陽の双子の妹であり將軍家縁者として秘匿された女性。

刹那「…必要が無いなら、関わらないに越した事はないか」

以上の面々には関与しないのが最良と判断するも元から人との関わりを避けている刹那には杞憂だろうと、本人自身も自覚して次はBETAや戦術機含む兵器について調べようとした時扉から声が響く。

『おっ、居るんだろ刹那？メシ食いに行こうぜ！』

その騒音に内心では憂鬱やら鬱陶しいやらまだ面識も浅い声の主に色々と酷い心情を向けつつも寝台から立ち上がり静かに扉を開く。

刹那「…白銀武」

武「よっ！つーかフルネームかよ？かたつくるしいなあ…俺の事は気軽にタケルって呼んでいいぜ」

姿を現した刹那に呼ばれ不満気に尚且つ気安そうに碎けた言葉で目の前に立つ武へ更に刹那は面倒そうに。

刹那「何の用だ？」

その心情を隠しめせず訪問理由を短く問い。

武「いやいや、だからメシ食いに行こうぜって。つーか刹那こそ電気もつけないで何してたんだよ？」

刹那「……この世界についてだ」

そんな刹那にも遠慮なしに来訪時と同じく名前で呼んで臆しめせず要件を告げた直後、向こう側の部屋が真つ暗なのに気付いて覗き込みながら逆に聞き。

そんな武の顔を手に持ったタブレットで覆い視界を遮り、予め周囲を確認してからこれも端的に答える。

武「へえ……まあ勉強熱心なものいいけどよ、息抜きも必要だろ？」

漸く距離を置いて腕を組み感心する様子は兄貴面しているようで、実際一つ上なのとそもそも関心の無い刹那は気にせず。

刹那「必要ない」

きつぱりと断る間も身動きせず表情を一切変えず。

武「ぐぬぬっ……！そ、そう言わず頼むよー！皆に連れて来るって言っちゃまったんだ」

!!

頑固を通り越し一切関心を示さない様子にしびれを切らした武は遂に両手を合わせて深々頭を下げながら懇願してきて。

刹那「……あまり騒ぐな」

視線を張り巡らせるとそこかしくからこの事態に此方を伺う通り掛かり、或いは移住者の数名が見え、注目されるのをよしとしない刹那が折れた様に部屋から出て扉を閉める。

その行動に肯定と見出だした武はガッツポーズで。

武「よっしゃ、それじゃ早速行こうぜ」

刹那「……（これなら、沙慈・クロスロードの方がまだ簡単だった）」

先程までの情けない姿から一転して歩み出し、そんな後ろ姿を眺めつつ今は遠い少し前の隣人を思い出して後に続く。

茜「お、きたきた！」

千鶴「やつと来たわね」

美琴「遅いよタケル」。待ちくたびれてボク達もう鑑さんと大分仲良くなったんだからねー？」

純夏「あはは！タケルちゃんの遅刻魔〜！」

連れられたPXの中央テーブルに座り賑やかに声を掛ける面々を見て更に憂鬱になる刹那。そして何よりもつい先程関与を拒んだ者達の一同に会すこの場に珍しく額を押さええたくなるかの如き頭痛を味わい。

武「わりいわりい、刹那が中々口説けなくてさ」

冥夜「タケルは多少強引などころがあるからな。そなたも災難であつたが、許すがよい」

壬姫「はじめましゅ…ツ、あう〜〜」

そんな刹那を余所に頭を掻きながら純夏と冥夜の間の席へ向かう武と代わりに謝る冥夜、その隣で盛大にかむ壬姫。

刹那「……………」

最早言葉も発せられない事態に然し今更引き返すのも余計に面倒事へ発展しそうだと予測し、余所者という点からも穏便を求めて停滞を決め極力離れようと、一角のテーブル内で空いている席は幸い霞の隣側。

霞「…どうも」

刹那「…ああ」

物静かな彼女なら無駄な話をする心配も無くワケアリな処遇は寧ろ機密人物同士で心得ている為、安堵して着席すると案の定一解釈のみで終わり。

遙「えつと…ささ、さつきぶりだね…？」

刹那「…荷造りは済んだのか？」

遙「あ、うん。今日から隣人だね」

更に隣には部屋まで案内された本日付で名目上サポート役となった遙。前のやり取りで気まずさが残っているのかぎこちない様子にも刹那は淡々と接し。

これならばと思つた途端に目の前にガンツ！と景氣のよい音を立ててグラスが刹那へ。

水月「また会えたわね」

刹那「……誰だ？」

グラスを差し出した手の主へ向けば満面の笑顔。

見覚えの無い顔に直球で尋ねる刹那。

遙「……戦闘中に君を追い掛け続けてたつて言えば、伝わるかな？」

刹那「……あの時の機体のパイロットか」

当人が答える前に遙が耳打ちで教えると疑問が解けた刹那がグラスを受け取りながら改めて見て。

水月「戦闘中は世話になったわねえ。約束通り倍返しでお礼しに来たから覚悟しなさいよ？」

どうやら一筋縄ではいかない事を痛感した、尤も表情には微塵も出さないが。

刹那「……騒がしい奴だ」

水月「ぬあんですって！」

刹那の正直な気持ちに当然食って掛かる水月。

まもり「速瀬中尉」

そんな刹那に救いの手が。

水月「あ、あはは……倍返しは後日にとっておくわ」

丁寧な階級呼びと共に向けられたまもりの鋭い目、水月は掌で口許を隠して笑みで誤魔化す。

まもり「全くお前達ときたら。彼の言う通り騒がしいにも程があるぞ」

夕呼「あら、あたしは嫌いじゃないけど」

まもり「…副司令エ？」

普段から見慣れている光景にも精神疲弊した様子で頭を押さえボヤくまもりを眺め愉快そうに笑う、そんな夕呼を怨み籠った目で訴えるも尚も態度を崩さずに改めて周囲を見渡す。

夕呼「何人か来れないのもいるけどあまり増え過ぎると混乱するから、今は主催の207B分隊と元207Aを代表して涼宮茜、本来なら伊隅を呼ぶんだけどサポート役に考慮してA-01から速瀬。とりあえずこれらを紹介するわね」

同様に仕切り始めた夕呼に一同は改まり。

夕呼「まずは面識ある白銀以外の207B分隊から」

千鶴「はい！…紹介の通り207B訓練部隊の分隊長を勤める榊千鶴よ」

美琴「ボクは鎧衣美琴！宜しくね！」

壬姫「珠瀬壬姫です！」

慧「彩峰慧」

冥夜「御剣冥夜だ。もし分からねぬ事があれば何時でも頼ってくれ」

分隊長である千鶴が真っ先に、続いて美琴、今度は壬姫も嘯まずに言え、慧は普段通り短く、最後に冥夜が確りと。それを聞いたら早々に次へ。

夕呼「で、第一期に卒業して任官したのとその訓練兵を指導するのが」

茜「涼宮茜少尉よ。速瀬中尉とは同じ部隊で、そのA―01の涼宮中尉の妹でもあるから宜しくね」

まもり「そして私が衛士訓練学校の教官職務を預かる神宮司まりも軍曹だ」

水月「まあ茜が言っちゃったしこのまま私も紹介した方が手っ取り早いわね。特殊任務部隊A―01第9中隊・伊隅ヴァルキリーズの突撃前衛長を務める速瀬水月中尉よ」

茜、まりも、最後に流れに沿って水月が名乗る。

夕呼「涼宮：ああ、姉の方だけ。は二人に先に紹介したし207Bにも白銀達が来る前に済ませたから、皆知ってる社や白銀も含めて省略して：」

そして目線で斜め前の茜の前に座る純夏とまりもの前に座る刹那へ視線を巡らせて促し。

純夏「あ、はいはい！鑑純夏です！タケルちゃ：白銀訓練兵とは幼馴染みで、明日から207B分隊と行動を一緒にする事になりました！」

向けられた視線で察した純夏が早く立ち上がり拳手と共に元気よく名乗る。

分隊の面々は既に彼女が（名目上は正式に）試験合格扱いで加わり専用戦術機が届くまではCP等に徹する事情を聞いていて、武の前例があつてまた試験も既に突破済みなので誰も不平不満は出ず、更に武が刹那を連れてくるまで結構話しも弾んだようで全員受け入れていて。

千鶴「ま、まあ…精々期待しておくわよ」

それは特に衛士試験に躍起になつていた千鶴も同じで照れ臭そうに遠回しな歓迎を告げ、純夏の紹介は一段落する。

夕呼「…で、社と涼宮の間に居るのが刹那・F・セイエイ」

その流れで…とはいかず腕を組んだまま口を開かない刹那をやむを得ず代わりに夕呼が紹介する。

夕呼「実際に戦場で見た者…207Bには夕刻映像を見せた例の対BETA特攻戦略機動兵器、ガンダムエクシアの衛士よ。御覧の通りに無口だけど気にしないで…衛士には良くいる人柄でしょう？」

透かさフオローするも尚も黙りの刹那に場も沈黙してしまい。

その沈黙を破るように遙がグラスを持ち。

遙「そ、そんな事よりも！折角訓練兵の皆が提案して、香月副司令がPXを貸し切りにしてくれたんだしッ！乾杯しよ!？」

水月「は、遙……？」

夕呼「……へえ」

席を立ち丁寧に両手を添えたグラスを胸元まで持ち上げ控えめだが精一杯空気を交えようと喋り、そんな遙に普段なら殆どしない行動の珍しさから水月は面を喰らい、夕呼も何やら蛇足の混じる察しを笑みと共に遙と刹那を見比べ。

純夏「よ、よくし！それならわたし、特技を披露しちゃおうかなあ!？」

武「えッ！お前特技とか持ってたっけ!？」

純夏「ないけど今はやるんだよ！タケルちゃんのアホアホアホく!!」

遙の頑張りが純夏にも伝わるのか次いで席を立ち荒ぶるポーズに台無しな武の指摘も淡さりいつしか吹き出す面々。

冥夜「こんなに笑ったのはいつ以来であろう」

慧「二人の連携、実に巧妙……」

水月「あつはははは！あんた達面白いわねえ！」

普段あまり声を上げて笑わない冥夜も、無表情な慧もこの時ばかりは破顔し、水月に到っては腹を抱えて笑っている始末。

茜「ねえねえ、白銀と鑑さんってやつば——ッ」

夕呼「はいストップ。今はその宣告が折角収拾着けた場を血に染め兼ねないからね」

恐らく關係を追求しようとしたであろう興味本意な茜の口を塞ぐ夕呼。何時もなら率先して混乱発言を招く彼女も今回ばかりは相手が悪く制止役に尽くす。

隣席から背後に回られ掌で口を塞がれもごもご喋る茜に一層場の空気が和んだのを刹那はただ眺め。

何故刹那が黙っていたのか。それは単に愛想が悪いというだけではなく、適当な解釈を装い場に委ねるのが寧ろ一番無難で——なら黙りを決め込んだ理由は？答えは単純にある記憶を思い出していただけだ。

刹那（此所に居る奴等は、沙慈・クロスロードやルイス・ハレヴィのような顔をしている：違うのはいる場所が平和か戦場かだけ…）

何も素知らぬ平和浸かりの笑顔は腐るほど見てきた。だがそれを直視しようとしなはい：或いは出来ない刹那は周囲の顔を冷めた目で伺い見ようとしなかつた。然し偶然にも仮住居で隣人となった男とその連れの女は嫌でも刹那にその顔を向けてきて。

度々顔を見せた二人を無意識にでも鮮明な記憶に残してしまったのは問題は生じないも、特に武と純夏を見ているとどうしても沙慈とルイスを思い浮かべる。恐らく戦場の有無以前に本質が彼等に似ているのだろう……ならば自分は？

刹那（…俺は破壊者だ）

今はまだその結論にしか到れなく、過つた思考も戯れと一蹴。

そんな最中でも周りは思いい思いに談笑と面識なき者の交流が深まる。霞とて依然として口数は少ないも既に周知なのと傍らの純夏が構うのもあり調和していて、そこに自ら身を引いて浮くのは最早刹那しかない。その事は全く気にならず逆に楽だとも思うが。

『そう言えば此所に来るまでセイエイは何をしていたの?』

それは誰が質問したのか……いや、皆少なからず刹那の異端な雰囲気にはして複数人が尋ねただろう。

刹那「……戦っていた。戦い続けていた」

『!!』

現にこの場の全員が始めて反応した刹那を向き、質問したにも関わらず驚愕して食事も中断し目を見張る。

刹那「そして今も尚、戦っている……」

それはこの地では無い遠き世界。アザデイスタンと争い、少年兵になり、洗脳され、親を殺し、戦わされ、攻撃し続け、逃げ回り、そしてクルジスが滅び、同郷と故郷を失い、ガンダムが降りてきたあの日。

刹那「……俺のコードネームは刹那・F・セイエイ」

夕呼「……………」

だから――

刹那「お前達の謂う衛士としてではなく、ガンダムを駆る者……ガンダムマイスターとして。人類の敵も、紛争の引き金になるならば人やその兵器も壊す」

武「!？」

純夏「――」

例え輪に入れずとも、己の矛盾を曝け出そうとも。

刹那「全ての争いを駆逐するまで戦い続ける……俺が、ガンダムだ」

遙「……!」

霞「……ガンダム」

この世界でも戦い、歩き出そうと。

渴望する未来へ。

第7話「殲滅者」

恙無く食事を終えた刹那は自室へと戻ろうと歩みを進ませる。あの言葉に最初こそ静寂がPXを包むも直ぐに雰囲気は戻り、他の人も力を有する者からの忠告だと認識して気を引き締める事はあつても悪い空気にはならず。

それでもやはり多少刹那への独特な気まずさと遠慮が抜けず会話が弾んだのも結局は刹那以外。

武「刹那！」

当の刹那も戻ってデータ収集の続きという目的に頭の大半は占めていてただ黙々と歩を止めず、そこに駆け足で追い掛けて来た声を背中に受けて足を止める。

刹那「…雰囲気を壊した事は謝るが、撤回するつもりもない」

近づく武が何を言おうとしているかは刹那の中で予想がつき先手をうって先に謝辞を述べ。

武「そういうんじゃないよ……いやアレを容認する訳じゃないけどよ」

刹那「要領を得ないな……」

然し予想は裏切り否定するも直後に肯定とも取れる台詞を投げあたふたと忙しなく

身を動かす様子に刹那にして基地に来てから何度目かの溜め息を吐き、ハッキリと指摘してやれば武も何とか落ち着きを取り戻し。

武「まあなんだ……つーかさ、こつちこそまだ謝ってなかっただろ？」

漸く冷静になった頃には逆に謝罪する意を催す言葉に向き直った刹那は疑問に思い表情にも現れ。

刹那「……？」

武「そこは不思議がるなよな。……お前がこの世界に連れて来られたの俺のせいかもしれないじゃん？だからさ……御免!!!」

正面から合った目線より訝しむ顔に正直恨み言の一つも出るだろうと覚悟していた為、予想の斜め上な反応には呆れるしかなく。

本気で理解不能な様子に観念して速やかに謝る理由を述べては来訪時よりも深く頭を下げ。

刹那「……何故謝る？」

だが謝ってもその理由さえ理解しない刹那に流石の武も困惑して頭を上げて合わせた掌も崩し。

武「何故って……巻き込んだしまったんだから普通申し訳なくなるだろ？」

刹那「なら問題ない……気にしていないからな」

仕方なく謝罪理由から述べるも一変しない薄い反応が返ってくるばかりで、気に病む必要すら無いと断言されては言葉に詰まり。

武「でもよ…」

刹那「それに俺はこの世界に滞在し続けるつもりもない」

なんて言えばこの気持ち伝わるか頭で試行錯誤するも見付からず後頭部に掌を当てて申し訳なさそうに刹那へ視線を向け、再び黙りかと思えば続け様に言われた事へ耳を傾け。

刹那「ここに居る間は力を貸す。奴等の排除もハイヴ攻略も俺の意志で手伝う…だが帰還方法が判明し次第、俺は直ぐにでも向こうへ還る。やり残した使命を遂行する為に」

武「刹那…」

何処までも信念を貫き通すかのような強い眼差しは先程PXで見せたアレと同等、揺るがない意志と共に吐露されると最早名を呼ぶのみしか言葉が出ない。

刹那「謝罪だけが用件なら、気にしていないから俺は部屋に戻る」

その後は武の心情の有無も無視してハッキリと告げれば踵を返して再び部屋への帰路目指して歩み出し、そんな刹那の背中を今は見送る事しかできないまでもここで問題が一つ。

武「……俺、隣の部屋なんだけど」

これも仕方なしに今までのやり取り上、動向して傍らを歩む気にはなれず肩を落としながら刹那と距離を置いて武も部屋へ戻る。

時間を僅か遡り他の面々より先に食事とささやかな談笑を終えて自室へと戻った御剣冥夜は同じく部屋に控える月詠から渡された資料に目を通す。

冥夜「……………」

月詠「白銀武でさえ城内省のデータベースに残されているのに、この男は何処にも……」
月詠が気になっているのは当然、先程PXで一同と会し食事と取っていた刹那の事で

ある。

以前軍でいうところのKIAが確認された武へ問い詰めたのは記憶に新しく結局種は分からず、人となりは害する様な存在ではないと判断し見送っているが今回更に増えた謎の機体の乗り手。基地副司令の夕呼は直属の特務官としてそれ以上の事は明かさなかつたも鵜呑みにする月詠ではなく、刹那が横浜基地を訪れたと同時に大至急、帝国斯衛軍の部下達に調べさせたのがこれまでの経緯。

結果は国外にも国内にも該当する人物はいなくそれを冥夜に進言しようとする部屋に押し掛けたのが現在。

冥夜「…いや、よい」

月詠「しかし！」

短い間無下にする事なく応じていた冥夜も直ぐに資料を突き返し、暗に問題無いと示すも看過できぬと反論し。

冥夜「くどいぞ。それにあの者は一応国連軍の枠内で、風貌を見るに恐らく中東の出身者：それに本人も先程コードネームだと言っていたであろう。本名が分からぬ以上調査など…」

尚も引き下がらない月詠を制する様に推論を並べ。

月詠「素性も知れない相手を冥夜様の側に置くなど危険すぎます!」

冥夜「香月副司令のお墨付きで、月詠は納得してくれまいか…」

立場上ただの国連軍所属の見習い衛士で納まらないのは本人も重々承知しているつもりだが、これが当たり前でも世が世なら拘っていてもキリが無いのもまた事実と。

副司令を盾にはできないのは武の前例で証明されていてどうしたものかと額を押さえる。

冥夜「…少なくともあの者の…セイエイの目は真っ直ぐ前だけを見つめていた。それはタケルも同じ…無論それだけで事が丸く修まらないのは分かっているが、私は信じるに値すると思っっている」

月詠「冥夜様…」

言葉が表す通り真っ直ぐに月詠へ向いて断言する。その瞳には一切曇が無く。

冥夜「それにこうも言っていた。全ての争いを駆逐すると…それはBETAだけでなく人の内紛も含めた物言いであった」

少し前を思い出し、大半は仲間や先輩や上官との近日稀に見る賑やかな一時。

その最中刹那が初めてハッキリと自分達に向けられた言葉は決して穏やかな内容ではないもその瞳の奥にある信念は疑いようも無く、それは衛士になるべく日夜精進していた他の仲間も同じ気持ちだっただろうと。

月詠「……では更に申し上げますと、鑑純夏。刹那・F・セイエイが現れたこの日に急な配属……これは偶然なのでしょうか？」

意見が揺らがないと月詠が次に挙げたのは純夏で、本人も言ったように武とはかなり親しい関係にあり此方はデータベースにも改竄の痕跡なく唯一残されていた最後の記録は『負傷による集中治療』のみ。

諸々の不自然さを指摘するも当の冥夜は笑いながら。

冥夜「鑑か！あの者もあの者で中々変わっていたな。このような世界であんなにも幸せそうに笑う女性がまだ居ようとは……タケルとの仲は少し妬けるが、私は好意的に感じているぞ？」

PXでの話した印象や内容に武との半ば漫才じみたやり取りを思い返し、口許を折り曲げた人差し指の第二関節で隠して笑う。

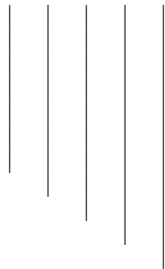
月詠「…変わられましたね、冥夜様は…」

冥夜「そうか？……ならばそれは今宵の鑑やセイエイ、そしてなによりタケルのお陰であろうな」

その様子を見て呆気にとられた月詠は以前までの彼女では考えられない程和かい笑みにただ思うままの感想を述べてしまう。

そんな月詠に絶えない笑みを向けると彼女も僅かながら口端を上げたのは冥夜の気

のせいかな。



S i d e . 夕呼

楽しくなかったと言えば嘘になるけど、終始セイエイの動向を気に掛けていたあたしからしたら結果今回の催しはまさに天国と地獄の隣り合わせ。それはあいつを計画に巻き込もうと算段した時点で概ね分かっていたし今更かしら。

思えば同席者のまりもともあれほど長く私情で話したのはお互い学生の時以来かもしれない……と、感慨に浸るのはこれ位にしよう。何せ幾ら犠牲を出そうと計画は絶対に

止められないのだから。

大小気掛かりな点は多くある。特に最近BETAが異様な頻度で侵攻を繰り返すのには正に今人類の希望が誕生するという段階で絶望にも等しかったのだから。

まりも達の前では動揺を悟られぬよう振る舞ったが、佐渡島ハイヴから旅団が攻めてくると確定された時には正直今度こそ帝都を含め日本の本体であるこの基地の壊滅を覚悟したけど吉報も届いた。

1つは00ユニットが覚醒して、その鑑が言うループと白銀の代替世界に関する情報。そして2つ目は正体不明だがBETAに敵対的機体の存在。

前者は白銀にも言えるけど例え未来の情報でも分岐した世界では根本的な解決にはならず、00ユニットの本懐を為すXG-70が届かない現時点では物理的には意味を為さない。

そんな時に現れたのが後者の機体。圧倒的な物量差も覆すくらいガンダムの性能は底が知れず：航行速度も機動性も出力も恐らくは装甲強度も、あらゆる意味で戦術機とは桁違いであり、それを可能にしているのは凡そ背部のあの粒子を散布した動力源。

BETAのG元素と同じく製造法や全てが謎の包まれた異次元の技術。それが一時的だがあたし的手中に：このチャンス逃す訳にはいかない。

夕呼「絶対に解明してみせる」

ガンダムエクシアはあれ以降動く様子が無く、多分だけどセイエイの認証無しではコクピットも開かない様に嚴重な処置がされている。なら解析は独学でやるしか…。

あの様子を見るにセイエイは多分機密を漏らすことはない。尋問など非人道的な策を取つてもましてや軍の全女性隊員を使つて身体で懐柔しようと口を割らないだろう…下手をすれば彼が、ガンダムが敵になつたら？XG-70が完成していない今の人類ではそれこそ1ヶ月も保たないわね。

何にしても共闘できるならそれに越した事はない。

夕呼「イオリア・シユヘンベルグ…」

向こう側の世界でガンダムを…GNドライヴの開発に繋げる理論を構築した人、生きているなら会つてみたいわ。どんな企てで戦争の根絶なんて理念を掲げたのか。

S i d e . o u t

次の日の朝。

刹那が仮住居する部屋の前に遙は訪れていた。一応サポート役として、また夕呼にも気を配るよう命が下されている為、今日から優先的に行動を共にする必要があると判断したからだ。

遙「……居ない」

ノックをしても声を掛けても反応がないので仕方なく扉を開けて室内を見渡すもぬけの殻。

遙「まさか…そんなわけないよね……」

基地を抜け出した可能性もあるがそれなら何かしら警告がある筈。それが無いとすれば部屋以外の場に移動したかと普通は思うが、ベッドの掛け布団が見当たらずある可能性が過る。

遙の予感通り刹那は現在、エクシアのコクピットの中にいた。仮眠を取るためと寝台から拝借した布団を身を掛けて。

理由としては単純明快でセキュリティを基地に委ねた部屋でおちおち睡眠を取るわけにはいかず、要は完全に此処の人間を信用したわけではない。何かあれば直ぐに起きよう警戒は怠らないも機体内ほど安全な場所は無く、BETAが居る外では満足な睡眠も取れていなかったのもあり一氣に不足分を解消するためにと最も安心できる場で寝たかったからであり。

そんな睡眠も十二分に取って現在はエクシアの機体チェックに勤しんでいる。

刹那「粒子チャージ率：問題なし。各部損傷も該当はない：いつでも出撃可能」

最後の確認を終えると機体を完全閉鎖モードに切り替えて、布団とタブレットを片手にコクピットから降りる。

『うわっ、お前まさか機体で寝てたのか!?!』

ハッチを閉めて嚴重にロックを掛ける装置の携帯型スイッチを押したところで脇から声が響き刹那はそちらへ振り向き。

刹那「誰だ……」

アルベルト「おう！俺はアルベルト・フォイルナー！ここの整備士だ！」

活発に名乗る視界に移した男は刹那と同年代くらいの金髪蒼眼の青年。

整備士といった通りつなぎの作業服を着たアルベルトは片手に持った工具ともう片方の手の身分証を刹那に見せ。

刹那「…刹那・F・セイエイだ」

アルベルト「刹那か！宜しくな！あ、因みにフォイルナーっていつでもあの公爵家の人間じゃねーからな。あんな怪力女と一緒にしないでくれよ？」

その元気さのまま刹那の肩を叩いてニカツと笑うアルベルトは急に一人で喋り出す。

アルベルト「偶々姓と髪色と眼の色が一緒ってだけで絡まれてさー、弟扱いしてきて参ったぜ。一年前はドーバー基地に居ただけどいきなり剣術だー体術だーって、俺は衛士適正落ちてんのに身体を鍛えようってその後も構ってくるから、結局逃げる感じで

日本基地に来たけどイルフリーデにはいつかぜってえ報復してやる！」

刹那「…？ああ、そうか」

次から次へ語り出すアルベルトだが当の刹那は何一つ聞き覚えのない要素に相槌しかうてず。ドーバー基地という単語は昨晚データで確認したのでフィンランドの欧州基地という点は分かるがそれしか把握していなく。

アルベルト「んな感じでここで整備士やつてるんだけど……なあ、この機体いじつてもいいか？」

刹那「断る」

一通り自分について語り終わった途端にエクシアを見つめて口にした要望に対して刹那の目が鋭くなり。

アルベルト「即答かよ！ま、冗談だけど…俺ごときが触つてもG元素並の未知の素材で出来てるくらいしか理解出来ねーし」

そんな睨みもアルベルトは気にせず。

刹那「…よく喋るな」

アルベルト「俺からすりやお前が無口すぎんだよ…そんなわけで俺を含めた数人が外装だけは綺麗にしといたからよ。……まさか人が乗つてるとは思わなかったけどな」

そう言つて背後を指すと戦術機用の清掃具と思わしき機材がまだ片付け途中でデッ

キに散乱している。

その光景に刹那がGNソード部などを見ると付着した血痕が綺麗さっぱり拭き取られていて、言葉の意味を理解したらそれ位は容認するのか表情歪めず。

刹那「そうか……助かる」

アルベルト「てかBETAと戦ったん…だよな？向こうの94式と比べて大分綺麗なのなんでだよ…」

移した視線の先には同じ区画の4つほど離れた場に置かれた不知火がありまだ整備中といった様子で何名かの作業員と乗り手の、刹那からすれば見知らぬ女性衛士（風間禰子）が居る。

言葉の裏にはまさかサボったのか？といった疑念の目が向けられ。

刹那「好きに解釈して構わない」

そんな目線にも無表情かつ無愛想に答える様子に呆れて溜め息が漏れ。

アルベルト「まあいいけどさ。んじや俺は今からPXに行くけど、よかつたら一緒にどうよ？」

デッキやエクシアの足下に置きっぱなしの機材はどうやらそのままにするよう朝食を共にと誘われた刹那は暫し考えるも特別何かあるわけでは無いと頷き。

刹那「…ああ」

アルベルト「決まりだな」

相変わらず口数は少ないも早くも刹那の人となり慣れたみたいで特に気にせず笑顔のまま歩き出したアルベルトに続くよう刹那も歩を進ませデツキから降りて移動する。

道中も基本的にアルベルトが一方的に話し掛ける形で己の話しや刹那について聞いたりと会話は絶えず、また一応聞いているのか要所で相槌や答えられる質問には返事し、遠慮はないが深く踏み込んでこないため刹那も居心地が悪いといった様子は無く歩み続け。

横浜基地は基本地下構造で昨晚閲覧したデータベースから此所が元ハイヴだったのを心得ているので納得もいき、戦術機も殆ど地下に収納されているため当然ながらエクスアも現在地下に在り、そこで寝ていた刹那と整備士として作業中だったアルベルトもPXへ行くには一度地上へ上がるか限られた通路を使う必要がある。

直接基地司令部及び訓練校やPX等の各施設に繋がる道は屋内でも数通りあり、刹那が一度寝具などを置いてくる為にと兵舎へ続く通路を選び。

自室の前まで到着した刹那が荷物を置きに行く間アルベルトは扉前で待ち。

『どわあああッ!!お、お前なんで此所に!?!』

『えへへへ、昨日から此所にわたしも住むんだよ。隣はセイエイ君が使ってるからね！……聞いてないの?』

『知らん! つーか服を着ろ服を!』

アルベルト「あん?なんだなんだ?」

その間突然扉が半開きになっている隣の部屋から声が響き渡り、気に留めたアルベルトがそちらへと近付き。

武「だあー! シーツに包まればいいって訳じゃねえだろ!? 帰れッ!」

アルベルト「アバターツ?!?!」

耳当てするか覗き見するが定かではないが顔を寄せた瞬間に勢いよく扉が開いて結果思いきり顔を強打したアルベルトが撃沈。

純夏「だから帰るも何も此所がわたしの……へ?」

武「あ? 誰だよ俺みたいな雄叫び上げ……マジで誰?」

原因となった部屋主の武と続いてシーツを身に纏った純夏が顔を出し床に倒れたアルベルトを見て。

刹那「…お前達は何か問題を起こすか騒いでいないと生きていけないのか?」

武「あ…よ、よう刹那」

純夏「あわわわっ! お、おはよう」

アルベルト「…床冷てえ……ガクツ」

そこに丁度寝具とタブレットを置いてきた刹那が扉から出てきて地に伏せてたつた今気を失つたアルベルトを流し見て、気付いた武と己の格好故に慌てて扉奥に身を隠し顔のみだして解釈する純夏に内心呆れながら無表情で視線を向け。

頻繁に問題を起こすという点では刹那は俗にいう「おまいう」だが。

武「いやだつて純夏がよ」

純夏「タケルちゃんが意地悪なのが悪い!!」

刹那「……………」

それでも尚も言い争おうとする二人に付き合いきれず一旦倒れたアルベルトの腕を掴んで引き上げた後に肩を貸して支え。

遙「やつと見付けた……!」

刹那「…今度はあんたか」

そんな時に刹那を探していた遙が僅かに息を切らせながら駆け寄り。

武「あ、おはようございます涼宮中尉!」

純夏「お、おはようございます……」

遙「えっ?あ……う、うん。おはよう白銀君、鑑さんもね」

衛士訓練を受けていた遙は直ぐに息を整えると挨拶した武達へ笑みを浮かべて返し、

次第に人が増え始めた事に羞恥心も増す純夏は遂にアホ毛部分のみ出し。

遙「セイエイ君昨夜はどこに？」

剌那「その前に手が空いているなら手伝つてくれ……」

解釈を済ませれば本題を切り出し目の前に立った遙へ質問に答えるよりも先に肩でぐつたりするアルベルトを見せて助力を頼み。

遙「フォイルナー軍曹!?!…あ、そつか!セイエイ君は医務室の場所……!」

それを見て何事を目を見張るも基地に来てから案内もしていない剌那が医務室の場所を知らない可能性に気付き、力なら足りているもその意図に気付いた遙が直ぐに側へ寄つて必要云々は関係なく反対側の腕を肩に回して支える姿勢を安定にし。

遙「こつちよ!」

剌那「ああ……」

慌ただしく医務室へと向かい去る二人と負傷者(?)一人の背中を見送り一気に静かになった兵舎の通路。

純夏「なんか悪いことしちゃったね……」

武「まったくだ。…仕方ねーな、部屋戻るぞ」

角を曲がり姿が見えなくなるまで見据えていると漸く扉から出てきた純夏に余計な力も抜け、落ち着いた頃には頭には掌を添えて撫で回し。

純夏「え…いいの？」

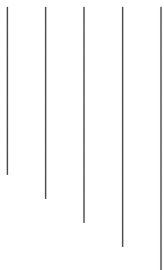
武「またそれか？とりあえずはだ。…流石に目の毒だから服は着てくれ」

純夏「うん!!」

武（…そういや前の周回ではこの時期たしか霞と一緒に暮らしたっけ）

同衾するかはともかく同室の承諾が下り嬉しそうに腕に抱き着く純夏。武も満更ではない顔でふと思いついた記憶を内心呟くと二人共に室内へ戻り、今度は扉も確り閉める。

因みにリーディングで今の呟きもバツチり聞こえていたのかこの後大胆な行動に出たり出なかったり。



無事医務室までアルベルトを送り届けた刹那は予定通りPXに来了。遙も同伴を申し出たので了承し、まだ質問に答えていない事と後々の追求も面倒なのが了承の理由らしい。

遙「やっぱり機体に居たんだ：どうして部屋で寝なかつたの？」

道すがら昨晚の動向も伝え済みで当然次の疑問が生まれれば臆せず聞き。

刹那「寝込みを襲撃される可能性を考慮した」

遙「そんな！……ううん、確かに昨日今日で信用するのは無理だよ」

それは暗に基地内の人間が自分へ危害を加える可能性を疑惑として持つ事を意味していた。

最初こそ否定しようと声を上げた遙だが、此所に来てまだ一晩しか経っていないく更に異世界からの来訪者という点や圧倒的性能の機体を有するなら刹那が疑うのも当たり前な思考であり、それは遙として理解に及ぶ。

刹那「エクシア自体は俺の認証無しでは起動しないが、俺自身ならどうとでもできる……」

遙「……そっか、セイエイ君も人間だもんね」

刹那「……何故嬉しそうなんだ？」

淡々と言う刹那の語りに無意識に微笑が浮かぶと人間であるのは当然だと思いつつ、微笑の理由が分からずに指摘しては遙も今の心情を自覚し。

遙「えっ、……あ。その……なんていうかね、ちよつとだけ距離が近く感じたのが嬉しかったのかも」

刹那「……？」

慌てて両頬を触ると僅かに顔が熱いのが分かり、年下の男に見抜かれたのと冷静な指摘の内容が故に恥ずかしく、素では照れ屋な遙は顔を赤くして素直に思った気持ち告げるもその状態も話す内容もイマイチ理解出来ない刹那はただ疑問が深まり。

京塚「おや、遙ちゃんじゃないかい。一緒に居るのは見ない顔だね……？遙ちゃんが一緒に居る事は……ああ！あんたが昨日から入ってきた特務官様かい？」

PXは昨日も利用したが食堂として注文するのは今日が初めての刹那は遙に促されるキッチンエリアへ向かうと臨時曹長である京塚志津恵が出迎える。刹那の存在を知っているのは昨晩夕呼から聞いていたからだ。

遙「おはようございます」

刹那「……………」

京塚「なんだい、覇気のない坊やだねー。名前は？」

刹那「刹那・F・セイエイ」

然し刹那の淡白な様子に眉間を寄せると名乗りにも覇気は微塵も無く。

京塚「セツナだね。よし！じやあ特別にあたしが精のつく料理を出してあげようじゃないか！初日サービスで勿論おごりだよ、サポーターの遙ちゃんもね！」

遙「えっ？あ、ありがとうございます…あの私は普通の豚角煮定食で！」

刹那「いや…俺も普通のを……」

階級こそ下だが年上でおぼちゃん肌の京塚に礼儀正しい遙はつい敬語で。そんな京塚の豪傑で威勢のいい言葉に刹那の声は届かず遙の注文のみ「あいよ！」と答えて早々に調理場へと離れ訂正が利かず。

そうして暫く待つと遙の前には事前の注文通り合成豚角煮定食が、そして刹那の前には皿に唐揚げや野菜炒めが山盛りで積み上がり丼サイズの豚汁に茶碗から飛び出した極大盛の白米なる合成スペシャル定食が置かれる。

遙「……………」

刹那「……………なんだこれは……」

京塚「あたし特製の合成唐揚げ定食に野菜炒めと豚汁を付けた極超大盛り合成スペシャル定食だよ！残さず食いな！」

出てきた朝食の量に目を見開き戦闘時でも無いのに珍しく驚愕する刹那へ一辺の曇らない笑顔で言い親指も立てる京塚のおぼちゃん。とその光景に開いた口が塞がらない

遙。

刹那「…何かの手違いか？」

遙「あはは…多分手違いはないと思うよ」

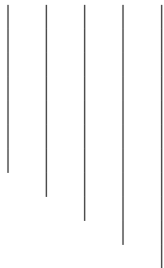
仕方なしと大人しく用意された定食を持って空いているテーブルへ行きお互い向かい側に座り。

刹那「……………」

遙「い、いただきます…」

問題無く(?) 食事が開始される。

こんなところで刹那の性格による弊害が出るとは自覚している本人も思っていなかった。



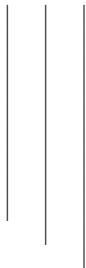
『——もしもし…ああ、あたしだけど』

『…そう、例の天元山の災害救助出動の件。訓練部隊にも出動要請が来てたわよね？悪いけど、彼らは今あたしの直轄で動いてもらってるから…今持つてかれると困るのよね』

『——さあね、それはご想像にお任せするわ。…そう、じゃあそういう事で』
『…手段？それはそちらが考える事でしよう？』

『もつとも……取れる選択肢はそう多くないでしようけどね——』

『……ふう。白銀の進言通りにしたけど…果たして吉と出るか凶と出るか』



自室に宛がわれた部屋に戻って寝台に座る利那は今日一日の疲労に苛まれていた。あれから大量の食料を胃に入れて平然を装うも消化さねばと遙の制止も構わずランニングや様々な運動を熟した。トレーニングにもなり満足に食事を取っていなかった問題も解決し今は確り消化も済んだ為、結果的には得に繋がったが。

その最中に遙や水月、茜以外のA―01のメンバーと会った時の記憶が通り。

みちる『貴様がガンダムの衛士か…A―01部隊の伊隅みちる大尉だ。隣の宗像は男嫌いだから色気を出すなら気を付けろよ?』

美冴『大尉…私は男嫌いではありません。気持ちよければなんでもいいだけです。…改めて、宗像美冴中尉だ。宜しく頼む』

禊子『ふふ、美冴さんは相変わらず…初めまして、私は風間禊子少尉ですわ。困った事があったらいつでもいらっしゃい』

晴子『柏木晴子少尉だよ、宜しくセイエイ特務官! 本当ならさつきまで築地多恵少尉と高原少尉、麻倉少尉って娘もいたんだけど…タイミング悪かったね』

自己紹介の部分は覚えていたがそれから何を話したかは思い出せないでいる。

余談だが刹那は基地での立場上で夕呼から特務官任命されており、正式な階級は与えられていないが殆どが大佐クラスの扱い……なのだがそこも事前に夕呼から上下関係は無しと通達されている為直轄部隊は全員が気軽に話し掛けてくる。

これも刹那にとってはメリットとデメリットを併せ持つが。

刹那「……なんだ」

一旦記憶探りを止めて、今晚もエクシア内で睡眠を取ろうと立ち上がった途端に机に置かれた通信機器が反応し、耳に掛けてマイクを口許に持つていき。最も現状で掛かってくる相手はコードを知り支給した人物のみで。

夕呼『早速だけど武力介入をお願いしたいわ』

送話主の夕呼から単刀直入に出撃依頼が届き、それと同時に基地内に警告音が鳴り響き『防衛基準態勢3発令』の通達が。

刹那「了解。ミッション遂行の場と内容を」

夕呼『話しが早くて助かるわ。場所は山梨県旧甲州市の東北……詳細はデータで送ったから頼むわね。侵攻を許せば此所や帝都が危ないの』

手早くノーマルスーツに着替えヘルメットと任務内容が記された機器の画面を拝見しつつ格納庫へ走る。

今回観測されたのは地下侵攻における最大大隊規模のBETAで山梨県旧甲州市の詳細地図にあるマークが出現地点。厚木基地の戦術機中隊が出撃予定で横浜基地と横須賀基地も状況に応じて順次出撃——ここは恐らく刹那次第だろう。また光線級の確認を認めずという事から第一陣は凄腕揃いだ。数は最小規模で押さえるようだ。

刹那（レーザー種が居ないのは気になるが…）

粗方確認をすれば格納庫へ辿り着き何も無いデッキへと駆け出し、朝食後に念の為にエクスアの外部迷彩皮膜で透視化を施していた。

周りを窺えば何人もの整備士やデッキ上には頻繁に見掛ける戦乙女の衛士が強化装備を纏って不知火の管制モジュールの側にいる。

刹那「GNシステム、リポーズ解除：プライオリティを刹那・F・セイエイへ。——

——外壁部迷彩網膜解凍：GN粒子散布状況のままブローディングモードへ……」

機体の許へ駆けながらも耳に掛かる己が所有する数少ない元の世界の小型機器を押し、認証言語を通してはコクピットは明るみを戻し各機能が再起動、迷彩皮膜が解除されて透過状態からエクスアが姿を現し粒子を通常モードで散布し。

突如透過を解除した機体を視界に移した隣側のデッキに居る茜が同じくデッキに上がり走る刹那と目が合い驚愕の表情を向け。

茜「——…ッ」

刹那「……………」

出撃準備態勢の緊張と共に昨晚気ままずいまま以降顔を合わせていない事に言葉が詰まり、そんな茜を一望するも直ぐにコクピットへと乗り込み。

ハッチが閉まると何者かが可動デッキを操作しているのか道が開け。

『各戦闘部隊は戦術機管制ブロックで待機、即時出撃態勢指示が下るまで現状を維持せよ』

夕呼『尚本防衛戦の第一陣としてガンダムエクシアは出撃させるわ』

茜「ッ!」

みちる「!」

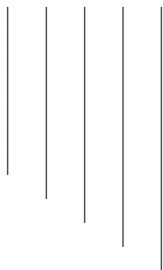
通常のCPからの音声の後に普段ならばまず無い夕呼からの指令が発せられ部隊の面々は驚愕。

刹那『ミッション了解。：エクシア、出撃する』

本来は格納庫から直接出撃する場合カタパルトを使うのだが戦術機の機構に造られたのとエクシアが使用可能かテストもしていない為そちらは使わず、低く浮上して周囲への風圧等の被害を与えぬよう鈍い走行で出口を目指し、カタパルト上に辿り着けば出撃を模様する言葉と共に一気に加速して射出路を抜け。

茜「セイエイ…」

ガンダムが出撃していく光景を見送る茜。本来一機のみで向かうのは異常事態だが、刹那に関しては正に特別でありその梓に囚われず。それでも万全を重んじる茜はどうか複雑な心情で姓を囁いて。



女性CP「厚木基地第404戦術機甲大隊、旧甲州市でBETAと接敵！」
ラダビノット「始まったか……」

横浜基地の中央作戦司令部は帝国軍厚木基地の司令部と通信を取り合い戦況を確認する。

地上に這い出たBETA大隊と戦術機大隊が交戦を開始した事を報せるCPの声に

基地司令のラダビノットがモニターを注視し。

夕呼「陽動はあくまで甲州市内に留めるよう作戦は下っています。大月市または北都留郡まで侵攻された際も最小限の被害で応戦すれば問題ありません」

ラダビノット「むうう…：このような作戦を認めざる終えないとは…」
作戦内容を話す夕呼に顔を顰めて唸る基地司令。

夕呼「…要請した増援部隊は既に到着済みらしいです」

ラダビノット「くっ…：厚木基地の作戦司令部は何を考えているのだ」

今回第一陣出撃作戦の指示を出したのは厚木基地の方でその裏で夕呼が出したのはガンダムへの投入。なので実際の作戦立案は向こうの司令部と夕呼だが便宜上は厚木基地司令部の陽動・防衛作戦という事になっている。

夕呼「立案したのはあたしですが…：少々無茶なのは否めません」

ラダビノット「いや…：博士がガンダムの投入をしなければもっと被害は出ていただろう」

厚木側が要請したのは刹那とエクシアの増援のみ。これは今や夕呼にも良策ではあり。

夕呼「別動隊で米軍の太平洋艦隊が相模湾沖に展開しているのは事実です。恐らくガンダムの存在が影響してると思いますが…」

最前線の日本から撤退した米軍がアジア圏での発言力回復させるべく内政干渉等を企てている可能性は数々の証言から日本側に伝わっており、そんな時に国連軍であり日本基地でもあるこの横浜が秘密兵器ガンダムを所有すると前の新潟防衛ラインの戦闘で知れ渡っていればあちらは僥倖といった感じで部隊を派遣するのは見当がつく。

現在も機密扱いではあるがあれ程ハデに暴れては隠せるとは思っていなかったが：

ラダビノット「しかし艦隊を寄越すのが早すぎる」

夕呼「ええ。：他に何か要因があったか」

ラダビノットの言う通り、飽く迄ガンダムを夕呼直轄の特務機体としたのは先日。然し目撃されたのは数日前で米軍にも問い合わせた件を鑑みるなら活動範囲的に日本へ向かうのは理屈としては通る。

それでも準備等の期間も合わせれば急遽で、夕呼は何か別の思惑があり偶々、或いはそれほどガンダムに着目しているかのパターンで推論を立て。

ラダビノット「増援部隊にも国連軍の米国兵が混じっている：これ以上介入される事態になる前に叩かねばならん」

夕呼「仰る通りです（セイエイ：頼むわよ）」

切迫した状況を改めて噛み締めると二人は同時に頷き意見は一致し、ガンダムの到来を司令部も待ち望む。

横浜基地を出てから瞬間加速を最大にして飛び出したエクシアは現在既に月見市を抜けようとしていた。飛翔中に胸騒ぎがした刹那は航行速度を緩めず。

刹那「目標地点に到達。……光線級の熱反応？やはり情報に狂いが…介入行動に移る」

そして漸くBETA生息地に辿り着き一気に距離を詰めるとモニターから戦闘空域を確認し、光線級を捉えるも構わず。

高度を取っている為少数だが当然レーザー照射が直ぐにエクシアへと放たれるも今回の上空から強襲行動は作戦内に記されていて以降は独自判断でBETAの迎撃を任

されている。光線級が居なく支障が無いならと刹那も従うがそれは存在し、だとしても基本的に光線級を優先して狩る為上空砲撃をするのだから結果は変わらず。

帝国衛士『レーザー照射だ、恐らく新瀨での機体だろう。作戦通り通信を切り替えて各機後退せよ』

部隊衛士達『了解！』

エクシアのみ可能とする高度を取った戦法と光線属種照射の合わせ業は既にその存在が判明ししやすい行為となっている。

レーザー照射を回避してインターバル時にビームで返すのはお約束と化しているが今回は狙撃の数が少ないので回避と共にGNソードをライフルモードのまま発射地点へ放ち、着弾した場合は高出力の熱線により爆発が巻き起こって光線級も直撃すれば溶解し近場にいれば爆風で吹き飛び、今回も3体の光線級が纏めて残骸となって残るは6体。

出力向上から速射性を優先にと切り替えて瞬時に2撃目3撃目が放たれると続く光線級が2体直撃して早くも4体のみとなり、またもレーザー照射が放たれるが上下左右の機動を屈指して難なく避けて再度粒子砲を撃ち残る光線級を爆散。

帝国衛士少尉『相変わらずの化け物つぶりだッ！』

レーザー照射が止んだ事に早々光線属種が舞台から退場させられたのを察知し、上空

から降り立ち目の前で残存個体数の少ない突撃級を次々粒子砲で撃ち抜く様を見ては
圧倒され。

帝国衛士『よし、帝国軍の各機は撤退行動に移れ！帰投して彼等と合流する！』

エクシアが戦列に加わり突撃級を粒子砲や垂直剣で斬り裂き全滅したのを確認した
途端、不知火と数機の撃震が後退し突撃級に注意を払いつつ突撃砲で要撃級等の迎撃を
繰り返す作業から完全に砲撃を止め月見市の方角に飛び去る。

刹那「撤退していく…?」

突撃級には突進する特性から地上にて迎撃したも残る要塞級が存在しない大型種の
要撃級と各小型種は効率よく捌く為に再び上昇して、上空攻撃の手段を持ち得ない種族
に対して一方的に攻撃する。

その最中殆どの戦術機部隊が戦線から離脱するのを見た刹那は疑問に思い。

米国衛士『ま、待ってくれ！撤退なんて聞いてないぞ!?!くそ通信がツ!…:…や、やめ
ろ来るなあ!』

刹那「!…:まさか!」

それでも残る機体は戦場の中央、BETA群に囲まれる形で長刀や砲撃を続けている
が突如の撤退と通信障害に混乱し。

容赦なくBETAが射程圏内の機体に迫れば要撃級の腕が管制ユニットを貫いて、戦

車級に取り付かれては各部位を破壊されていき、機体の制御が効かず脱出したも群がった闘士級に滅多うち合う衛士もいる。

それに全てを察した刹那。

刹那「チイツ……！こんな行いをする奴等は……！」

その光景に嘗てのクルジスでの惨劇がフラッシュバックした刹那が瞬時に思考を振り払い。

一気に精神も戦列も乱れて劣勢となる残留部隊。国連からの増援部隊である彼等は基本的に米国の隣人や米国の日本派遣隊ばかりで、つまり交戦中は体よく前線に使いガンドムが来れば取り残して我先にと撤退する作戦。

現に国連軍でも日本人は一人も居なく蹂躪されているのは全て米国の戦術機であるストライク・イーグルのみで、G弾や日米保安条約を破棄して撤退する横暴は刹那も確認したが今行われているのはその逆だ。

米国衛士『ぐわああ！くう……ッ!!』

刹那「！やめろッ！」

それでも帝国軍側は別に見捨てたり切り捨てるつもりは無く、ガンダムさえ居れば彼等も撃墜される心配は無いだろうと高を括っていた。

作戦を伝えなかったのは要請に割り込んできた米国側増援部隊との事前連携が取れ

なかつただけに過ぎず、更に言うなら所詮ガンダムは一機でそれを乗れる刹那は一人だけ。

BETAにやられる事は無くても敵部隊の中央に囲われた機体を守る手段は外縁部から戦う近接特化型のエクシアには少なく、離れた個体を上空から撃つにしても物量差で手が足りずに更にGN粒子の通信妨害は衛士のパニックを増すばかり、これは恐らく帝国軍側も見誤った事態でガンダムの力がBETAを殲滅すると同時に（対策していいなら）人類にも妨害をもたらす矛盾、その結果がこの悲劇を生んで。

米国衛士『あ——ッ』

刹那「く…ッ！」

状況が悪化し続け刹那もより速くBETAを薙ぎ払い、要撃級を退けてイーグルに迫る戦車級をGNバルカンで全て葬った瞬間、最後の一機となった増援機が錯乱した状態で飛び退こうとしたところを要撃級に飛躍ユニットごと足部を貫かれて誘爆し、遂に残るはエクシアのみとなる。

刹那「違う…！ガンダムはこんな事の為にあるのでは…！」

それでも尚もエクシアは、刹那はBETAを駆逐し続け——

横浜司令部は現在状況の確認に徹している。ガンダムが出撃して暫く経って帝国軍からの連絡を待ち。

女性CP「厚木基地より、第404戦術機甲大隊の撤退完了を確認！」

夕呼「……………」

ラダビノット「そうか……」

オペレーターからの報せで作戦の第3フェイズまでが完遂されたのを聞いてもラダビノットの顔は浮かず、夕呼も他に知りたい情報があるような素振りで。

刹那『…エクシア、敵部隊の殲滅を完了』

夕呼「！……状況は？」

そんな時、殲滅作戦の中核である刹那から音声通信が届くと沈黙していた夕呼がいち

早く反応を示し。

刹那『BETAは残さず全て排除した。……撤退部隊を除く、米国製の機体は全滅』
ラダビノット「なっ!？」

遙「……ッ」

夕呼「……」

刹那からの戦果報告を受けるとその内容に司令部のCP達やラダビノットも驚愕の顔を浮かべてざわめき立ち、それが一瞬で静寂に変わるとBETAに勝利したにも関わらず作戦内容から暗い表情で覆われ。

刹那『……香月夕呼。俺は基地へは帰還せず、これより帝都へ向かう』

遙「えっ!？」

その進言に真っ先に目を見張ったのはサポート役を任された遙で。

夕呼「……分かったわ」

双眸を閉じて承諾する夕呼も止める気はなく。

国連軍の野戦軍装やましてやノーマルスーツでは目立つ為、この言動から予め私服を用意して機体を持っていったのだろう。資金はある程度渡しているので今日何処かで仕入れたか、その用意の良さや勘の鋭さには夕呼さえも感心する。

刹那『報告は以上』

戦果と私情のみ告げると一方的に音声通信を切る。途絶えた声に静寂していた司令部が再びざわめき始め。

ラダビノツト「やむを得まいが……彼が帰ってくる保証は？」

夕呼「正直判りません……或いは帰ってこない方がセイエイにとってはいいのかも……」

「元々はこの世界の住人ではない刹那が基地を離れても考えれば特別不思議な事は無く、ラダビノツトの質問に曖昧な言葉で返すと今後予定していた活動に対する支障やらを考えた後で、刹那の真意を見極めようと思考する。」

刹那「日本帝国軍と米軍…仮に紛争幫助の対象となるなら、俺とガンダムは…」
刃物のような眼差しが夜の都を捉える。

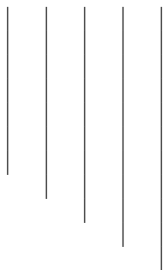
あらゆる屍を置いてきた戦地を後に、エクシアは夜の空に粒子を残して――

第8話 「予感と兆候」

待機状態が解除された衛士や各隊員達はそれぞれ通常状態に戻り事後処理がある者は司令部や執務室などへ、その中で衛士である慧は自室に戻りシャワーを浴び終え、電気も殆どついていない室内でまだ封の閉じた手紙を手にし。

「……尚哉……」

検問済の印が押された自分宛の封をただ見つめ続けて静かに囁く。



・帝都某所

『——やはり旧甲州での撤退は見誤ったか…これで米国も嬉々として日本国内への干渉権を申請してくるだろう』

『いや、あそこで撤退せねば我が同胞にも被害が及んだかもしれない。ですがやはり…』

『今動くのは危険であろうな』

『…既に帝都内の各施設に手筈を整えてある。今更後戻りも出来ない…米軍の軟弱共め、奥地で歓乐的に構えているからこのような事態に』

『例の男の動向も気になる。米国…そして彼のガンダムもこの件に介入されては敵わん。奴らに先手を打たれる前に動くべきだ』

『…私は今少しだけ待つべきだと考えます。現在中部地方の山岳部で火山性地震が頻発しており、帝国軍内部でも現地住民の救助活動について協議中のようです。ですが現実的に今の帝国軍にそのような余力はありません』

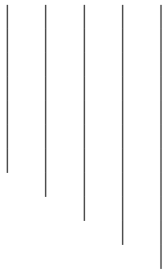
『…ふん、政府の対応が目に見えるようだ。櫛の狸め…どうせ被害を最小限に食い止めるため…などと言って住民を強制退去させるのがいいところだ』

『奴ら民をなんだと思っておるのだ！将軍家を蔑ろにし民に苦境を強いる…これを専横

と言わずなんと言おう！」

『…だがその事実だけ見れば我々の大義にとっては利になろう…奴らは自ら敵を増やしたようなものだ』

『—もはや救い難し。彼の者らには私が直に手を下す…！』



・アメリカ合衆国

『大統領閣下、やはり例の集団に動きがあります。しかし依然尻尾を掴めず…過激派と旧政府主義者の動向もまだ調査中だと』

『…我々は一方的に日米保安条約を破棄した身だ。今動く事がどれ程愚かなのか判っていないのか?』

『既に事前勧告も無きG弾使用の前科もあります。過激派は是が非でもオルタネイティブ5の有用性を示したいが為に最早見境もなく…首脳会談にも応じない現状では…』

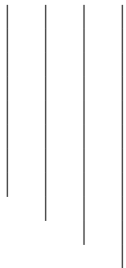
『今優先すべきはBETA掃討で、まして国家間の戦争に発展するのだけは避けねばならぬ。極東の防衛戦が崩壊すれば残るは海とこの大陸のみとなる』

『太平洋艦隊に直轄部隊の配備も完了しております』

『当然だ。いつでも動けるように首尾は万全に』

『———後の懸念は帝国の所有する機動兵器、か…国連とは言え日本領土内』

『情報部を信じましょう。今は一刻も早く旧政府主義者及び過激派の工作を暴き検挙へ導かねば我が軍の即時撤退も叶いません』



夜も深ける頃に始まった地下侵攻するBETA群を出現地点で迎え撃つ作戦も終了して翌朝、基地はすっかり通常状態に戻っていた。

訓練兵である武も仲間と共に配備された訓練機の吹雪で待機していたが、出撃する事はまず無いと聞かされていても緊迫は抑えられずにいた為か、作戦完了に伴い一気に脱力して部屋へ戻るなり間も置かずにベッドへ倒れ込んで熟睡し。

そして規定の時間通りに起きるとまだ重たい瞼の先に同居人の顔が移り。

純夏「おはようタケルちゃん。昨日はぐっすりだったねー」

武「……お前また人のベッドに」

頬を指で突き優しい笑みを向ける純夏が再びシートへ潜り込んでいる状態に文句を言うのと直ぐに意識を完全に覚醒させて起き上がり。

純夏「なんだよー。ベッドこれしか無いんだから仕方ないでしょ？」

武「それはそうだけだよ」

上体を起こした武の腕に絡み付きながら苦情に反論する様子を眺め、昨日まではまだ訓練兵用の白陵袴に酷似したデザインの制服しか無かったから衣服を纏わずと本人は

言い訳しており、まだ建前上は任官前なので時期が来るまでは前回のように正装を渡すわけにもいかず、急遽皆と同じ野戦軍装や就寝用の軽装を配給して貰った。

なので今はちゃんと服も着ていて昨日の様な事態にもならず。

武「……お前なんか変じゃないか？」

純夏「えっ？」

その事に一安心している武が改めて純夏の行動に疑念を抱き身を離すとそれを問いつつながら視線を合わし。

武「事故で胸触っただけでも殴つてきやがる純夏が、昨日から妙に大胆過ぎるんだよ」

純夏「それは……タケルちゃんが好きだからだよ。それに前はもつと凄い事したんだし、今更……」

感じた違和感をありのまま伝えると対する純夏は反論して、今や記憶の中に鮮明に残された内容に僅かに頬が赤らみ言葉尻も弱く。

武「その後鉄拳制裁もされたけど……あれ？された、よな？確か……」

純夏「もう！考えるのはやめよ！なにより今はタケルちゃんとの時間を大切にしたいの！」

言われて当時の光景が蘇る武も照れ臭そうに頭を掻いて、然し後の記憶が曖昧な様子で自信なさげに言うのと遮る如く話しの区切りを無理矢理つけ。

純夏「それよりほら、朝ごはん食べに行こ！」

更に武の腕を掴んで身を引つ張る。

武「だあー判つたつて！そんな慌てるな！」

そんな武もこのまま不透明な疑いを向けて問答を続けても、本人が否定し続けるならキリが無いと諦めて強引に起こしに掛かる純夏を宥めては催促に応じてベッドから離れ、お互い身支度を済ませ部屋を後にする。

そうして二人で訪れたPXには同じ訓練部隊の仲間の姿があり。

壬姫「あれ？たけるさんと鑑さんだ」

武「よっ、おはよ」

純夏「おはよー壬姫ちゃん！」

朝食の乗ったトレイを両手に空席を探す壬姫が武達に気付いてお互い挨拶を交わし。更に向こうには美琴の姿も見え。

武「たまと美琴だけか？」

壬姫「御剣さんと彩峰さんはもうすぐ来ると思うよ。榊さんは見てないけど」

冥夜「タケルと鑑も起きたか」

純夏「あ、御剣さんもおはよう！タケルちゃんわたし朝御飯取りに行くね！」

噂をした矢先に現れた冥夜へと振り返ると美琴を含めたメンバーが揃って朝の解釈を交わし合つて一つのテーブルに集まり、純夏が武の分も合わせて朝食を持つてくるとやり取りがあつた後駆け出す後ろ姿を眺めてそれぞれ椅子へ腰を落ち着かせ。

武「え？あ、俺のは自分で………つてもういつちまいやがつた」

そんな純夏を静止するも既に遅く、やむを得ず武も冥夜の向かい側へ座る。

『火山活動の活発化に伴い昨夜未明、帝国陸軍災害派遣部隊による不法帰還者の救助作戦が行われました。現状では大きな混乱もなく14名全員が無事保護され——』

ふと食堂に設けられた旧式の共同テレビの音声が届きそちらへ向くとニュース画面を見て。

武（これは……天元山での事か？……そうか！夕呼先生はうまくやってくれたんだな。これで俺達の出番はなくなつて時間も稼げる。あの婆さんも助かつたみたいだし）

冥夜「…そなた、嬉しそうだな」

内容を聞いた武は拳を握り嬉々とし、その途端様子を伺う冥夜から鋭い睨みと共に非難めいた声が武に向けられ。朝食を取るのも中断して剣呑な顔をする彼女に武は訝し気に首を傾げ。

武「なんだよ、お前は嬉しくないのか？人が助かつたつて言ってるのに」

冥夜「…そなたは本気であのような報道を信じているのか？今の帝国に人道的な救助

活動などする余裕があるはずもなからう」

武「要は強制退去だつて：そう言いたいのか？」

冥夜「判っているなら何故そのような顔を！」

そしてその騒ぎは周りの注目を集める程大音量になり始め、気付いた武の隣の美琴や冥夜の隣の壬姫も当然振り向いては宥めるべきか躊躇してあわてふためき、その間もやれ「前線を空けてBETAに攻め込まれたらどうする？」だの「国民の生命財産を守る為の帝国軍人だ」等言い争いは絶え間なく続き。

武「いい加減にしろ！それが人類の存亡をかけた戦争やつてるヤツの言うことかッ!! お前が言ってるのは民間人の言い分を優先した結果、作戦が失敗しようが人類が滅亡しようが構わないって：そういうことじゃないのか!？」

慧「ッ!!」

純夏「え、彩峰さん!?!ちよつとタケルちゃん!御剣さんまで：どうしたつていうのさー!」

住民の自由を望むような話題に差し掛かった時、遂には武が机を掌で思いきり叩きながら怒鳴り付けてしまい、偶然にも今まさに注目を終えてきた純夏達にもその喧騒が伝わり、突如手にしたトレイを落として走り去る慧に皿の割れた音で我に返った武と冥夜もその方に向けて目を見張り。

武「あ……悪い。つい……」

冥夜「此方も我を忘れていた……許すがよい。言い争うつもりはなかったのだ……」

周囲の注目にも漸く気付いて頭を下げる武と冥夜。

それ以降は他の隊員も気にせず戻っていき、改めてお互い謝り合うと壬姫や美琴に純夏へも謝辞を投げ。

純夏に少し説教をされた武が慧の落としたトレイの傍の手紙を目にして拾い。

武「津島……萩、治……？………ッ!？」

それを見た途端に急な頭痛に襲われた武がこめかみ辺りを押さえ。

純夏「タケルちゃん!? どうしたの——…もしかして……」

その様子にいち早く気付いた純夏が駆け寄り、ある予感からか同じく心配した冥夜達を手で制すると身を寄せ耳許で問い掛け、それを聞いた武も頷く。

武「——ああ、デジャヴだ……でも殆ど思い出せねッ……」

純夏「………」

以前聞かされた2周目より先がこの世界だと武も今は認識していて、既知感に苛まれた事を自覚するも曖昧過ぎてそれ以上は言葉に詰まり。

武「兎に角今は彩峰だ。悪いけど冥夜達の方は宜しく頼む!」

純夏「うん、わかった!」

手紙を手に頭の乱れを振り払うと早々に行動へ移そうと駆け出す武の願いに勢いよく頷くと純夏も冥夜達のところへ戻っていき――

刹那「ここが帝都……」

司令部を通じて直接夕呼に宣言した通り、事前に入手した位置情報を頼りに刹那は現在帝都を訪れた。

数年前の京都陥落時に東京へ拠点を移して以降、日本の根幹として機能している此所は民間人も多く住まうのでそれに託けて刹那も予め用意しておいた一般服を纏って都心に紛れている。

パーカー姿と中東出身の顔を隠すよう被ったキャップにより周囲の人間も刹那を特別注目することなく通り過ぎるばかり。

刹那「……ここは」

暫し歩くと建物から離れた場所に辿り着き都民とはまた違った風貌の者が刹那の視界に入り、辺りを見渡すと難民用のテントや簡易的な毛布に包まる子供なんかも居て。酷いところは板等で継ぎ接ぎした寢床も建てられている。

刹那（経済都市であるにも関わらず、未だ救助施設が追いつかないか……これも戦いの弊害……）

この光景は祖国が滅んだ刹那には見慣れた戦争の痕跡で、国や土地を失った者が必然的になる暮らし。

昨晚の作戦で帝都の在り方を見極めるべく潜入した先で最初に気に留めた光景は街で日常を過ごす住民とはかけ離れていて、そこには僅かに感慨を生むも特に踏み込む事もなく立ち去ろうと歩を再開し。

『君、少しいいか？』

刹那「……………」

その途端肩を掴まれる感覚に眉をひそめた刹那が視線のみを向け、そこに帝国軍の正装を着る男性と秘書のような立ち振舞いをした女性が視界に移り。

男の方はその顔つきからして相当の手練れだという印象が見受けられる。

刹那「な、なんででしょうか…?」

帝国軍人ならばと己の素性を探られると後々面倒になる可能性を考慮した刹那は警戒から表情と口調を繕い気弱そうな少年を演じ。

帝国軍男性「ああすまない、随分身形が綺麗だったのな。…此所へは最近来たのかい?」

刹那「…はい」

厳しそうな風貌の男性だが難民の少年だと思われているようで柔らかい口調で尋ね、刹那も乗り掛かり肯定の意を告げ。

帝国軍男性「そうか。見たところ日本人では無いようだが…」

刹那「両親がイラン出身です。僕が産まれる前に祖国はBETAのハイヴが…だから知人がいるこの日本に非難したそうです…」

帝国軍女性「!甲2号目標…では貴方は…」

帽子越しでも刹那の顔を見て見破つたのに内心で舌打ちするも予め考えた対処策を滞る事なく口にする。

余談だが刹那の嘘にはある程度の信憑性もある。この世界には存在しない小国のクルジス、そして隣国であるアザテイスタンはカスピ海とペルシャ湾の間に位置して、中

東出身の刹那がイランやアフガニスタン出身の両親から産まれたと言えば疑う者は居なく。

現に帝国軍人の二人は何の疑念も持たず眼鏡を掛けた女性は驚愕までして。

刹那「日本生まれです」

帝国軍男性「……祖国を生前に奪われ、第二の故郷となったであろう日本の地まで――

――やはり許し難し……ッ！」

それを聞いた帝国軍の男は次第に血相を変えてゆき、怒気を孕む瞳と握り締めた拳にも力が籠り。

沙霧「私は帝国本土防衛軍、帝都守備連隊所属の沙霧尚哉大尉。この国は直に変わる

……今暫くの辛抱だ」

男が、沙霧が名乗ると刹那と目線を合わせ。

沙霧「故に少年、その懐に控えた銃の引き金は決して引いてはならんぞ」

帝国軍女性「!？」

刹那「……！」

その言葉を聞いた瞬間、刹那の目が僅かに見開き、沙霧の傍らの帝国軍の女性も驚愕の表情を浮かべ。

自己防衛の為常に携帯用の銃を手離さない刹那は当然エクシアのコクピットにも用

いり、機体から降りれば服の中に隠しておく。国連から念のため支給された銃は現在パーカーの中に在り、更に沙霧はそれを見破っていた事に繋がる。

沙霧「若者が撃つのは人類の敵だけで十分だ」

刹那の肩に手を置いて真つ直ぐ芯が込められた眼差しを向けられ、物怖じはせずとも目線は逸らさず。そう告げては横を通り過ぎ、去っていく背中へ刹那も振り返つて見据え。

刹那「……あの男……」

沙霧の瞳には覚えがあった。己の理念と目標の遂行の為に決意を宿した目。それはソレスタルビーイングの者なら誰しもが持つモノで、刹那もまた同等の目をしている。

演技の奥にその眼差しを見出だしたのかは定かでは無いが沙霧が告げた言葉は刹那の脳裏を巡り。

然し己と同じならばこそ刹那の中で沙霧に対する警戒心が強まり。

刹那「……………」

臆て姿が見えなくなつたところでそれ以上は特別気に留めず、用も無しとこの場を離れるべく再び歩みを進めようと思つた矢先にまた肩を掴まれる感触に背後を振り返り。

女性「悪いな引き留めて。時間は取らせん、貴様があの男と何を話していたかを聞きたいだけだ」

黒いコートにスーツを着込んだ先程の長髪の女性とはまた別の、肩までで揃えたショートボブの黒髪に眼鏡を掛けた女性が振り向いた刹那の視界に移り。

刹那「……………」

女性「…因みに、こういう者だが」

これ以上他者に関与されるのも厄介だと手を振り払い立ち去ろうとするも、沈黙したまま動かない刹那へ反応を促そうと黒髪の女性が続け様に身分証を掲げ。

またそれを見た刹那も思い留まり。

刹那「国際情報管理省、欧州局一課……」

グレーテル「参事官のグレーテル・イエツケルンだ」

国際情報管理省。刹那もこの役職はデータベースで拝見していて。外務省と情報部を統括し、場合によっては国外にも活動が許可された国連枠内の組織というのを心得ており。また日本にも情報省外務という組織があり活動内容はこれに類似しているともいえる。

国連軍が一枚岩では無いように情報省や国連事務次官も当然活動は主に自国での事象であり、日本と米軍ほど因縁深くもなく関連性も薄い欧州連合に所属する彼女が来日…それも帝都にいる事は多少なりとも異質であり、つまり許可が下りるだけの何かが起こっている可能性が高く。

それに付け入るように看過せず、帝国軍人の二人へ接した時の演技も無く鋭い視線を送る。

刹那「…EUが俺になんの用だ…」

グレーテル「言っただろう？話を聞きたいと」

或いはこの遭遇も必然だったのか――

――
――
――
――
――

横浜基地の司令部では現在、夕呼と基地司令であるラダビノツドが重い雰囲気漂わ
せて議論している。

ラダビノツド「…困った事になったな」

夕呼「まさかこの土壇場で米国がXG-70の譲渡を拒んでくるとは…」

予てより00ユニットを最大限の武器として活用すべく対BETA・ハイヴ攻略用の要となる機体を開発元の米軍より国連に譲渡するよう取引が行われていた。

HI-MERF計画凍結に伴い保管されていたXG-70をオルタネイティブ4に接収しようと開発が再開され、計画の中核である夕呼が居る日本に移送される申請が検討中だったが、それを白紙に戻すと通達が下つたのが早朝での出来事で。

ラダビノツド「昨晚の戦果を鑑みれば当然ではあるのだが…」

夕呼「仰る通り…ですが不審点も幾つか散見されています」

ガンダムを投入した撤退作戦が此処でも尾を引いていて、取引の有無はタイミングのどう考えても米軍増援部隊の全滅が皮切りである事は明白だ。

寧ろ今にして思えば増援部隊を寄越した理由もその結果も策略の内だったと予測され、それをお互い同意見とばかりに不審な動向から疑惑を持ち合う。

更に譲渡の拒否を言い渡したのは今の政府や直属の開発チームではなく、現政権を維持する保守派である。それに繋がりが深いであろうオルタネイティブ5推進派も恐らくは企てに関わりがあり、要は第4計画の妨害工作が実で加えて日本への干渉権も強引に取り付けようと動いていると夕呼は予測している。

夕呼「最初はガンダムとの物々交換を持ち出される可能性も予想していましたが…」

流石はプライドが高い派閥連中……他国の兵器を羨望したと認めるのは許さないのでしようね」

米軍には日米保安条約の破棄等、信用を害する行為を散々受けているがここまで露骨に行動されては現政府の全体が絡んでいるとは到底思えず。

あくまで仮説として証拠も無い現状に敢えて派閥と捉えて話しを進める夕呼。

ラダビノツド「……策はあるのか？」

夕呼「……当初はその算段が立っていましたが……何らかの方法で権利を得たなら、政府や元々交渉していた彼等に訴えても無駄でしょう。やはり今回の首謀者とその組織の裏を暴かねば現状厳しいかと」

期待の眼差しを向ける司令へ偽りない事実で答え、脳裏では数々の推察を浮かばせていき。

その後も僅かに方針等を話し合い一段落すると夕呼は執務室へと戻り。

夕呼「そういう訳だからお願いできるかしら」

左近「例の件に間に合いますかなあ……」

自室でもある程度考察してから背後へ振り返り、壁に寄り掛かるハットを被ったコート姿の男性へ視線を送る。帝国情報省外務二課の鎧衣左近はハットで目許を隠し問い

掛けに応じ。

左近「流石に支障が否めない場合は保証し兼ねますよ？事態は後戻りを出来ないところまで進行しています。万が一事が起これば、そちらを優先させなければこの国は潰えるでしょう」

夕呼「ええ、構わないわ。少なくとも米国に借りさえ作れていれば今後どうとでもなるでしょうし」

左近「では速やかに……」

返答に不満なさそうに頷くと左近も行動を起こすべく早々に立ち去る。

夕呼「……それにしても解せないわね。政府もこの機会に日本の再従属化を目論んでもつと踏み込んでくるものだと思っただけ……どういふ心境の変化かしらね」

一見すると米国全体が働いているように感じるも、作戦後の国連協議対談で映像越しに顔を見せた現政府や米軍指揮官は驚くべき事態は真に目を見張り、然し何か疑念や兆候があるのか日本に対して苦言を呈する事も譴責の言葉も無く、それが不自然さを際立たせ。

或いはそれだけやり過ぎたか……その言葉を残して室内は静寂に包まれていく。

行く手を遮られた刹那は少し前に出会ったグレーテルに連れられて都市部の喫茶店に赴いていた。

とは言え彼女が聞いたかった刹那が何者か、帝国軍人と何を話したかという本題は既に終わり、彼女の中のある点の誤解も解けている様子で。

グレーテル「まさか貴様が難民で、偶々絡まれていただけにだったとは…すまなかつたな。お詫びに好きな物を頼んでいいぞ」

刹那「…いや」

そもそも格好を見れば…という点はあるが刹那も話しの流れで本筋を理解した為か、またはわざわざ口にする必要を感じないのか特に指摘はせず。

聞くと先程邂逅した沙霧が所属する軍隊の動きに気掛かりな点があるとの密告を受

け、別件で欧州から那覇基地まで来日していたグレーテルが帝都に移動して調査をしていたところに前の現場を目撃したという。

向かい合わせで座るグレーテルの早とちりからくる居た堪れない様子に依然表情を一変もさせずただ短く気にしていない意を示し。

刹那「必要ない…これで十分だ…」

そう言つて双眸を閉じながら勝手に注文され出てきた紅茶を口にし。

グレーテル「そうか。……だがやはり似ているな…」

刹那が無口なのは質問に淡々と答える節々から把握しているのかそこに不快感を感じた様子はなく。

だが刹那の目を見て思うところがあるのか囁き。

刹那「…?」

グレーテル「ああいや、目の雰囲気がない…：：：気にしないでくれ」

小さく紡がれた言葉を確り耳に聞き届けた刹那だが、当然該当する人物は判らず訝し気に伺うと気付いたグレーテルも両手を前に出して聞き流すよう促し。

グレーテル「…実は我々が日本に来た本来の目的は、とある機動兵器を調査する為なのだ」

刹那「!……!」

そして話題を変えようと思ったのか突然元々の来目目的を口にする。

然し難民設定として伝えた刹那にこんな事を言うのは不可思議であり、やはり何か感慨深いように語る様は話題を逸らした甲斐も無く、類似する人物が抜けきれていないのは明白だがそれよりも心に響いたのは刹那自信に関わる話で、一瞬紅茶を持つ手が止まるも正体を悟られない為に下手に反応しないよう務め。

グレーター「無論その性能などの噂も気掛かりだが：彼の戦術機で一番引つ掛かったのがレーザーヤークトの速さにある」

自分のカップを持ち紅茶へ視線を落としながら尚も意味深に語るグレーターへ刹那はただ耳を澄まし。

実際刹那はBETAと対峙して以来、上空からの襲撃を可能とする優位性を取ろうと光線級の駆除を真っ先に行う戦術を行っている。それまでは従来から伝わる正規の戦法名などは勿論知らずに。

また回避可能な対空狙撃から発射位置を特定し砲撃をし返すのにも端から空中で陽動し地上を撃つ方が手っ取り早く、ガンダムだからこそ可能な戦術だが理に叶っているのは実践で証明されている。

ならばグレーターが何故そこに着目したのか、刹那が疑問を抱くのも自然な流れであり。

グレーテル「こう見えても私は昔、戦術機中隊にいたんだ。その部隊もレーザーヤークトを最優先に当たっていてな」

刹那（…まさか）

その疑問は次のグレーテルの言葉で直ぐに解ける事となる。

言葉のみで捉えればただそのままの意味ではあるが、刹那は情報収集の際にほぼ最初に気に留めた事項を思い返して、確定では無いも凡そ見当がつくがそれも表情に表さぬよう注意し。

グレーテル「まあ政治将校での任官だったが…つて、私は民間人相手に何を…」
そこで漸く我に返る。

どういいう了見で気になったかまでは部隊に所属していた事象以外は語られず中断されるもそれだけで十分把握した刹那はグレーテルの心境までは探る気はないと追求せず。

刹那「用が済んだのなら、俺は行く…」

会話も区切りがつくとまだ紅茶も飲み切っていないのに席を立つ。

グレーテル「あ、ああ。結局最後は自分語りになってしまったな…改めてすまない」

そんな刹那を引き留める事はなく再度諸々含めた謝罪を告げ。

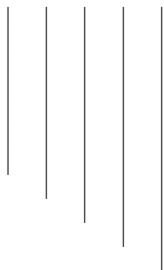
刹那「——…やはり新たな紛争の火種が…」

グレーテル「え……？」

最後に呟いた刹那は既に店を出るべく歩み出し。

グレーテル「……民間人、か……」

その背中を眺めながらグレーテルは先程までの雰囲気を消し、視線を細めて同様に呟き。



朝のPXでの件から暫く経ち、武は断念した朝食も含めた昼食と夕食の間の時間に再びPXへと赴いていた。

武（彩峰のやつ……結局何を隠してるんだ？）

あの後手紙を届けるついでに、封が閉じられているにも関わらず検問済となった不自然の手紙の真偽も尋ねるべく慧の部屋へ訪れた。

然しそこで待つていたのは机に同じ封が何枚も置かれ、更に背後から奇襲を受けた武が慧と床や寝台で一悶着起こし、結局は説得も虚しく答えぬまま部屋を強引に叩き出され。

武「…俺を殺したくない、ね…ん~~~~」

慧ともめた時に開口一番で告げられた台詞を気に掛けつつもどうするべきか悩み続け。

壬姫「でも珍しいね。ヤキソバの日に彩峰さんがいないなんて…いつもなら真っ先に飛んでくるのに…」

武「——ヤキソバ?…:…それだあツ!!」

美琴「うわっ!?!」

そんな時に隣で昼食を取る壬姫の言葉に反応し、途端に声を上げる武。それに驚く向かい側の美琴の囃。

武「おばちゃん!大至急、合成ヤキソバを追加で!あと合成コッペパンって残ってる!?!」

京塚「な、なんだい藪から棒に?因みにコッペパンなら余ってるよ。一体どうするつ

もりだい？」

思い立ったら吉日とばかりに壬姫達を残してキッチンへ向かい、着けば間を置かず京塚へと要件を手早く告げて。

いきなりの要望に流石に驚いて訳を問われ。

武「頼むよお婆ちゃん！世界の命運を掛けた一大事なんだ！」

京塚「またおかしな事言ってるよこの子は。：直ぐ用意してあげるからちよつとは落ち着きな」

武「恩に着るよ！！」

訝しそうな目を向けられるも半ば呆れ顔で了承が得られ、その事に大袈裟な位両手を合わせて感謝の意を表し。

京塚に用意して貰ったヤキソバとコッペパンをトレイに再び壬姫達の席に戻ると直ぐに製作遂行に移り、出来上がるとまた二人を残して立ち去り、再三に渡る武の意味不明な行動に啞然と顔を見合せる。

向かうは慧が訓練や講義以外で大抵居座るであろう屋上。武が扉を開くと案の定フェンスに乗り掛かった慧の姿を捉え。

武「彩峰！」

慧「白銀……しつこい。顔も見たくない」

武「なっ!？」

慧「…冗談」

傍に寄ってくる武に気付くと早々に邪険に扱い多少はショックを受けるも崩れる身体を踏みとどめ。

武「ま、まあいい。今回はお前にただ素晴らしい食べ物を提供しにやってきただけだ」

慧「…ヤキソバ?」

武「ふっふっふっ、君のイメージネーションではそのあたりが限界だろう…」

慧のノリに流されないように改めて先手を切り出すと手にした物を掲げ。

武「これが俺独自の発想で生まれた究極のメニュー! その名もヤキソバパンだツ!!」

京塚に頼んだヤキソバを付け加えて貰った中央を縦に切り開いたコツペパンに押し込んだ元の世界” だった” 物の産物を見せて自信気に宣言する。

慧「!!」

それを見た瞬間慧はフェンスから降りて武の下へ猛進行、両手でヤキソバパンを掴みながら「食べていい?」と言う割りには力が込められ殆ど奪い取りそうな様子を醸し出し。

武「い、いいから取り敢えず力抜け」

何度も頷いて武の言い付け通り手の力を緩めると改めてそれを受け取り、間髪容れずにヤキソバパンを一口齧ると。

武「ど、どうだ？」

慧「……おかわり」

直ぐに食べ終えて追加を要求してくる。どうやらお気に召した様子で。

武「残念だが……ない」

慧「……へこむね」

武「そ、そんなに上手かったのか……？」

慧「うん。控え目に言つて、歴史が動いたね」

返答に「そんなにか」と。然しこれで漸く本題を切り出せると思いついたら先ずは勝手に部屋を物色した事を無断入室も含めて謝罪し、それを機に手紙について再度触れたところで好物に目を輝かしていた慧はまた表情に影がさし。

それでも武は自分の気持ちを隠さず伝えていく。

武「率直に言うけど、俺は最初お前がなんかの陰謀に巻き込まれてるか……最悪手を貸してるんじゃないかと思つてた。けど思い返してみると彩峰が工作員か何かなら、手紙を落とした上に机の上に置きっぱなしとか……どう考えても間抜けすぎる。寧ろ見せる為に態とやつたつて考える方が自然だろ？」

慧「…凄い想像力だね」

それでも慧の反応は薄く頑なに真意を見せず。

武「別に洗いざらい話せなんて言わねえっつーの。だがもしお前が困ってるなら…一人で抱え込むな。これは207小隊の戦友としての言葉だ。そして一人で解決できる問題ならそれで構わないし深入りもしない…これは国連軍隊員としての言葉だ。俺が言いたいのはそれだけだ…」

それでも対話を続ける武。最後は真剣な顔と口調で告げるも慧は踵を返し——

武「おい…」

慧「……………おいしかった。また作って…」

そう言い残して屋上の扉を開き訓練校内へと戻っていく。

武「え、…お、おう…」

慧の去る姿を見えなくなるまで見詰めた武は1人屋上へ取り残され、遅れて反応するも既に相手はこの場に居なく、今日は諦めるしかないと溜め息を漏らすと肩の力も抜けて座り込み。呆然と夕焼けの空を眺める。

夜更けの帝都内に一人路地裏を歩く男が居る。

歳相応の貫禄を感じさせる男性の身なりは路地裏を歩くには相応しくなく。

『内閣総理大臣ともあろう者がこのような……どういうつもりだ、榊是親』

是親「……沙霧尚哉」

その男、声の言うよう日本の内閣総理大臣職を背負う榊是親が振り返る。

視線の先には刀を手に持つ沙霧が対峙し。

是親「貴様こそ一人で来るとは……否、そこは貴様らしいと称すべきだろうな」

沙霧「……戯れ言を。警備が尋常では無かった上、貴様が此所に居るといふ情報まで
が……ならば誘い出した事を後悔させるまで」

一触即発といった雰囲気です互いに交差する鋭い視線で牽制し。内閣府の警備を強化して自らは居場所を報せ、恐らくは影武者辺りを立てたか偽装仕事を働いたか……兎に角

この暴挙には当の沙霧も異常事態に内心で焦りが生まれ。

是親「閣僚達を殺させては叶わないのでな…沙霧尚哉大尉よ、踊らされている自覚はあるのだろうか？」

距離を保ったまま事の発端を見透かして聞き。

沙霧「…ここで起きたねば日本の民は二度と己の両脚で立つこともなくなる」

是親「立ち上がって転ぶ程度なら良いのだがな。それが民に何を強いるのか…分からぬでもあるまい」

沙霧「將軍殿下を民から遠ざけ、国政を思うままにした貴様が何を言う…！」

問答を己が意思と共に投げ合い、本来なら内閣府の中で起きていたかもしれない言葉の応酬。

次第に沙霧の手に力が入り刀の鞘から指で鏢を弾いて刃を僅かに出し。

是親「ああ、そうだな。…だがしかし、どのような覚悟があらうと貴様がその身を汚泥に晒す事もまた許されん」

沙霧「…なにを」

その様子にも全く臆さずに一度刀へと視線を送ると直ぐ様戻し、合わせた目線のまま言葉を続け。

是親「貴様はこの国にまだ必要な人間だ…その道は今早すぎる。その志が戦後の日

本になるべく多く必要なのだ——誤るな。民諸とも、生きてさえいればなんとでもなる」

沙霧「ならば私も言わせて貰う。既に我が逝くは血塗られた外道……引き返す道理はない。……先に逝くがいい」

榊是親の思想と理念、然し民の自由尊重を蔑ろにして日本の未来を語る様について沙霧は刀を抜き、夜の闇に光りを宿す刃が鋭利に獲物を捉えんばかりに切っ先が向き。

沙霧「逝く前に問う。貴様を今傀儡とせし根源はなんだ……最早ただの米国人ではなからう」

是親「……私は一度とて魂までも差し渡したつもりはないのだがな。……日本の、いや世界の未来を先導する力が現れた」

沙霧「！」

だが抜いた刀身が是親を害する事はなく、再び問いを投げる。それに双眸を閉じて確りと告げられた返答に沙霧は目を目張り。

沙霧「……国連が企てる兵器か……いや、……彼の機動兵器……ガンダム……ッ！」

そして是親の例えた力にその存在を認識した沙霧が先程よりも更に怒気を含む目を向け。

怒りを強めた沙霧にも構わず、ただ世界の未来だけを見据え。

沙霧「…ツ、性根までも国連に…米軍に陥たか…」

是親「ふん…ガンダムを奴等と同じくして見るか、それはまだ判断が尚早過ぎるのではないか？…そして日本が破滅の道を辿っているのもまた事実」

ただ自国を守るのに手一杯な日々は終わらせようと。

是親「だから私は賭けてみようと思う。国連でも米軍でもない…新たな標に。罰を受けるのはその後だ…」

だからこそ、縋る様な思いで。

国々の柵に囚われない力ならその刃はBETAにしか向かず、今の祖国の威信や自国主義者から大小あれど内紛も立て続くこの世界にはそういつた存在は重要で、対BETAに最も適していると言うは是親。

在り方こそ不明で根拠も何も無い。だが所有権を訴えているのは横浜基地のあの香月夕呼のみで、ここに何かあると予感めいたからこそ賭けに出た。

噂に違わぬ力を有しているなら生半可な事では他国に利用される不安もなく、仮にガンダムが本当にそんな存在だったならそれを知る多くの者の補助は世界への貢献に大きく左右され、勝利に繋がる可能性も飛躍的に高まるはず。

一方で得体の知れない力でもあり、だからこそ見極める必要があると、その先駆者になるかもしれないのなら此所で朽ちる訳にはいかず、沙霧が日本に必要と称した様には

親自身もその裁定が完了するまではまだ死ねぬと自負している。

今までも例え売国奴の汚名や強硬な精神を非難される事は味わった。此所で折れやれる事を遂行しなければ、彼にも顔向け出来ない」と裁きを求む自らを律し。

沙霧「またしても余所者の力に頼ろうなど、米国の悪事も忘れた傲慢なその血は最早諸悪の根源ツ！」

是親「ぐ、ぬうう…ツ」

その時沙霧の刀がとうとう振るわれる。咄嗟に避けようと試みるも政治家と凄腕軍人の差は埋まる事なく、幸い急所は外れるも脇腹を斬られて流れる血を手で押さえ。

沙霧「…殿下の御心を蔑ろにした重罪、その命を以て償うがいい」

是親「…ツ！」

だが地に足を踏みとどめるだけの余力も無く吐血と共にその身は倒れ、重症を負う中でも意志は一切揺らがず、トドメを刺そうと突の構えを取る沙霧を睨み付けるも既に懐に控えた銃を取る気力も残されていなく抵抗は叶わず。

そんな時、路線裏の向かい側から銃声が響く。

『今のは威嚇だ。これ以上接近するなら当てる』

沙霧「…ツ、やはり護衛が控えていたか…！」

銃弾こそ当たらずも足下など行き手を阻まれ、声のみ聞き届けるも暗闇で狙撃者の姿

は捉えられず。

沙霧「直ぐに裁きに参るッ！」

人数も不明な上増援を考慮した沙霧はやむを得ず一時撤退の為に刀を鞘に納めて身を翻し、傷に苦しむ是親へ容赦なき一言を物申しては反対側へと走り去り。

是親「う……ぐ……ッ」

『……しっかりしろー！』

暗殺者が去るのを確認したかのように入れ替わりで狙撃者と思わしき男が駆け寄り。周囲の警戒をしながら傍に向かい先ず傷口を確認し、その最中には親は閉じていた片目を僅かに開き顔を見ると口を開いて。

是親「……き、さま……は………：刹那……：F……：セイ、エイ……：ッ」

刹那「！何故俺の名を……」

介抱を試みる救援者である刹那が呻き声で己を呼ぶのを聞き届けると改めて是親を見て見開き。

是親「内閣の……情報網を……：悔、るな……：ッ」

刹那「……喋ると傷に障る」

その言葉で殆ど納得した刹那は冷静に諭し。

ガンダムのパイロットが刹那だと知るのは横浜基地のみで、顔まで一致できるレベル

の情報なら恐らくは夕呼経由であると、どういう理由かは推測が及ばないも犯人は凡そ確信に到り。

『動くな！』

兎に角救助を呼ぶべく携帯支給品の通信機を取った時、二人とはまた違う声が路地裏に響き。

刹那「…グレーテル・イエツケルン…」

グレーテル「やはりただの難民ではなかったな」

そちらへ直ぐ様向いた刹那が薄暗くも近い距離により確認出来た声の主を見て呼び、その表情には全く驚きが無く予め来るのが判っていた様子で。

そもそも刹那が此所に来たのは昼間のグレーテルとの対談で不審な傾向が見られると聞いたからだ。それで沙霧と話していた刹那を掴まえ事情を問われ、後は基地内外で不審な挙動が目立つと密告された沙霧を気付かれないよう、要所で別ルートを使い先回りしたり双眼鏡を用いて高台やビルから覗く等組織で鍛えたノウハウを活かし尾行するだけだった。その結果グレーテルの情報通り沙霧は怪しい動きを見せ、最終的には総理暗殺の現場に刹那は急行する事ができた。

刹那「…後にしろ、内閣府に連絡を」

グレーテル「何を…！」

是親「構わ、ん…この男は…違う…ッ」

是親に素性が割れているなら今は好都合と連絡をし掛けたも、更に信憑性の高い人物が来たなら救助連絡をグレーテルに促し。

まだ刹那を疑った様子で応じずに声を上げる手前では親に制止される。

薄暗く刹那しか顔が見えなかったも徐々に目が慣れた事で漸く是親の顔も確認するとグレーテルの方が驚愕の顔を向け。

グレーテル「ッ！な、内閣総理…榊是親!？」

是親「…ガンダムの…パイロット、よ…ッ！」

刹那「…喋るな…」

己を認識したと判れば再度刹那へ向き直り、然しその単語にグレーテルは当然反応する。

グレーテル「ガンダム、だと…？一体どういう…」

ガンダムという単語に構えた拳銃を下ろすと言葉が向けられた先の刹那を見て。

それが意味するところをそのままの意味で捉えられず事態が事態だけに流石に混乱し。

是親「たの、む…ッ、奴を…沙霧尚哉を…助けてくれ…！」

刹那「！」

その名には聞き覚えがあつた。話しの辻褄を合わせるよう頭で整理し、是親が気を失うと今は救助を至急にと思考をやめ。

グレーテル「!…私だ、大至急信号を送つた場所に救助隊を要請しろ。…ああ、総理が撃たれた!内閣にはそちらで対応を頼む!」

それを察したグレーテルが急いで通信機器を取り出し、仲間へと連絡を入れ。

その間に刹那も上着を一度脱いで傷口を覆うよう是親の脇腹にパーカーを巻き付け、上着は生地が厚く使うには適してないと断念して再度着込み。

一枚だけでは足りないかと判断した刹那がグレーテルを振り向いて。

刹那「チイツ、悪いが何か布を…!」

グレーテル「くつ、これで足りるか…!?!」

だがグレーテルも脇腹を覆える程の衣服は殆ど無く、躊躇せずスーツの上着を脱ぐと刹那へ投げ渡し、受け取ると速やかに是親の脇腹へ巻いて辛うじて応急措置を済ませ安静にし。

近場に救急所があつたのか路地裏の向こうから直ぐに救急車のサイレンが鳴り響き。

グレーテル「異国民の我々が現場で発見されたら面倒だ!同志が上手くやつてくれるだろう、今は一時退くぞ!」

刹那「ああ…!」

そしてその音を聞いたグレーテルも現場確保は避けたいとその判断が真に正しいか考察する余裕も無く告げ、刹那も同意しその場から走り出し、その後の是親の安否も含め後回しに今は撤退を優先し。

少なくとも一般救助隊の傍に居れば襲撃も無いだろうと、内閣にも連絡が通れば警備も直ぐ着くはずで、テロが紛れている可能性諸々を考慮した処置を早急に要請せねば等グレーテルは頭を巡らせながら刹那とその場を去っていく。

そうして安全圏まで走り抜けると一旦は息を切らせるもお互い直ぐに整え、逃げた先の建物に入り。

グレーテル先導なので彼女としては此所は安全だろうと刹那も警戒を僅かに緩める、その分グレーテルへの警戒が強まり、それは彼女も同じくして刹那を睨み付けながら口を開き。

グレーテル「…まさか貴様がガンダムのパイロットだったとはな…カマル・マジリフというのも偽名だろうか？」

刹那「……………」

何らかの裏情報取引に使ったであろう工場跡地にて、勝手知ったると照明を自分達の佇む区画だけ灯し。

仮にも総理の言葉ならばとグレーテルの中で話しは鵜呑みになり、刹那をガンダムのパイロットと既に断定して話しを進め。然し問い掛けに刹那は応えず。

グレーテル「沈黙は肯定の証だと捉えるぞ。…貴様、何者だ？」

刹那「…刹那・F・セイエイ。後は横浜基地にでも尋ねてみる…」

グレーテル「横浜基地だと？…：国連軍か。あそこには魔女が居たな…なるほど、確かに…」

質問の意図にガンダム以外での事となんとなく把握した刹那の言葉に合点がいった様子でグレーテルが壁に寄り掛かりながら呟き。

刹那「…東ドイツ所属、第666戦術機中隊、黒の宣告…」

グレーテル「！…知っていたのか」

静かに告げた部隊名に反応したグレーテルは何度目かの驚愕を顔に表し。

刹那「…部隊メンバーまでは把握していない」

グレーテル「そうか…」

唐突に感慨深い表情に変わる彼女に刹那もそれ以降は追求せず、特に会話も問答も無く暫く沈黙した後グレーテルから切り出し。

グレーテル「——そろそろ移動しよう。少なくとも翌朝までは特定の場所に長居しない方がいい」

一先ず互いにある程度素性が知れば次にと提案するも、刹那は反応を示さず。そして――

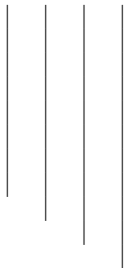
刹那「：グレーテル・イエツケルン、お前に頼みがある…」

グレーテル「：ふつ、ここまで首を突っ込んだしな。話しは移動しながら聞こうか、刹那・F・セイエイ…」

あれ程警戒されていたにも関わらずほぼ肯定寄りの返答を返す。

実際刹那が思っているほどグレーテルは警戒していなく、昔の政治将校の癖で先ずは探りを入れようとした言動で。

何より興味深いのだろう。わざわざ来日してきた本来の目的である、ガンダムが存在が：ならばこの出会いは寧ろ僥倖で。グレーテルの意図は計れずとも協力を取り付けられれば問題ない刹那は互いに名を呼び合うと間も無く移動を再開し。



各所で陰謀渦巻く中でも横浜基地では殺伐とした様子も今はなく、武による慧のヤキソバパン懐柔作戦が行われた翌朝。

結局自分の思いが伝わったか否か判らず顔を洗いながらそれを思う。

現在室内には武しかいなく、純夏は昨夜から夕呼の手伝いの為駆り出され現在は執務室に居る。本人は漸く00ユニットとしての役目が来たかと緊張したも頼まれたのが資料の洗い直して、量が洒落にならないと量子電導脳を活用したのが今朝までの出来事。今は執務室で睡眠モードだと先程夕呼から聞かされたのでそちらは任せて慧の事を考える。

武（結局何も話してくれなかつたな…彩峰のやつ相変わらず考えが読めねえし…やっぱり何も聞かずに信じるべきなのか…？）

『タケル！起きろ！』

顔も濡れたまま思考に更けていると扉からの声にも気付かずに。

冥夜「入るぞ………なんだ起きていたのか」

武「よう。点呼前にうろつくなんてお前……まりもちゃん怒るぞ？」

冥夜「バカ者！先程総員起こしが掛かったのだ！」

武「うわっ!?なんだよ急に：抜き打ち演習か？」

声の主の冥夜が扉を開けて入ってくるなりいきなり説教を受けてたじろぎ。

冥夜「判らん。その後は準即応態勢で自室待機としか聞いておらん」

武「……？」

何はともあれ純夏が部屋に居ない事に一安心する武。同室なのは周知の事実だがやはり誰かに実態を見られるのが照れ臭いのだろう。

冥夜「：そういういえば昨日の件だが：彩峰にも謝っておいた。逆に詫びられてしまったが……」

武「ああ：その事か。俺も話したけどよく判らなかつたな（流石に手紙の事は話せないよな……）」

そうして昨日の慧に関して話し合うと室内に急な警告音が鳴り響き——
『防衛基準態勢2発令。全戦闘部隊は完全武装にて待機せよ！繰り返す——』

武「なんだこれ：!?こんな警報記憶に……：ツ！あつた、思い出したぞ！」冥夜ツ！」

冥夜「判っている！」

素早く対応すると野戦軍装の上着を着込み互いに部屋を後にし、辺りの部隊員も全員慌ただしくも迅速に警報に従い行動していて。

一部蘇った武は冥夜に要件を伝えて司令部へと駆け出していく。

武「そうだよ……何で忘れてたんだよ……ッ！」

全力疾走の末司令部へと辿り着いた武が勢いよくそこへ侵入し。

武「夕呼先生ッ！」

夕呼「白銀!? あんたどうやって此所に……ああ、ここってあたしの部屋より機密レベル低かったわね」

そんなやり取りも程々に、司令部も現在各所でCP達が情報を伝達し更に夕呼の隣にはラダビノツド司令まで控える事態に息を呑むも悠長に構えている暇は当然なく。

武「俺思い……ッ、……帝都内部で軍事クーデターですよね」

夕呼「!……そう、記憶が。どこまで思い出した？」

武「……この後吹雪で出撃するところまでです」

周知を気にして耳許で囁くと夕呼も一瞬見開き、直ぐに平然を装うと互いに密談を始める。

夕呼「そう……」

左近「……こういうのは初めてかね? 白銀武……」

武「うわっ?!……鎧衣課長……やっぱり居たんですか」

すると突如背後より夕呼以外の声が聞こえて、突然で驚くも直ぐに既知感から武は無

意識に眩き。

左近「ふむ、なるほど……」

武「ヤバッ……！」

左近の反応によりその事に気付くと口許を押さええるもそれがまた墓穴を掘つたと自覚し負の連鎖になり。

夕呼「そういうのは後にしなさい。——来るわよ」

武「！」

そして司令部の全員が大型モニターへと振り向き。

沙霧『親愛なる国民の皆様。私は帝国本土防衛軍、帝都守備連隊所属……沙霧尚哉大尉であります』

運命の歯車は再び周り始め、今ここに12.5事件が……——記憶を封じられた武——早期に目覚めた純夏——本来ならこの時帝都に居ないグレーテル——そしてガンダムマイスターである異世界人の刹那を加え——帝都内部によるクーデターが決起される。